

岩手県文化財調査報告書第127集
平泉遺跡群発掘調査報告書

柳之御所遺跡

—— 第68次発掘調査概報 ——

平成21年3月

岩手県教育委員会

柳之御所遺跡

—— 第68次発掘調査概報 ——

序

平泉町に所在する柳之御所遺跡は、平安時代末期の約100年間にわたり北方の王者として繁栄を誇った奥州藤原氏の残した遺跡であり、特別史跡中尊寺境内、特別史跡毛越寺境内附鎮守社跡、特別史跡無量光院跡と並び、当時の平泉の核をなしていた遺跡の一つであります。

本遺跡は、昭和63年から（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター、平泉町教育委員会が実施した一級河川北上川上流改修一関遊水地事業及び国道4号改修平泉バイパス建設事業に伴う緊急発掘調査により、大規模な掘立柱建物跡・園池跡・堀跡などが確認され、また、おびただしい量のかわらけや墨画資料、各種木製品など、質・量ともに卓越した遺物が出土いたしました。そこで、これらの豊富な遺構・遺物により、本遺跡が『吾妻鏡』にみられる「平泉館」であることを、多くの歴史家が指摘するに至っております。

このような経過のなかで、遺跡に対する建設省（現国土交通省）のひとかたならぬ御理解により、平成5年には遺跡の永久保存が決定し、平成9年3月には『柳之御所遺跡』として国の史跡に指定されました。県では、本遺跡が国民共有の貴重な財産であるとの認識から、将来的には史跡公園として整備し、この遺跡を後世に伝えるとともに広く活用していきたいと考え、平成10年度から本格的な発掘調査を実施しております。今年度の調査は第4次三ヵ年計画の2年目の調査となり、平成17年度から本格的に始まった史跡公園に係る整備工事も、1期目の工事は来年度で最終年度を迎えることとなりました。史跡公園につきましては、平成22年の春に暫定公開の予定としております。

また、平成13年4月に本遺跡を含む「平泉の文化遺産」が世界文化遺産の暫定リストに登載されたことを受け、本登録に向け官民一体となった取り組みをすすめて参りました。平成20年6月の世界遺産委員会において、登録は延期となりましたが、平成23年の委員会審議を目指して、気持ちを新たに活動を展開している所であります。

最後に、発掘調査の実施と報告書作成に当たり、ご指導・ご協力を賜りました平泉遺跡群調査整備指導委員会の先生方、文化庁記念物課、（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター、平泉町教育委員会、国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所をはじめ関係各位に深く感謝申し上げます。

なお、本書が埋蔵文化財の保護と平泉文化研究発展の一助になれば幸いと存じます。

平成21年3月

岩手県教育委員会
教育長 法 貴 敬

例 言

1. 本書は、岩手県教育委員会が平成19年度に実施した柳之御所遺跡整備調査事業に係る、史跡柳之御所遺跡の発掘調査の概要報告である。調査期間は平成19年5月7日から10月15日までである。
2. 本事業は、岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課が主体となり、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの協力を得て実施した。

〈岩手県教育委員会事務局〉		〈(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター〉	
生涯学習文化課総括課長	齋藤憲一郎 (H20.3.31まで)	所 長	相原 康二
〃	大月 光康 (H20.4.1から)	調査第二課長	中川 重紀
文化財・世界遺産担当課長	中村 英俊	文化財調査員	西澤 正晴 (担当)
主任主査 (柳之御所担当)	北本 哲夫 (H20.4.1から)		
主任主査 (柳之御所担当)	佐藤 嘉広		
技術副主幹兼主査(柳之御所担当)	斉藤 敏男 (H20.3.31まで)		
文化財専門員 (柳之御所担当)	吉田 充 (H20.3.31まで)		
文化財専門員 (柳之御所担当)	岩渕 計		
文化財専門員 (柳之御所担当)	千葉 正彦 (H20.4.1から)		

3. 遺構の呼称は、昭和63年度に(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した調査時の方法に準拠し、下記の略称を使用した。遺構名の記載については遺構略号の前に調査次数を付してある。なお、複数年次にわたる調査で明らかに同一と認定される遺構については当初の調査時の遺構名を継続して使用した。

SA：塀・柱列 SB：掘立柱建物 SC：道路状遺構 SD：溝・堀 SE：井戸・井戸状遺構
SG：園池 SK：土坑・柱穴の一部 SX：その他 SI：竪穴住居 P：柱穴
例：68SK1 第68次調査の第1号土坑

4. 図版、写真図版、遺物観察表中の遺物番号は共通である。遺物の実測図については一部を除いて1/3を基本にしておりスケールを図中に表示した。遺構遺物写真については縮尺不定である。
5. 本書の編集・執筆は生涯学習文化課柳之御所班で協議の上、岩渕・西澤が行い、編集は西澤が行った。執筆分担は、I序論を岩渕が、それ以外は西澤が担当した。
6. 調査成果の一部については、現地説明会、平泉遺跡群調査整備指導委員会等で公表してきたが、本書の内容が優先するものである。
7. 遺構の埋土観察、遺物の色調観察は、『新版標準土色帖』を参考にした。
8. 自然科学分析については株式会社古環境研究所及び岩手県立博物館への分析委託により実施したものである。
9. 後述する平泉遺跡群調査整備指導委員会の先生方をはじめとして、下記の方々・機関の御協力を得た。

(順不同：敬称略)

岩手県立博物館 平泉町教育委員会 平泉町文化財センター 柳之御所資料館
奈良国立文化財研究所 吉田博行 松本秀明

10. 野外調査・室内整理等に從事していただいた方々の御協力に深く感謝する。
11. 本事業に係る調査で得られた諸記録及び出土遺物は、岩手県教育委員会が保管している。

目 次

I 序 論	1
1 調 査 経 緯	1
2 平泉遺跡群調査整備指導委員会	2
3 調 査 計 画	2
4 今年度の調査	3
(1) 調 査 目 的	3
(2) 調査区の位置	3
(3) 調 査 の 方 法	4
II 調 査 内 容	11
1 遺 構	11
(1) 概 要	11
(2) 建 物 跡	11
(3) 溝 跡	16
(4) 土 坑	19
(5) 低 地	22
(6) その他の遺構	26
2 出 土 遺 物	27
(1) 概 要	27
(2) 土 器 類	27
(3) 国産陶器・須恵器	33
(4) 輸入陶磁器	38
(5) 瓦	38
(6) 土 製 品	38
(7) 石器・石製品	38
(8) 金 属 製 品	40
(9) 木 製 品	40
III 自然科学分析	43
1 出土木材樹種同定	43
2 テフラ分析	44
3 放射性炭素年代測定	47
4 微化石(花粉・珪藻・種実)分析	49
5 樹 種 同 定	52
IV 総 括	59

図版目次

図版 1	遺構	1	調査区全景（南から）	図版12	遺構	1	第1整地層断面
		2	調査区全景（北から）			2	第2整地層上面の状況
図版 2	遺構	1	調査区全景（北半部）	図版13	遺物		（かわらけ）
		2	調査区北半部（西から）	図版14	遺物		（かわらけ）
図版 3	遺構	1	低地部（沢跡）全景（南東から）	図版15	遺物		（かわらけ）
		2	低地部（沢跡）第2面検出状況（南西から）	図版16	遺物		（かわらけ）
図版 4	遺構	1	SK35全体	図版17	遺物		（かわらけ）
		2	SK35南北断面	図版18	遺物		（かわらけ・土師器・須恵器）
図版 5	遺構	1	SK35遺物出土状況	図版19	遺物		（陶器）渥美 1
		2	SK35遺物出土状況（拡大）	図版20	遺物		（陶器）渥美 2
図版 6	遺構	1	48SD1全体	図版21	遺物		（陶器）渥美 3 常滑
		2	48SD1堀断面	図版22	遺物		（須恵器系・須恵器）
図版 7	遺構	1	48SB1（調査区内のみ）	図版23	遺物		（輸入陶磁器）
		2	48SB1	図版24	遺物		（瓦）
図版 8	遺構		48SB1 柱穴断面	図版25	遺物		（瓦・土製品）
図版 9	遺構	1	下駄出土状況	図版26	遺物		（石製品・木製品）
		2	木材出土状況	図版27	遺物		（木製品）
図版10	遺構	1	Bトレンチ北壁断面	図版28	自然遺物		（木材組織断面）
		2	Cトレンチ東壁断面	図版29	自然遺物		（花粉・寄生虫卵）
図版11	遺構	1	Cトレンチ西壁断面（北側）	図版30	自然遺物		（珪藻）
		2	Cトレンチ西壁断面（南側）	図版31	自然遺物		（種実）

挿図目次

第1図	指導委員会概念図	5	第22図	3層出土土器	31
第2図	主要遺構配置図と今年度調査区の位置	9	第23図	4・5・6・7層出土土器	31
第3図	遺構配置図	10	第24図	その他の層出土土器	31
第4図	48SB 1 模式図	11	第25図	渥美 1	33
第5図	48SB 1 実測図	12	第26図	渥美 2	34
第6図	50SB 2 模式図	13	第27図	常滑	35
第7図	50SB 2 実測図	14	第28図	須恵器系陶器	35
第8図	50SB 9 模式図	15	第29図	須恵器	36
第9図	50SB 9 実測図	15	第30図	輸入陶磁器	38
第10図	溝跡断面図	16	第31図	瓦	39
第11図	溝跡実測図	17	第32図	土製品	40
第12図	SK35遺物出土状況	19	第33図	石製品	40
第13図	SK35実測図	20	第34図	木製品 1	41
第14図	低地平面図	23	第35図	木製品 2	42
第15図	低地跡断面 1	24	第36図	柳之御所遺跡テフラ試料の火山ガラス比 ダイアグラム	46
第16図	低地跡断面 2	25	第37図	柳之御所遺跡第68次発掘調査のCトレンチ における花粉ダイアグラム	57
第17図	SX 1 実測図	26	第38図	柳之御所遺跡第68次発掘調査のCトレンチ における珪藻ダイアグラム	58
第18図	SK35出土土器 1	28			
第19図	SK35出土土器 2	29			
第20図	SD4出土土器	30			
第21図	2層出土土器	30			

表 目 次

第1表	平泉遺跡群調査整備指導委員会	5	第15表	柳之御所遺跡第68次発掘調査における珪藻	
第2表	柳之御所遺跡発掘調査年次計画1	6		分析結果	57
第3表	柳之御所遺跡発掘調査年次計画2	7	第16表	柳之御所遺跡第68次発掘調査における種実	
第4表	調査整備指導委員会等の協議内容一覧	8		同定結果	58
第5表	溝跡一覧表	18	第17表	かわらけ観察表	61
第6表	土坑一覧表	21	第18表	国産陶器観察表	63
第7表	不明遺構一覧表	26	第19表	中国産陶磁器観察表	66
第8表	木製品と樹種同定結果	43	第20表	その他土器観察表	67
第9表	テフラ検出分析結果	45	第21表	土製品観察表	68
第10表	火山ガラス比分析結果	46	第22表	瓦観察表	69
第11表	柳之御所遺跡試料と代表的な指標テフラに 含まれる火山ガラスの屈折率	46	第23表	木製品観察表	69
第12表	測定試料及び処理	47	第24表	金属製品観察表	69
第13表	測定結果	48	第25表	石製品観察表	70
第14表	柳之御所遺跡第68次発掘調査における花粉 分析結果	56	第26表	柱穴一覧表	71

I 序 論

1 調 査 経 緯

県教育委員会では、柳之御所遺跡が平成9年に国の史跡に指定されたことから、当遺跡を史跡公園として整備し保存活用を図るため、文化庁・柳之御所遺跡調査研究指導委員会（現平泉遺跡群調査整備指導委員会）の指導助言を得て、平成10年度から主に未調査区域を対象とした内容確認の発掘調査を計画的・継続的に行っており、三ヵ年を1サイクルとし第I期整備対象区域である堀内部地区を中心として調査を実施している。

平成10年度調査（第49次）は、既往の調査で検出されていた園池・中心建物群を囲む堀跡の追跡に主眼を置いて実施した。北上川に面する東辺の堀跡の追跡を行った結果、緊急調査時点で検出されていた部分から7mほど北に向かい延長することが確認された。しかし、さらなる延長については検出されなかった。

平成11年度調査（第50次）は、既往の調査で確認された園池や大型の建物など、堀で囲まれた中枢域の周辺地域での12世紀代の遺構の広がりや密度を確認することを目的として発掘調査を行った。その結果、12世紀代の遺構が現況の河岸縁まで分布し柳之御所遺跡の一部が北上川の侵食で失われていることが確認された。また、堀や井戸状遺構の検出、複雑に重複する掘立柱建物などが多数検出され、複数時期にわたって遺跡が営まれたことが明らかにされた。さらに、「磐前村印」と刻印された銅印と器表面全体を漆の沁み込んだ麻布で被覆されたほぼ完形に近い白磁四耳壺が同一の井戸状遺構から出土した。地名を刻印したと推定される銅印の発見は、奥州藤原氏の統治システムを考察する上で貴重な資料となるばかりでなく、本邦の印章史の空白期を埋める資料として注目された。

平成12年度調査（第52次）では、園池周辺域の中心建物群とは異なるエリアから、建物の軸線の異なる大型の建物が検出された。これは、時期を異にして大型の建物で構成される複数の地域が存在したことであり、柳之御所遺跡の遺構の変遷を考えるうえでは重要な課題を提示した。中心域の移動がおこなわれた背景には、平泉あるいは奥州藤原氏内部での何らかの重要な転換期を反映している可能性が考えられる。

また、柳之御所遺跡は従来まで遺跡のピークが三代秀衡の治世12世紀第三四半期にあることが指摘されてきたが、新たに12世紀初頭あるいは前葉に位置づけられる一群の土器群が発見されたことで、当遺跡が12世紀前半代初代清衡の時期まで遡ることが明らかにされた。これは、政庁「平泉館」の性格あるいは、奥州藤原氏の平泉での確立期の状況を推定させる重要な発見である。

平成13年度調査（第55次）は、新たに園池の北側に大規模な建物の存在が明らかとなり、柳之御所遺跡の中枢施設の移動が想定されるようになった。また、初代清衡の時代である12世紀初め頃のかわらけがまとまって発見され、柳之御所遺跡の開始年代と遺跡の性格、ひいては平泉奥州藤原氏の設立期の問題を考える上で非常に大きな問題を示唆することとなった。

平成14年度調査（第56次）では、遺跡中枢部を囲む2条の堀跡の追跡調査を実施し、遺跡北部より30数基の便所状遺構が集中して見つかるなど、当時の生活の様子を具体的に分析できる資料が発掘された。また、平泉では初めてとなる中国南部の吉州窯製の陶器片も出土し、奥州藤原氏の経済基盤の豊かさを知る手がかりとなった。

平成15年度調査（第57次）は、第23次（平成元年度）の調査で造り替えが確認されていた、園池に

ついでの詳細な規模や造成時期の把握及び堀跡の追跡と門跡の確認、高館南側裾部分の遺構分布の確認を目的として調査を実施した。調査の結果、堀跡及び門跡を確認することはできなかったが、高館南側裾部分も北上川の浸食により遺構が失われていること、旧園池の造成時期や北半部の汀線が明らかとなった。

平成16年度調査（第59次）は第3次三カ年計画の初年次で、以前から指摘のあった中心建物群の規模や新旧関係の確定を主な目的として調査を行い、建物規模や遺構の切り合い関係などについて一定の見通しを得ることができた。

平成17年度調査（第64次）は①池に架かる橋、②不明瞭だった池南西部の汀線、③園池東側への施設の広がりを確認する目的で実施された。調査の結果、①橋跡は古段階の園池跡に付随するもので、東西方向に長軸を持ち、桁行7尺（約210cm）間隔、梁行10尺（約300cm）の4間×1間の掘立柱によるものであること、②池南西部は岸と見られる小さな盛り上がりと池底の痕跡を確認し、新段階の園池跡は中島を持つ園池であること、③削平のため残りが悪く、井戸2基、土坑2基、柱穴数基が新たに確認された。

平成18年度調査（第65次）は大型建物跡が集中する中心域西側地区で、堀・柵・門などの遮蔽施設の検出とその付近に位置する掘立柱建物跡の再確認、55SX2の構造把握を目的で実施された。調査の結果、西側調査区では以前の調査で検出されていた9個の柱穴のほかに8個新たに検出され、5間×2間の総柱建物跡（31SB5）であることが確認された。この建物跡は倉町遺跡（平泉町字倉町所在）で検出された「高屋」と解釈される建物跡と類似することがわかった。

平成19年度調査（第68次）は、遺跡東端の低地部についての状況を確認することを目的として行われた。調査の結果、12世紀から近世の整地層（上位）と12世紀の可能性のある整地層（下位）を確認し、下位の整地層のさらに下層からは、10世紀頃の自然堆積層を確認した。この2面の整地層は、流水による削平を受けており、道路跡等の遺構は確認していない。低地部は12世紀当時においても、周囲に比べ一段低い状況が想定され、南からの道路が延びる可能性は低いと考えられる。また、10世紀の自然堆積層の上に整地層が施され、堀跡や運河などが存在した可能性も低いことがわかった。今次の調査では、さらに遺跡南端部の堀跡についても、来年度の準備を目的として調査を実施した。

2 平泉遺跡群調査整備指導委員会

当教育委員会では、平成10年度から柳之御所遺跡の内容確認調査を再開するにあたり「柳之御所遺跡調査研究指導委員会」を設置し、柳之御所遺跡及び平泉遺跡群の発掘調査及び調査研究に対して指導助言を得てきた（第1図）。平成12年に「平泉の文化遺産」が世界文化遺産の暫定リストに追加掲載されたことから、会の名称を「柳之御所遺跡調査整備指導委員会」に改め、さらに平成15年度は世界遺産本登録に向けたコアゾーン再検討の必要性から「平泉遺跡群調査整備指導委員会」と改称した。平成19年度の委員会・専門部会は第4表の通り開催した。

3 調査計画

柳之御所遺跡の調査は3カ年ずつ計画を立て進めているところである。今年度は第3次3カ年計画の3年目にあたる。第3次3カ年計画は遺跡中枢と考えられる地区を中心に再発掘調査を行い、既往調査の再検証と整備に関わるデータ収集を主な目的として計画されたものである。堀内部地区のさら

に中心と考えられるこれらの地区は整備対象地区でもあることから、再度調査を行って、具体的な情報を得ることが求められている。

来年度以降の計画は、堀内部地区周辺の調査を中心に行う予定であり、堀跡や導入施設などを確認することを主な目的としている。この第4次3カ年計画で堀内部地区の調査は一端中断し、以降堀外部地区の調査へと進んでいく予定である。これまでの計画と今後の計画については第2・3表のようになる。

4 今年度の調査

(1) 調査目的

調査は整備復元に必要な情報を得ることを大きな目的としているため、遺構の内容把握を主としている。そこで、遺構の所属時期の確定・遺構の性格等を把握することを最優先としているが、その保存のために、精査の際の掘削は必要最小限にとどめている。また、半裁を行った遺構についても砂で埋め戻し、保存を図っている。

平成19年度調査(第68次)は遺跡の東端部にあたる、現地地形では周辺よりも一段低い地形となっている低地部を対象として行った。北半を50次の調査区に、南半を49次の調査区に挟まれる部分が調査区となる。調査はこの低地部の12世紀当時の状況について確認することを目的として実施した。特に、この低地部は北西から南東方向に延びているため、南東端が北上川と連結していたと想定し、物資を運搬するために利用されていたのではないかとする考えがあった。そこで、運河等の施設、あるいは堀跡が存在するの点という点に留意して調査を進めた。また、遺跡の南部から今年度調査区の方角に向かって延長されることが予想される道路遺構(21SC1)、堀跡(23SA1)が、低地部まで達しているかという点についても配慮しながら調査を行った。よって、遺構の延長が予想された部分は、かつての調査区について再調査を行っている。なお、遺跡南側に設定した調査区は、次年度の準備であるため本書では触れない。次年度の概報に含めるものとする。

(2) 調査区の位置

柳之御所遺跡は岩手県西磐井郡平泉町平泉字柳御所に所在する。遺跡の背後(北東側)には高館の丘陵、東に北上川、西から南にかけて猫間が淵と呼称される低地によって区切られた河岸段丘上に立地する。遺跡内の標高は南側で25.3m、中心部で27m、北側で32mであり、北東側が高く、南西側に傾斜している。北上川に接しているため遺跡の一部は浸食されたと考えられるが本来どの程度存在していたのかは不明である。この土地は調査前には住宅地と田畑があった場所であり、緊急調査後には公有地化が行われている。

地形図上の位置では国土地理院発行の五万分の一地形図「一関」(NJ-54-14-15)の図幅内にある。遺跡の経度・緯度は北緯38度59分28秒、東経141度7分35秒(日本測地系)である。

柳之御所遺跡は平成9年に史跡指定され、以降順次史跡範囲を広げながら現在に至っている。現時点での指定地面積は88,244.49 km^2 である。

調査地は遺跡を堀の内外で二分したうち堀内部地区と呼ぶ範囲に位置する。これまでの調査によって園池跡が発見され、またその周辺には大型の建物が密集することが判明している(中心建物群と呼ぶ)。そのためこの付近の場所が遺跡の中心地と考えられるようになった。調査地点はこの中心建物群の東側に相当する。この範囲はこれまで37・49・50・57次で、一部が調査されている場所でもある。

柳之御所遺跡周辺の遺跡をみると、西には隣接して猫間が淵跡、無量光院跡が位置し、北には高館跡、南には伽羅御所跡が接している。無量光院跡はこれまで17次にわたって調査が行われており、宇治平等院と酷似した内容が確認されている。伽羅御所跡はこれまで17回の調査が行われているが、調査面積が少ないため内容は明らかとなっていない。しかし貴重な遺物の出土から重要な遺跡であることは間違いのないと思われる。地名から『吾妻鏡』に記載される伽羅御所に比定されることもあるが、発掘調査によって明らかにされているわけではない。

これらの遺跡はいずれも平泉藤原氏関連の遺跡と想定される遺跡であり、柳之御所遺跡と同時期に存在していた可能性も高い。これらが複合して柳之御所遺跡が機能していたと考えられる。

(3) 調査の方法

グリッド 遺構の測量や遺物の取り上げなどの測量作業に際し基準としてグリッドを設定している。このグリッドは(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが1988年から始まる緊急調査に際し平泉町教育委員会と協議のうえ設定したものである(三浦謙一ほか1995)。平面直角座標第X系(日本測地系)をもとにした5×5mグリッドで、南北方向の基準線に対し真北は、西に0°11′振れる。遺跡範囲の北西端辺りが原点(0,0)となる。49次調査まではグリッドの呼称をX座標方向、Y座標方向の順にしていたが、50次調査以降、その順を逆転させY座標方向、X座標方向の順で呼称・記載している。本書においてもこの方式を採用し、たとえば66-70(Y-X)グリッドならばX軸方向が70、Y軸方向が66を示している。

表土掘削・遺構検出 はじめに、調査区内にトレンチを数本入れ、遺構検出面までの深さを確認する作業を行った。それにより、かつての調査の際に生じた排土が厚く堆積していることがわかった。特に、再調査となる範囲には、遺構検出面まで1.5m以上の排土が堆積している状態であった。そこで、バックホーを使い、表土を除去した。表土の除去後は鋤簾などの道具を使用して遺構確認調査(検出作業)を行い、遺構を検出した。

遺構精査・記録 検出作業によって確認された遺構については、史跡地内であるために基本的には掘削を伴う精査は行っていない。しかし、一部の遺構については遺構の年代把握や遺物回収のために、半裁等によって土層観察を行い、遺構の断面を記録した。平面図の実測は5mグリッドを分割した1m×1mのメッシュを使用して手作業で行った。今次の調査で検出された遺構はもちろんであるが、既知の遺構についても、検出したものについてはあらためて平面図の作成を行っている。今年度の調査区は、低地部であり、しかも東側以外は整備のための盛土が施されており、降雨の際には周辺の雨水が調査区内にすべて流入する状態となったため、精査及び実測に予定以上の日数がかかることとなった。写真については6×7版カメラ(モノクロ・リバーサルフィルム)を中心に撮影を行い、適宜35mm版カメラやデジタルカメラを使用して撮影を行った。調査区全景写真撮影に際しては高所作業車を使用して、調査員が撮影を行っている。

遺構名称 今次調査における遺構名は新期の遺構については頭に今回の調査回数である68を付して上記遺構略号を使用した(例.68SB○○)、それ以外の遺構については柱穴を除き旧番号(既調査で命名)で統一し、本書においても使用している。

整理作業 野外調査終了後の平成19年10月29日から平成19年3月31日まで行った。遺物は水洗後に注記→接合→実測→トレース→図版作成→写真撮影の順で作業を行った。遺構については点検、合成の後、必要に応じて第2原図を作成し、その後トレース→図版作成の順で作業を行った。

記載内容 この報告では、今次の調査で検出した遺構と既知の遺構でも精査の際に半裁した遺構に

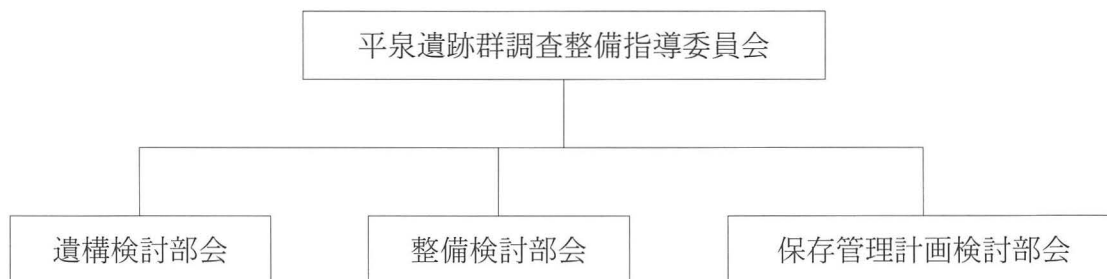
ついて記載している。また、新たに精査した柱穴が含まれる建物跡や新たな知見が得られた遺構についても記載している。いずれ「本報告書」が刊行される予定となっている。

普及活動 普及活動の一環として、野外調査の全容がほぼ明らかとなった10月13日に現地説明会を行った。天候にも恵まれて参加者200名を得た。そのほかに、遺跡を訪れる観光客などに対して、必要に応じて随時現場を公開した。

第1表 平泉遺跡群調査整備指導委員会（平成21年3月現在）

氏名	役職	専門部会
入間田 宣 夫	東北芸術工科大学教授	整備
遠 藤 セツ子	メビウスの会事務局	整備
岡 田 茂 弘	独立行政法人国立歴史民俗博物館名誉教授	保存・整備
小 野 正 敏	独立行政法人国立歴史民俗博物館副館長	遺構
◎河 原 純 之	元千葉大学教授	
○工 藤 雅 樹	福島大学名誉教授	遺構・保存
斉 藤 利 男	弘前大学教授	遺構
佐 藤 信	東京大学教授	保存・整備
清 水 擴	東京工芸大学教授	遺構
清 水 真 一	独立行政法人文化財機構東京文化財研究所文化遺産国際協力センター長	遺構
関 宮 治 良	前平泉町商工会事務局長	整備
田 中 哲 雄	東北芸術工科大学教授	保存・整備
田 辺 征 夫	独立行政法人文化財機構奈良文化財研究所長	遺構
玉 井 哲 雄	独立行政法人国立歴史民俗博物館教授	遺構
西 村 幸 夫	東京大学教授	保存

※◎委員長 ○副委員長 遺構：遺構検討部会、保存：保存管理計画検討部会、整備：整備検討部会



第1図 指導委員会概念図

第2表 柳之御所遺跡発掘調査年次計画1

年次	調査回数	調査面積	調査期間	予算(千円)	備考	
第1次3ヵ年次計画	平成10年度	第49次	500㎡	5月15日～10月31日	18,211	国庫補助
	平成11年度	第50次	1,800㎡	5月13日～10月31日	32,236	国庫補助
	平成12年度	第52次	2,500㎡	5月15日～11月17日	43,341	国庫補助
第2次3ヵ年次計画	平成13年度	第55次	3,100㎡	5月11日～11月13日	46,103	国庫補助
	平成14年度	第56次	4,000㎡	5月13日～11月29日	62,054	国庫補助 ※整備関係予算含む
	平成15年度	第57次	4,000㎡	4月14日～10月31日	67,195	国庫補助 ※整備関係予算含む
第3次3ヵ年次計画	平成16年度	第59次	3,500㎡	5月10日～10月31日	69,317	国庫補助 ※整備関係予算含む
	平成17年度	第64次	2,500㎡	4月15日～9月30日	141,679	国庫補助 ※整備関係予算含む
	平成18年度	第65次	1,500㎡	5月8日～10月31日	64,481	国庫補助 ※整備関係予算含む
第4次3ヵ年次計画	平成19年度	第68次	1,200㎡	5月7日～10月15日	153,801	国庫補助 ※整備関係予算含む
	平成20年度	第69次	1,100㎡	5月7日～12月10日		
	平成21年度	(予定)	1,100㎡			

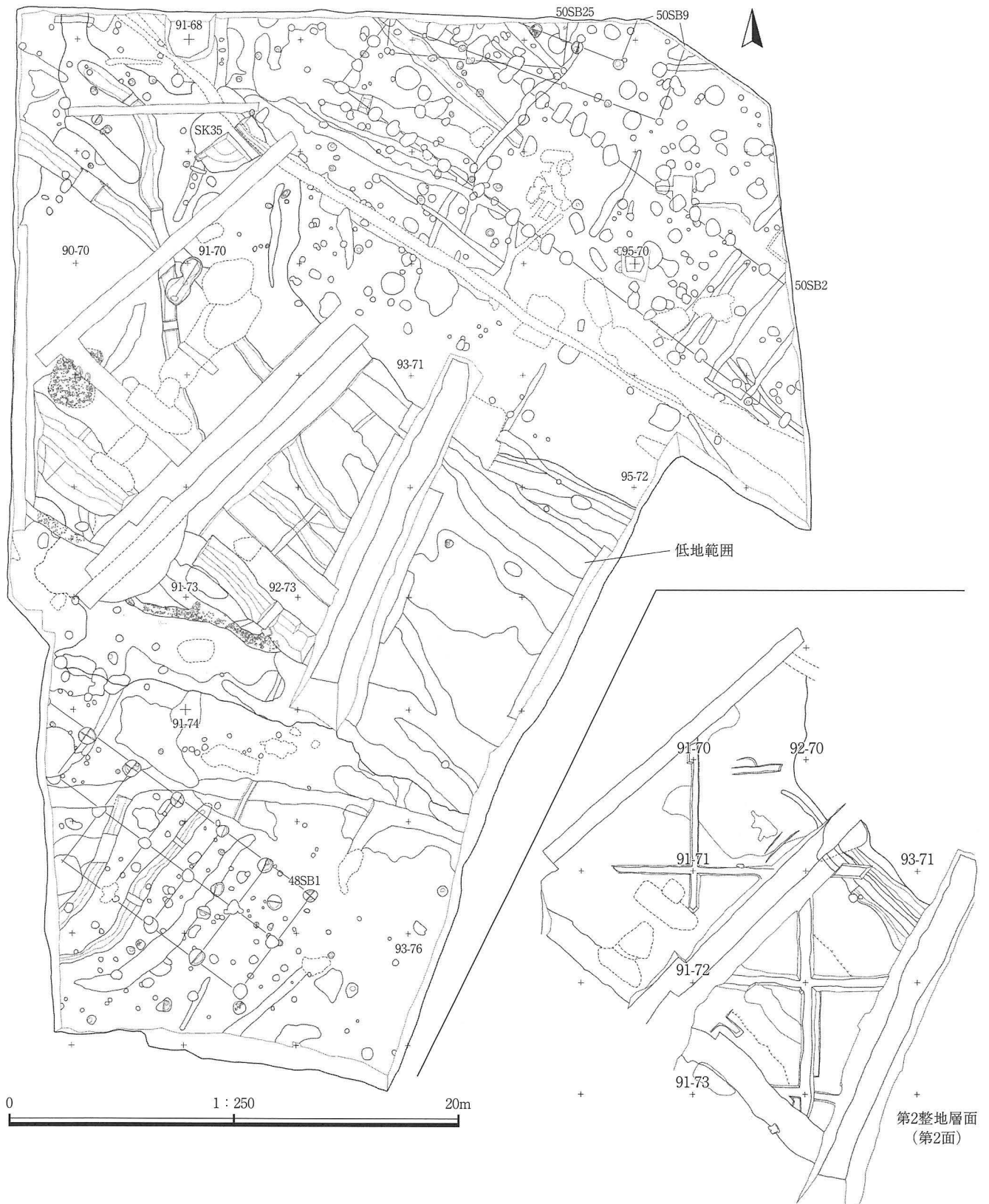
第3表 柳之御所遺跡発掘調査年次計画2

年次	調査回数	調査内容等
第1次3ヵ年次計画	平成10年度	第49次 <ul style="list-style-type: none"> 堀内部地内の中心建物群、特に最大建物である南北棟4間9間42SB1(28SB4と一部重複)の東側地区の解明。 23次調査時の23SB2建物跡の延長確認。 23SA3柱列跡、23SA1堀跡の延長確認。 48SB1建物跡の延長確認と所属時期の検討。
	平成11年度	第50次 <ul style="list-style-type: none"> 池跡及び中心建物群を囲む23SA1堀跡の追跡。 4間9間の南北棟の東側の状況及び建物群の伸長。 42SD1大溝とされていた遺構の時期及び伸展状況追跡。 37次、42次の内容確認調査に確認されていた溝・堀類の時期及び伸展状況の把握。
	平成12年度	第52次 <ul style="list-style-type: none"> 堀内部地区、中心建物群の西側及び北西側地域の解明。 祭祀遺構周辺域の解明。 無量光院との対峙地域の解明。 堀外部地区から延長すると推定される道路遺構の解明。
第2次3ヵ年次計画	平成13年度	第55次 <ul style="list-style-type: none"> 中心建物群の北側地区の解明。 中心建物群を囲むと推定される堀跡の検出。 堀外部地区から延長すると推定される道路遺構の解明。 現存する微高地状の高まりの性格把握。 北上川縁地域の状況把握。
	平成14年度	第56次 <ul style="list-style-type: none"> 第52次発掘調査の際に検出された大規模な堀(内堀)と張出施設を伴う溝の追跡。 北上川右岸縁での大型建物の展開の把握。 遺跡を二分する外堀の追跡。
	平成15年度	第57次 <ul style="list-style-type: none"> 旧池跡の規模と造成時期の把握。 遺跡中枢を囲う堀の追跡調査及び門跡の確認。 高館南側裾部分未調査地域の遺構分布の確認。
第3次3ヵ年次計画	平成16年度	第59次 <ul style="list-style-type: none"> 中心建物群の規模と新旧関係の解明。 園池北部の構造及び規模と造成時期の把握。 北上川縁辺地域の状況把握。
	平成17年度	第64次 <ul style="list-style-type: none"> 園池の構造及び規模と造成時期の把握。 池跡から東側への建物等の展開状況の確認。
	平成18年度	第65次 <ul style="list-style-type: none"> 遺跡中枢を囲う堀の追跡調査及び門跡及び道路遺構の確認。 既調査区の再検証
第4次3ヵ年次計画	平成19年度	第68次 <ul style="list-style-type: none"> 道路遺構(21SC1)及び堀跡(23SA1)の延長確認 遺跡南端外堀の有無の確認
	平成20年度	第69次 <ul style="list-style-type: none"> 遺跡を区画する二重堀の構造や構築時期の特定 既調査で一部確認されている橋跡の追跡調査
	平成21年度	(予定) <ul style="list-style-type: none"> 堀内部北部の便所状遺構の分布 堀内部北端堀の構造確認

※ 第51次・53次・54次・58次・60～63次調査は平泉町教育委員会が実施。

第4表 調査整備指導委員会等の協議内容一覧

月 日	委員会・部会名	協議内容等
H19. 6. 21	遺構検討部会 作業部会	<ul style="list-style-type: none"> ○H19年度整備関連遺跡内容確定予定について ○堀内部遺構出土かわらけ分析結果について ○堀内部遺構変遷の説明 ○堀・土塁について ○出土瓦についての検討のみとおし ○建物遺構の軒表現について
H19. 7. 18～7. 19	第1回 平泉遺跡群調査整備 指導委員会	<ul style="list-style-type: none"> ○今年度整備工事計画について ○柳之御所遺跡堀内部整備対象遺構について ○堀の有無・瓦検討について ○平成19年度整備建物平面表示について ○植栽工事・園池設備・看板等について ○ガイダンス施設基本設計について 報告 <ul style="list-style-type: none"> ・衣川流域遺跡群埋蔵文化財経過報告 ・各市町村等平泉遺跡群調査及び整備計画等について 県立博物館、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター、平泉町教育委員会、一関市教育委員会、奥州市世界遺産登録推進室
H19. 9. 18	整備・遺構検討合同 専門部会	<ul style="list-style-type: none"> ○柳之御所遺跡整備対象遺構及び全体計画の整理 ○建物遺構表示方法について ○修景植栽・遮蔽植栽について ○看板内容について ○CG作成の方法とスケジュール
H19. 11. 19	整備・遺構検討合同 専門部会	報告 衣川流域遺跡群について <ul style="list-style-type: none"> ○柳之御所遺跡堀内部の構造等について ○便所状・井戸状遺構について ○瓦検討について ○建物遺構表示手法について ○植栽について ○看板内容について ○長者ヶ原廃寺跡の整備方針について
H19. 12. 13	遺構検討部会(建築)	<ul style="list-style-type: none"> ○出土壁材・木材調査について ○遺構属性について ○瓦と陶磁器の調査について ○建造物復元基本設計作業工程表について ○表示方法の考え方について
H19. 1. 23～24	第2回 平泉遺跡群調査整備 指導委員会	<ul style="list-style-type: none"> ○H19年度発掘調査成果、H20年度発掘計画について ○第1回指導委員会の課題及び部会等経過報告 <ul style="list-style-type: none"> ・整備対象期及び対象遺構について ・広場、園路表示方法について ・建物遺構表示方法について ・修景植栽及び遮蔽植栽について ・大看板(メイン看板)について ○平成20年度整備工事計画及び課題 <ul style="list-style-type: none"> ・整備工事範囲について ・平成19年度発掘調査区凹地部分の表現について ○今後の整備復元検討について <ul style="list-style-type: none"> ・暫定公開(平成22年春)までのスケジュール ・建物復元基本計画作業工程について ○検討作業の現段階 <ul style="list-style-type: none"> ・出土壁材、木材調査について ・遺構の平面規模、柱穴規模について ・出土瓦、陶磁器の検討について ・便所状遺構について ・井戸状遺構について ○ガイダンス機能等の計画について 報告 <ul style="list-style-type: none"> ・各市町村等H19年度平泉遺跡群調査成果及び整備計画等について 県立博物館、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター、平泉町教育委員会、一関市教育委員会、奥州市世界遺産登録推進室 ・衣川流域遺跡群埋蔵文化財経過報告 ・イコモス現地調査とその後の対応について
H20. 3. 7	遺構検討部会 作業部会	<ul style="list-style-type: none"> ○平面表示柱径と柱径について ○平成19年度調査区凹み処理と28SB4東庭の有無について ○柳之御所遺跡の性格付けについて ○堀内部建物/機能について ○建造物復元検討の作業工程について



第3図 遺構配置図

Ⅱ 調査内容

1. 遺構

(1) 概要

第68次発掘調査において検出された遺構は以下の通りである。

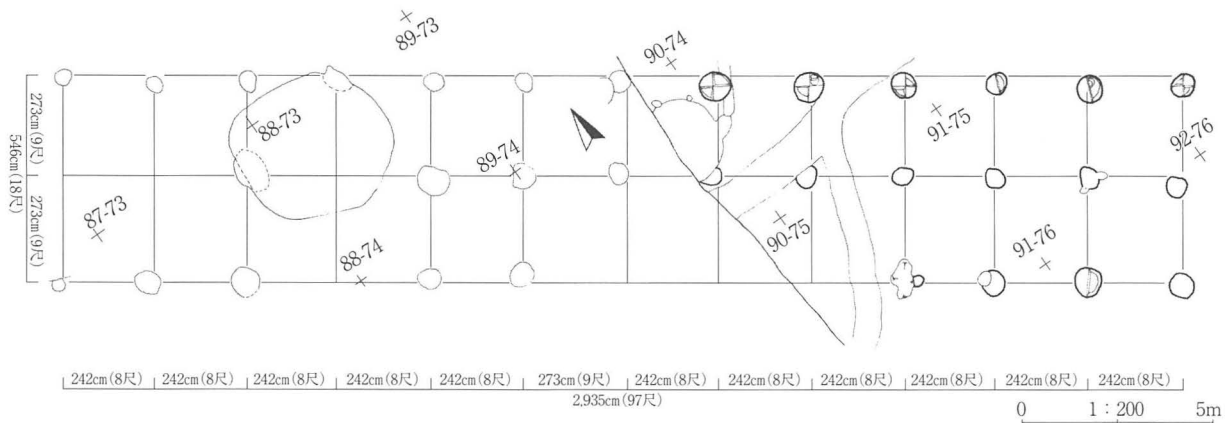
検出遺構	遺構数	検出遺構	遺構数
建物跡	4棟	溝跡	42条
柱穴	476個	土坑	38基
低地（沢跡）	1箇所	不明遺構	7基

今年度の調査区は過去の調査と重複する部分があり、第37次・49次・50次、57次調査によって検出された遺構と重複している部分がある。おもな遺構については最初の調査時の遺構番号をなるべく使用しているが、柱穴については調査時に混乱をきたすおそれが生じたため新たな遺構番号を付与している。

調査目的は、地形の確認を第一とするため、これら検出された遺構については一部を除き精査しておらず、地表面の観察のみとどめた。一部でも調査を行った遺構は、建物跡の柱穴6個、土坑1基のみである。なお、建物跡の内50SB25については前回調査時（50次）と調査所見が変更しなかったため個々では記述・図面を省略する。詳細は50次調査の概報を参照されたい。

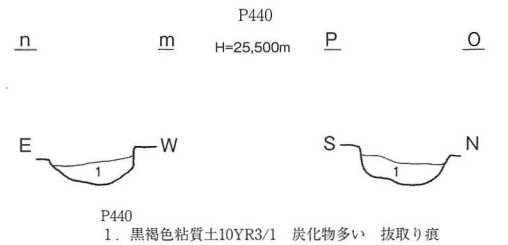
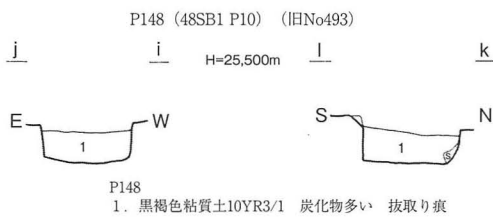
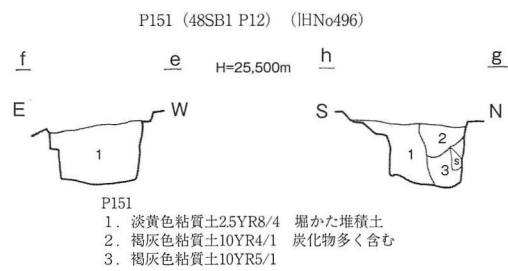
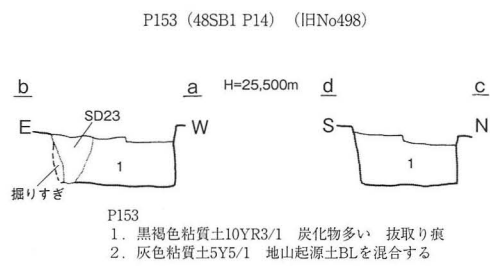
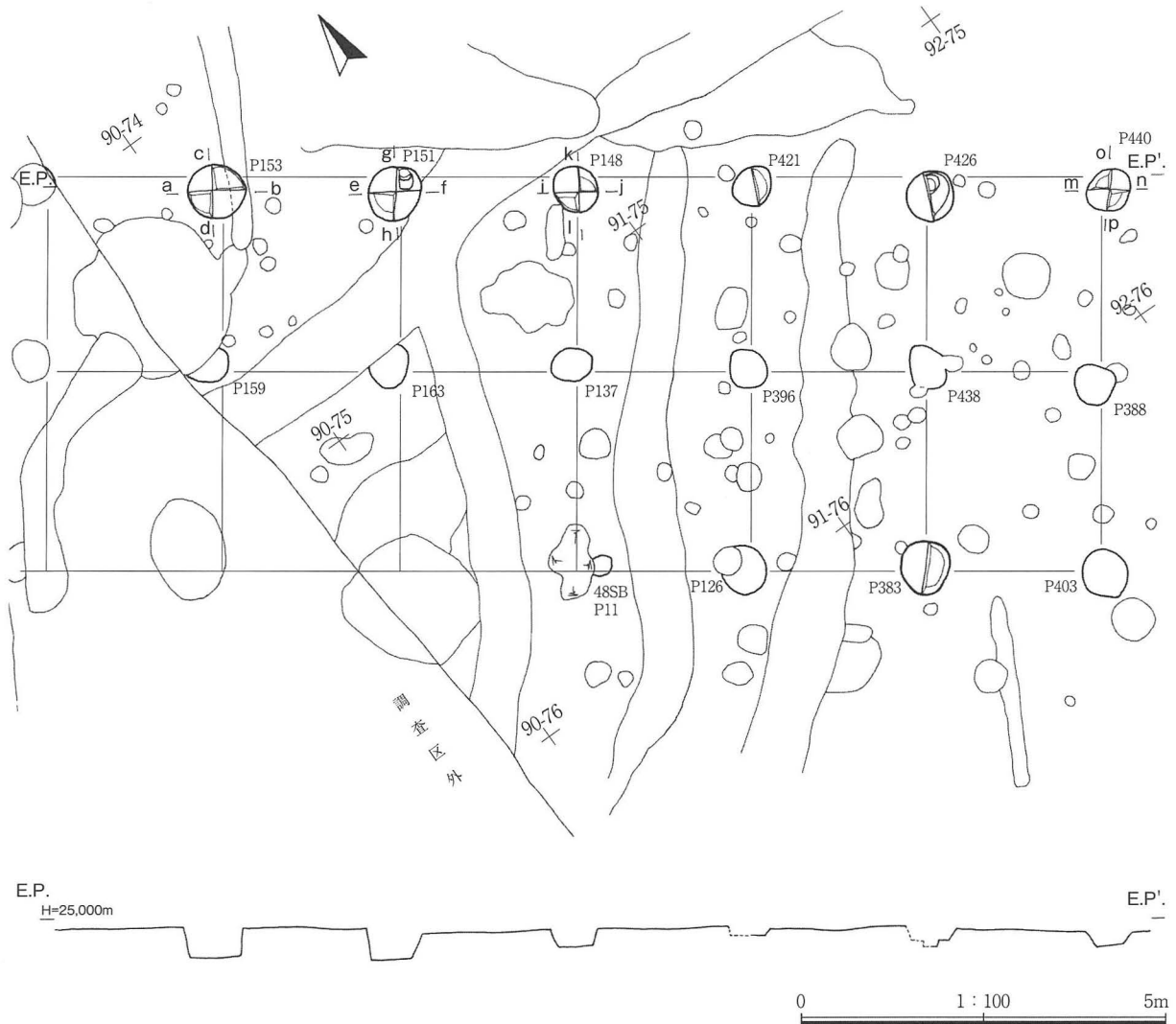
(2) 建物跡 (SB)

48SB 1 48・49次調査で検出された掘立柱建物跡である。87～88-73～76グリッドに位置する。概報（岩手県教育委員会1999『柳之御所遺跡-47・48・49次発掘調査概報-』岩手県文化財調査報告書第104集）では12間×2間と復元された建物跡である。大きく東に傾いた建物跡であるが東西棟と捉えている。今回の調査においては、桁行5間分のみ検出している。おもな遺構との重複関係は過去の報告書では49SE 1 井戸跡と重複し、それよりも古いと記載されている。今年度は柱穴を4個調査したのみである。



第4図 48SB 1 模式図

1 遺構



0 1 : 50 1m

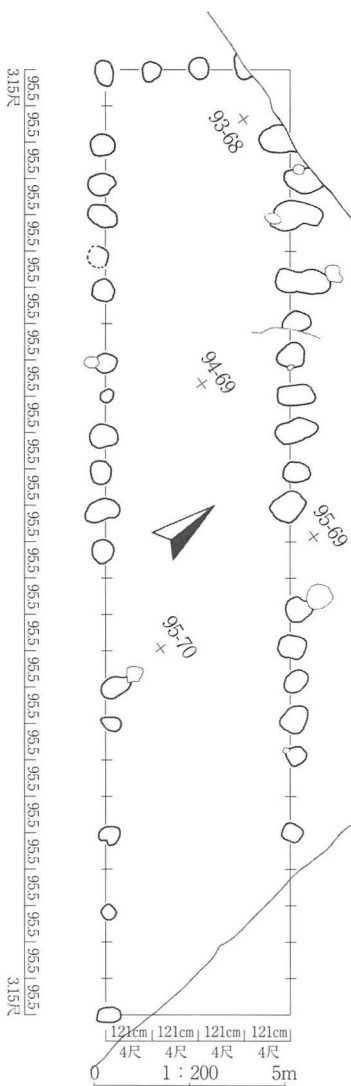
第5図 48SB1実測図

建物の規模は、1棟と考えるなら、東西（桁行）29.35m、南北（梁行）5.46mである。建物の傾きはN-35°-Eであり、遺跡のなかではもっとも東に傾いている。柱間は桁行が8尺（242cm）等間を基本としているが、北から6間目の寸法のみが9尺（273cm）である。したがって、ここを境に6間×2間と5間×2間の2棟に復元できるかもしれない。柱穴の大きさもこの2棟では前者の方が大きい傾向がある。梁行は9尺（273cm）の等間と復元した。

柱穴は8個が過去の調査および今年度の調査においても検出されないが、おもに他遺構との重複により失われていると推定される。各柱穴の平面形は円形を基調とし、規模は径60～80cmのものが多い。深さは断ち割りを行った柱穴からみると、検出面から25～50cmである。底面標高でみると、24.90m前後に位置するが多いが、東端の柱穴付近では24.60m前後と浅くなる傾向にある。柱痕跡は検出時点では検出されなかったが、断ち割りによって断面で確認できた穴が1個ある（P151）。それによると（柱痕跡中央を断ち割ったと仮定して）、径が約30cmである。

調査した柱穴からは遺物は出土しなかった。

建物の一部を調査したに過ぎず不明の点は残るが、比較的規模の大きな建物跡で桁行が非常に長いことを特徴とする。そのため特殊な機能を持っていた可能性が高い。また、建物の方向が大きく東に傾くことも特徴とするが、これは周囲にある近世の建物跡との関連を考えさせるが、48次調査の所見にしたがいとらず、この建物跡を12世紀代の遺構として捉えている。



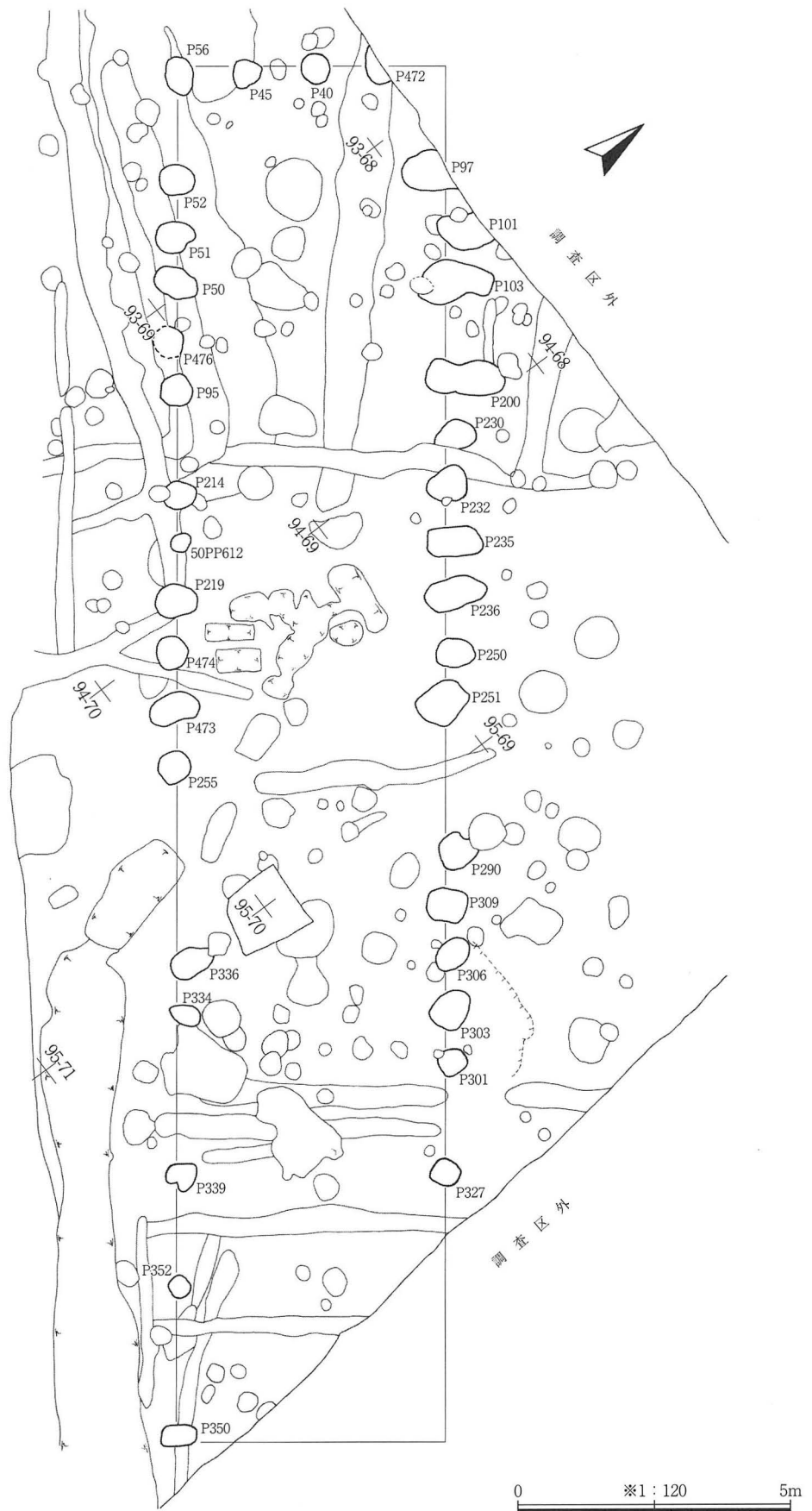
第6図 50SB 2 模式図

50SB 2 50次調査で検出された掘立柱建物跡である。92～94-67～71グリッドに位置する。今回の調査によって、13個の柱穴を検出し、さらに南側約14m延長することが判明した。その結果13間×2間の大きさに復元した。付近には近年までの住宅がありその基礎によって削平を受けている部分が多い。

建物の規模は桁行24.8m、梁行4.8mであり、桁側に非常に長い平面形を呈する。建物の傾きはN-38°-Eと大きく東に傾く。桁・梁行とも半間ごとに柱穴がある構造をとる。この半間ごとの柱間寸法は3.15尺（95.5cm）の等間に復元した。1間では7.3尺（191cm）の等間となる。梁行では半間ごとに4尺（121cm）等間であり、1間で見ると8尺（242cm）等間ということになる。柱穴は調査したものはなく、平面観察のみである。柱穴の平面形は円形から楕円形を呈し、大きさは40～80cmである。柱痕跡は確認していない。

この建物跡は、非常に細長い建物であり、大きく東に傾くことが特徴である。付近には50SB 1など類似する建物跡もあり、構造的特徴からも近世に属する建物跡と推定される。

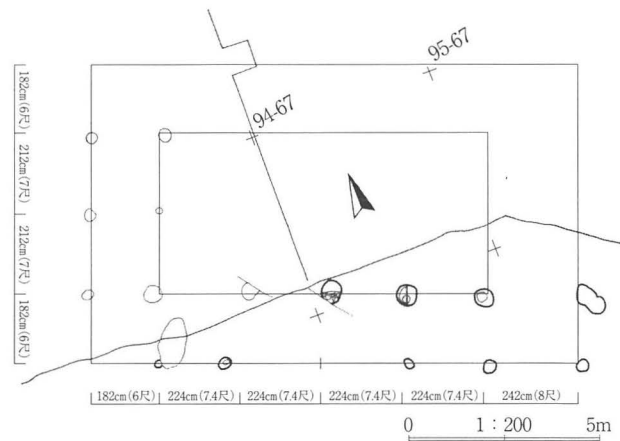
50SB 9 93～95-67～69グリッドに位置する。50次調査で検出された東西棟の掘立柱建物跡である。6間×4間の四面庇建物と復元している。今回の調査範囲にはその一部しか含まれておらず、また50次調査においてもすべての範囲が確認されているものではない。今回は建物跡の柱穴2個の調査を行ったのみである。50SB 2と重複するが、



第7図 50SB 2 実測図

切り合い関係から本建物跡の方が古いことがわかる。

建物規模は桁行13m、梁行7.88mのである。建物の向きはN-20°-Eである。柱間寸法は桁行は、西から182・224・224・224・224・242cmの6・7.4・7.4・7.4・7.4・8尺に、梁行184・212・212・184cmの6・7・7・6尺に復元した。身舎部分は桁行7尺、梁行7尺等間に復元でき、比較的規則的な柱配置をもつ。庇の出は北と南で6尺であるが、西で6尺、東では8尺である。東庇のみ8尺とやや広い庇を有する。



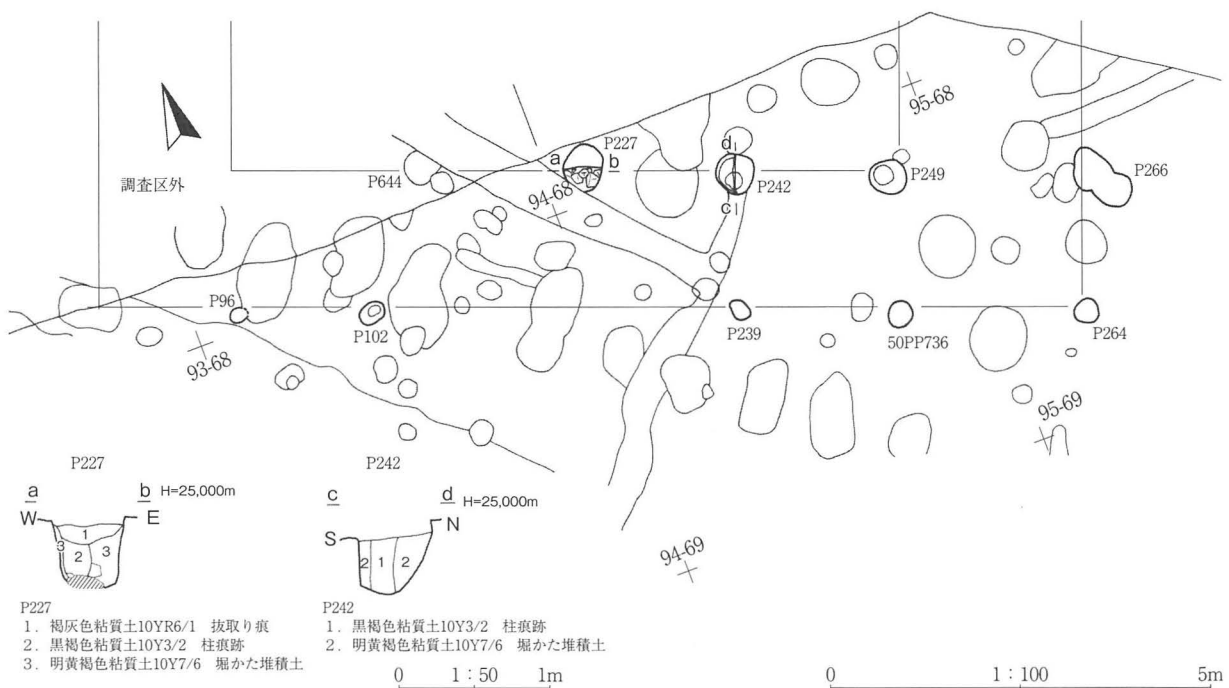
第8図 50SB 9 模式図

柱穴平面形は円形を基調とする形態で身舎と庇で共通するが、平面規模に差が認められる。身舎の柱穴の大きさは50~60cmであるのに対し、庇のそれは30~40cmと一回り程小さい。

今回調査を行った柱穴は身舎を構成する柱穴である。P 227は身舎の南側柱列中央に位置する柱穴で50×60cmの楕円形を呈する。深さは検出面から45cmである。堆積土をみると上部には抜き取りと推定される堆積があるが、下部には径18cmの柱痕跡が確認できる。堆積土中や掘かた底面には径10cm程度の礫が多量に含まれていた。P 242はP 227の東隣の柱穴である。径50cmの円形を呈する。深さは確認面から50cmである。平面あるいは断面で径15~25cmの柱痕跡を確認している。

調査した柱穴からはかわらけ片が5片出土したが、いずれも図示し得なかった。

この建物跡は、一部しか調査を行っていないが、平面形態の特徴やかわらけの出土などを考慮すると12世紀代に属すると推定される。



- P227
1. 褐灰色粘質土10YR6/1 抜き取り痕
 2. 黒褐色粘質土10Y3/2 柱痕跡
 3. 明黄褐色粘質土10Y7/6 掘かた堆積土

- P242
1. 黒褐色粘質土10Y3/2 柱痕跡
 2. 明黄褐色粘質土10Y7/6 掘かた堆積土

第9図 50SB 9 実測図

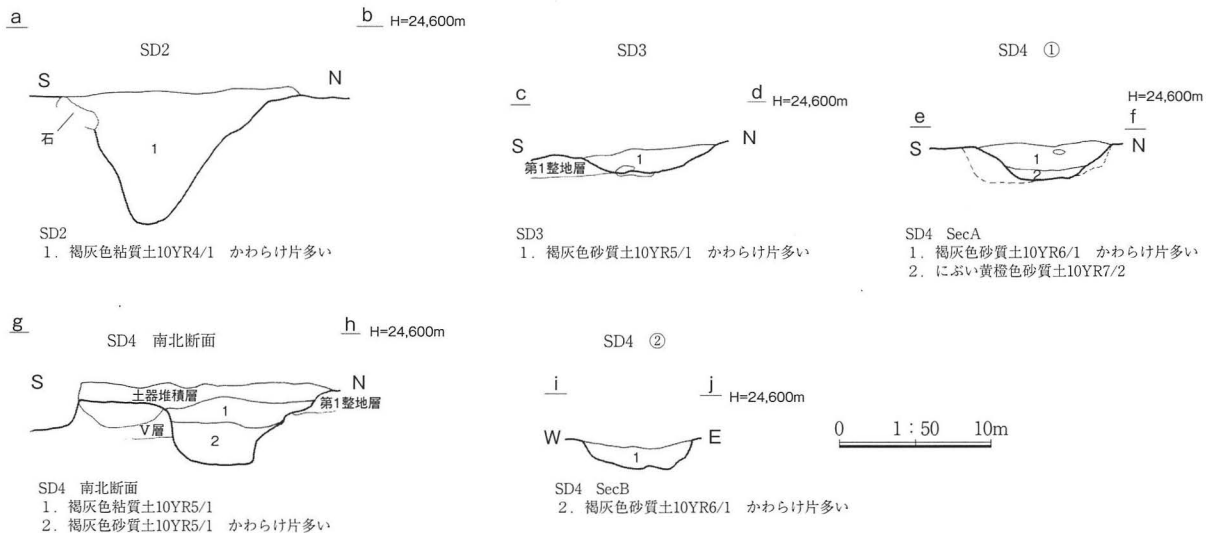
(3) 溝 跡

調査区内からは41条の溝跡が検出されている。過去の調査（42・48・50次）で検出された7条に加え新たに35条の溝跡が追加された。これらほとんどの溝跡は雨水の流れ込みによって形成された自然の雨裂溝や住宅基礎の痕跡と思われるものなどが含まれるが明確に遺構と区別出来ないものが多いため便宜的に溝跡に一括している。その他詳細については表5にまとめている。

なお、今回調査を行った溝跡は68SD 2、3、4のみである。これら溝跡の特徴を列記すると、68SD 2は42SD 1の延長に相当する部分と想定される。遺物はかわらけのみであるが、55次調査時に近世陶器が出土したことから、近世の溝跡と考えられている。堆積土は付近の溝跡と同様に灰褐色を主体とした砂質土で、大量のかわらけを含んでいる点も共通する。68SD 3・4も砂質土を主体とする堆積土で埋まり、調査区中央の地形が窪んでいるところを通っている。また、溝幅が一定でないことも合わせて雨裂溝と想定される。

68SD25～33については以前の住宅地図と重ねてみると住宅の位置と一致するため住宅基礎部分の可能性が高い。

このほかの溝についても基本的に調査区中央の窪んだ地形に向かって北西から南東方向へ、南西から北東方向へ流れを向けているものが多い。このことから、これらの溝跡の多くは雨裂溝であると考えられる。



第10図 溝跡断面図



第11図 溝跡実測図

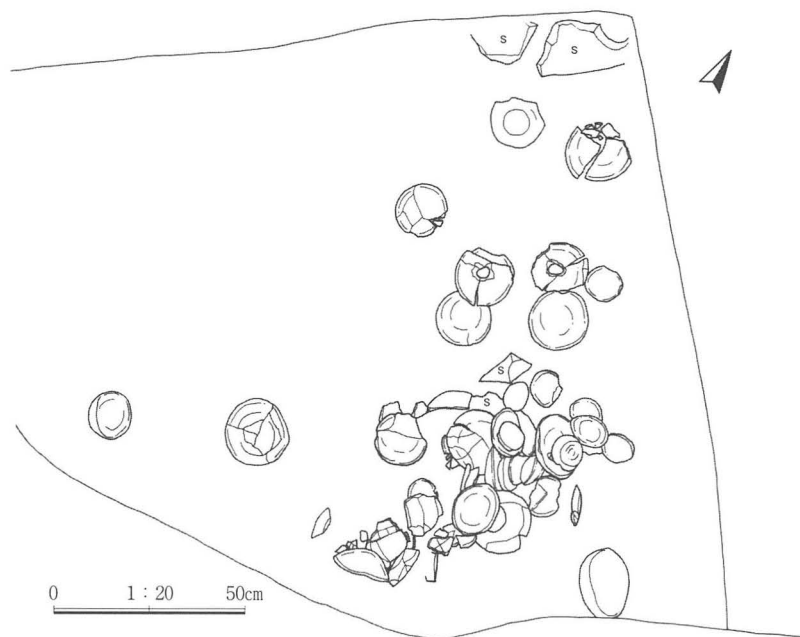
第5表 溝跡一覧表

遺構略称	グリッド	検出回数	重複	新旧関係	方向	調査	特徴・その他	時期
68SD 1	90 - 73・91 - 73	68	68SD8 68SD2	68SD8とは不明 68SD2(42SD1)より新しい	北西から南東へ	検出のみ	礫が多数含まれていることから暗渠か	近世以降
68SD 2 (42SD1)	89・90 - 71, 90・ 91 - 72, 91・92 - 73, 92・93 - 74	42	68SD1 68SD7	68SD1より古い 68SD7とは不明	北西から南東へ	一部調査	灰褐色砂質土が主体の堆積土 大量のかわらけが含まれる	近世
68SD 3	89 - 68, 89・90 - 69, 91 - 70, 92 - 71・72	68	68SD4	68SD4よりも古い	北西から南東へ	一部調査	第1 整地層面上にある 砂質土主体の堆積土 雨裂溝と考えられる	近世以降か
68SD 4	90 - 68・69・70, 91 - 71	68	68SD3	68SD3より新しい	北から南へ	一部調査	第1 整地層面上にある 68SD7と同一かもしれない	近世以降か
68SD 5	91 - 69・70	68			北から南へ	検出のみ	雨裂溝か	近世以降か
68SD 6	89・90 - 68, 90 - 69	68			北西から南東へ	検出のみ	雨裂溝か	近世以降か
68SD 7	92 - 93, 94 - 73	68	68SD2	68SD2と重複するが新旧不明	北西から南東へ	検出のみ	68SD3かSD4と同一かもしれない	不明
68SD 8	89・90 - 72, 91 - 73	68	68SD1	68SD1と重複するが新旧不明	北西から南東へ	検出のみ		不明
68SD 9	93 - 71, 93 - 71・73	68	68SD11	68SD11より新しい	北西から南東へ	検出のみ	第1 整地層上にある	不明
68SD10	93 - 71, 93・94 - 72	68			北西から南東へ	検出のみ	第1 整地層上にある	不明
68SD11	94 - 72	68	68SD9	68SD9より古い	北西から南東へ	検出のみ	第1 整地層上にある	不明
68SD12	93 - 71, 94 - 71・72	68	68SD13	68SD13より新しい	北西から南東へ	検出のみ	第1 整地層上にある	不明
68SD13	93・94 - 71	68	68SD12	68SD12より古い	北西から南東へ	検出のみ	第1 整地層上にある	不明
68SD14	92 - 70・71	68	68SD15	68SD15より新しい	北西から南東へ	調査済み	第2 整地層上にある 雨裂溝の可能性高い	近世以前
68SD15	92 - 70・71	68	68SD14	68SD14より古い	北西から南東へ	調査済み	第2 整地層上にある 雨裂溝の可能性高い	近世以前
68SD16	92 - 91	68			北西から南東へ	調査済み	第2 整地層上にある 雨裂溝の可能性高い	近世以前
68SD17	92・93 - 68, 93 - 69	50	68SD36 68SD19 68SX4 柱穴	68SD36より古い 68SD19とは不明 68SX4とは不明	北西から南東へ	一部調査	「L」字形に屈曲する	不明
68SD18	92 - 68, 93 - 69	50	68SX4 68SD19 68SD20 柱穴	68SX4とは不明 68SD19より古い 68SD20より古い	北西から南東へ	検出のみ	「L」字形に屈曲する	不明
68SD19	91・92 - 68, 92・93 - 69	50	68SX4 68SD17 68SD18 68SD20 柱穴	68SX4より古い 68SD17とは不明 68SD18より新しい 68SD20より新しい	北西から南東へ	検出のみ	「L」字形に屈曲する	不明
68SD20	92・93 - 69	50	68SD17 68SD18 68SD19 柱穴	68SD17・18より新しい 68SD19より古い	北西から南東へ	検出のみ		不明
68SD21	91 - 76	68	柱穴		南西から北東へ	検出のみ		不明
68SD22	91 - 76	68			南西から北東へ	検出のみ		不明
68SD23	90・73・74	68	48SB 1 68SK32 68SK28	48SB 1よりも古い 68SK32よりも古い 68SK28とは不明	南西から北東へ	検出のみ		不明
68SD24	95 - 68	68	柱穴		西から東へ	検出のみ	調査区外へ続く	不明
68SD25	94・95 - 69	68			北東から南西へ	検出のみ	住宅基礎に関連か	現代?
68SD26	95 - 69・70, 96 - 69	68	柱穴		北東から南西へ	検出のみ	攪乱により一部破壊 住宅基礎に関連か	現代?
68SD27	95 - 70, 96 - 69	68			北東から南西へ	検出のみ	攪乱により一部破壊 住宅基礎に関連か	現代?
68SD28	95 - 70	68			北東から南西へ	検出のみ	攪乱により一部破壊 住宅基礎に関連か	現代?
68SD29	95 - 70, 96 - 70	68	68SD33	68SD33より古い	北東から南西へ	検出のみ	攪乱により一部破壊 住宅基礎に関連か	現代?
68SD30	95 - 70, 96 - 71	68	68SD31 柱穴	68SD31より古い	北西から南東へ	検出のみ	調査区外へ続く 住宅基礎に関連か	現代?
68SD31	96 - 70・71	68	68SD30 68SD33 柱穴	68SD30より新しい	北東から南西へ	検出のみ	調査区外へ続く 住宅基礎に関連か	現代?
68SD32	95 - 70	68	柱穴		北西から南東へ	検出のみ	住宅基礎に関連か	現代?
68SD33	95・96 - 71	68	68SD29 68SD31	68SD29より新しい 68SD31とは不明	北西から南東へ	検出のみ	住宅基礎に関連か	現代?
68SD34	95 - 71	68			北西から南東へ	検出のみ		不明
68SD35	93・94 - 71, 94 - 70	68	68SD12	68SD12より古い	北東から南西へ	検出のみ		不明
68SD36	93 - 68・69, 94 - 68	50	50SD3 50SD2 68SD17 柱穴	50SD3とは不明 50SD2・68SD17より新しい	北東から南西へ	検出のみ		不明
48SD 2	90 - 74・75	48	48SD 4	48SD 4とは不明	南西から北東へ	一部調査		不明
48SD 3	90 - 75・76, 91 - 74・75	48	柱穴		南西から北東へ	一部調査		不明
48SD 4	90～93 - 74	48	48SD 2 68SK27	48SD2とは不明 68SK27より古い	西から東へ	一部調査		不明
48SD 5	90 - 76, 91 - 75	48	柱穴		南西から北東へ	検出のみ		不明
50SD 2	92 - 67・68, 93 - 68	50	68SD36	68SD36より古い	北西から南東へ	調査済み	調査区外へ続く	不明
50SD 3	93 - 67, 94 - 68	50	68SD36	68SD36とは不明	北西から南東へ	調査済み	調査区外へ続く	不明

(4) 土 坑

土坑は調査区内に37基を確認している。1基のみを一部調査し、その他は検出のみを行った。そのため平面での観察により便宜上約50cm以上の円形から楕円形を呈するものを仮に土坑と一括しており、柱穴やその他の遺構を含んでいる可能性がある。調査した土坑SK35以外については表6にまとめている。

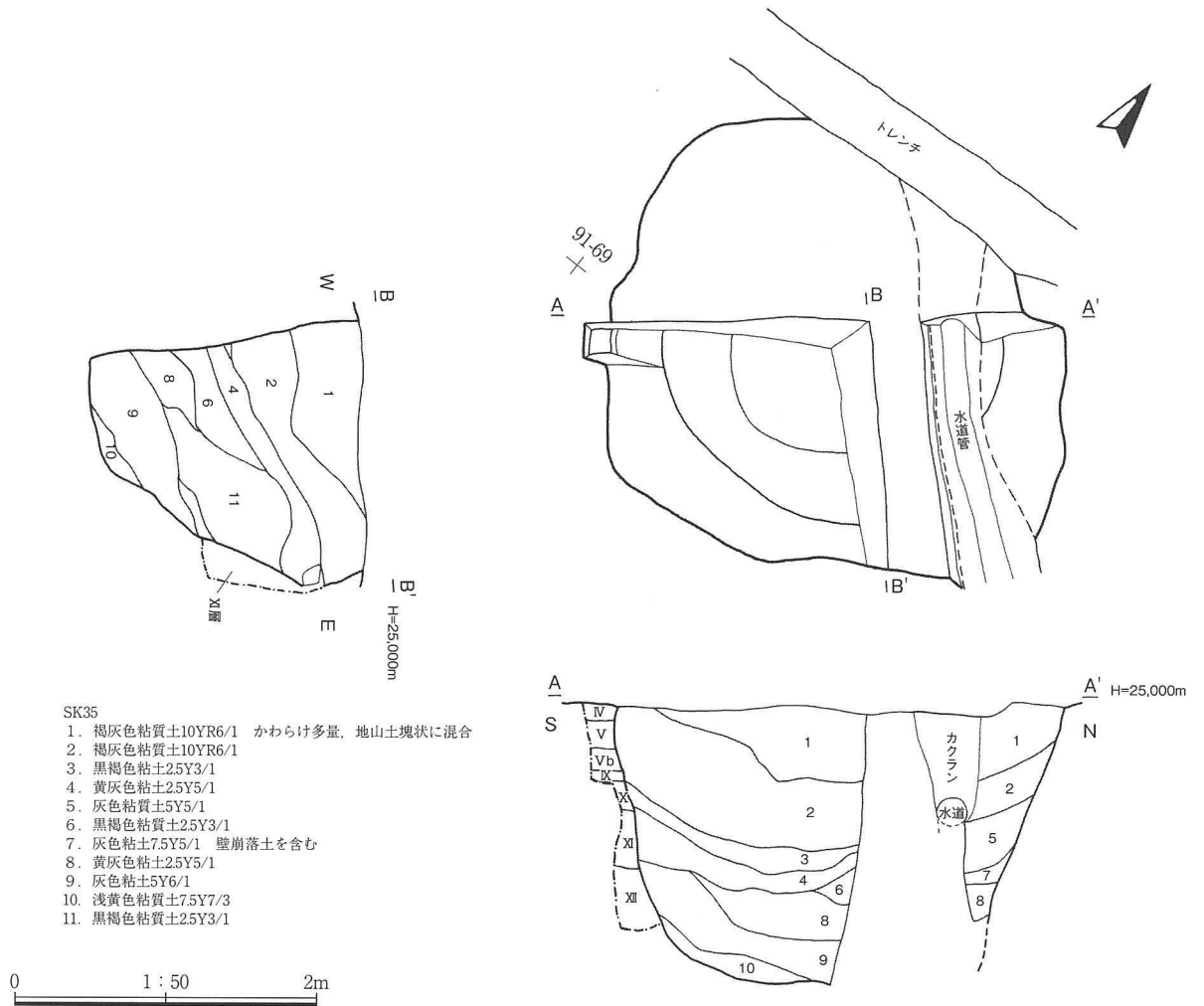
SK35 調査区北側、91-68～91-69グリッドにまたがって位置する。堀跡50SA10と重複しているが、それよりもSK35の方が新しい。また、水道管により、一部が破壊されている。平面形はややいびつな円形を呈し、大きさは径3.0mと大型である。深さは調査した部分では、確認面より180cmである。堆積土は9層に区分した。低地に掘り込まれたこともあり、5層以下については全体的にグライ化している。6層以下は基本的に自然堆積と考えられるが、それよりも上位層については地山を起源とする黄褐色ブロックを多く含んでいることから人為堆積と考えられる。最上層である1層からは完形土器を多く含む多量の土器が出土した。底部穿孔土器も含んでいるが、出土状況から一括に廃棄されたと考えられる。そのほか下層の巻き上げと考えられる土師器片なども出土している。遺構の上部は削平されており、どの層より掘り込まれたかは不明であるが、調査時では4層以下に掘り込まれ12層まで達している。この土坑では、最上部にまとまったかわらけが出土しており、本来これにともなうものではないと考えられ、また、この前後の堆積片はかなり乱れている。このことから、攪乱の可能性も考えられるが、他時期の遺物を含まないため、埋没過程の最終段階で廃棄されたものと捉えた。こ



第12図 SK35遺物出土状況

1 遺構

の土坑は、通常遺跡から発見されるそれよりは規模が大きく、むしろ井戸跡に近い規模である。地山と低地との境に構築されていることから、井戸跡の可能性も十分ある。しかし、井戸跡の諸例と比べると形態など異なる点もある。完掘もしていないためここでは機能については不明としておく。この遺構の時期については第1整地層との関係が不明瞭であるため確かなことはわからないが、出土土器を重視すると12世紀代に位置づけられるであろう。



第13図 SK35

第6表 土坑一覧表

遺構略称	グリッド	検出回数	重複	新旧関係	調査	大きさ	その他	時期
68SK 1	欠番							
68SK 2	92-68, 93-68	50			検出のみ	116×106		不明
68SK 3	93-68	50			検出のみ	70×59	焼土が周囲に	不明
68SK 4	94-67	50	68SK5	68SK5より新しい	検出のみ	106×(88)	調査区外へ続く	不明
68SK 5	94-67・68	50	68SK4	68SK4より古い	検出のみ	90×80		不明
68SK 6	94-68	50			検出のみ	84×80	柱穴の可能性あり	不明
68SK 7	94-68	50			検出のみ	84×82		不明
68SK 8	94-69・70	68			検出のみ	116×40		不明
68SK 9	95-68	68			検出のみ	(86)×80	調査区外へ続く	不明
68SK10	95-69	68			検出のみ	114×90	不整形な平面形を呈する	不明
68SK11	95-69	68	P318	P318より新しい	検出のみ	112×(90)		不明
68SK12	95-71	68			検出のみ	146×128		不明
68SK13	96-71	68	68SD31	68SD31より古い	検出のみ	(60)×(30)		不明
68SK14	94-70	68			検出のみ	84×80	攪乱により一部破壊されている	不明
68SK15	93-70	68			検出のみ	(226)×194	不整形な平面形を呈する、攪乱により一部破壊	不明
68SK16	92-70	68			検出のみ	104×100		不明
68SK17	92-70	68			検出のみ	116×(76)		不明
68SK18	91・92-76	68			検出のみ	180×(112)	不整形な平面形を呈する	不明
68SK19	92-76	68			検出のみ	154×128	不整形な平面形を呈する	不明
68SK20	93-75	68			検出のみ	68×42		不明
68SK21	91-75, 91-76	48			検出のみ	58×36	48P56	不明
68SK22	90-76	48	48SD5 P451	48SD5より古い P451より古い	検出のみ	85×52		不明
68SK23	90-76	48			既調査	70×60	柱穴の可能性あり	不明
68SK24	90-74・75	48			検出のみ	130×98		不明
68SK25	89・90-75	48	48SD2	48SD2とは不明	検出のみ	174×(110)	調査区外へ続く	不明
68SK26	89・90-75	48			検出のみ	78×36		不明
68SK27	90-73・74, 91-74	48	48SD4	48SD4より新しい	検出のみ	(458)×286	不整形な広がりをもつ	不明
68SK28	89-74	48	P159	P159より新しい	検出のみ	220×(172)		不明
68SK29	90-74				検出のみ	80×25		不明
68SK30	89・90-73	68	P189 68SK31	P189, 68SK31より古い	検出のみ	(154)×86		不明
68SK31	90-93	68	68SK30 68SK32	68SK30より新しい 68SK32より古い	検出のみ	120×70		不明
68SK32	90-73	68	68SD23	68SD23より新しい	検出のみ	122×70		不明
68SK33	89-72	68			検出のみ	78×48		不明
68SK34	91-69	68			検出のみ	154×(44)	トレンチにより一部破壊される	不明
68SK35	91-68・69	68	50SA10	50SA10より新しい	一部調査	340×312	多量のかわらけが出土	12世紀代
68SK36	91-68	68			検出のみ	76×42		不明
68SK37	91-68	68	50SA10	50SA10より新しい	検出のみ	(100)×(70)	トレンチにより一部破壊される	不明
68SK38	94-72	68	68SD11	68SD11より新しい	検出のみ	98×56	第1整地層上にある	不明

(5) 低地（沢跡）

調査区中央に位置する地形的に低い部分全体をさす。表土・盛土除去後、低地部分では地山が北と南側からそれぞれ中央に向かって落ち込んでおり、代わって4層の暗褐色土が広がっているのが確認された。この暗褐色土（4層）の広がりには図14のように調査区北西端付近からはじまり、南東に向かって曲りながら広がっていき、調査区東端へ広がって延びていくことがわかった。調査区内では幅最大で19.5m、確認した長さは直線距離で36.6mである。この低地部分に大小のトレンチを4つ設定し断ち割りを行った（北からA～Dトレンチ）。Dトレンチについてはほぼ37次調査におけるCトレンチと重なっていたため断面を観察できなかった。調査は低地のほぼ中央に設定したCトレンチの観察を主体としてA・Bトレンチで補足した。いずれのトレンチからも共通の層序が確認されており、層名を統一している（図15・16）。以下ではA～Cトレンチをまとめて記述する。また、90-70・71、91-70・71・72、92-71・72グリッドについては下記の第2整地層面まで一部掘り下げて面的に調査を行っている。

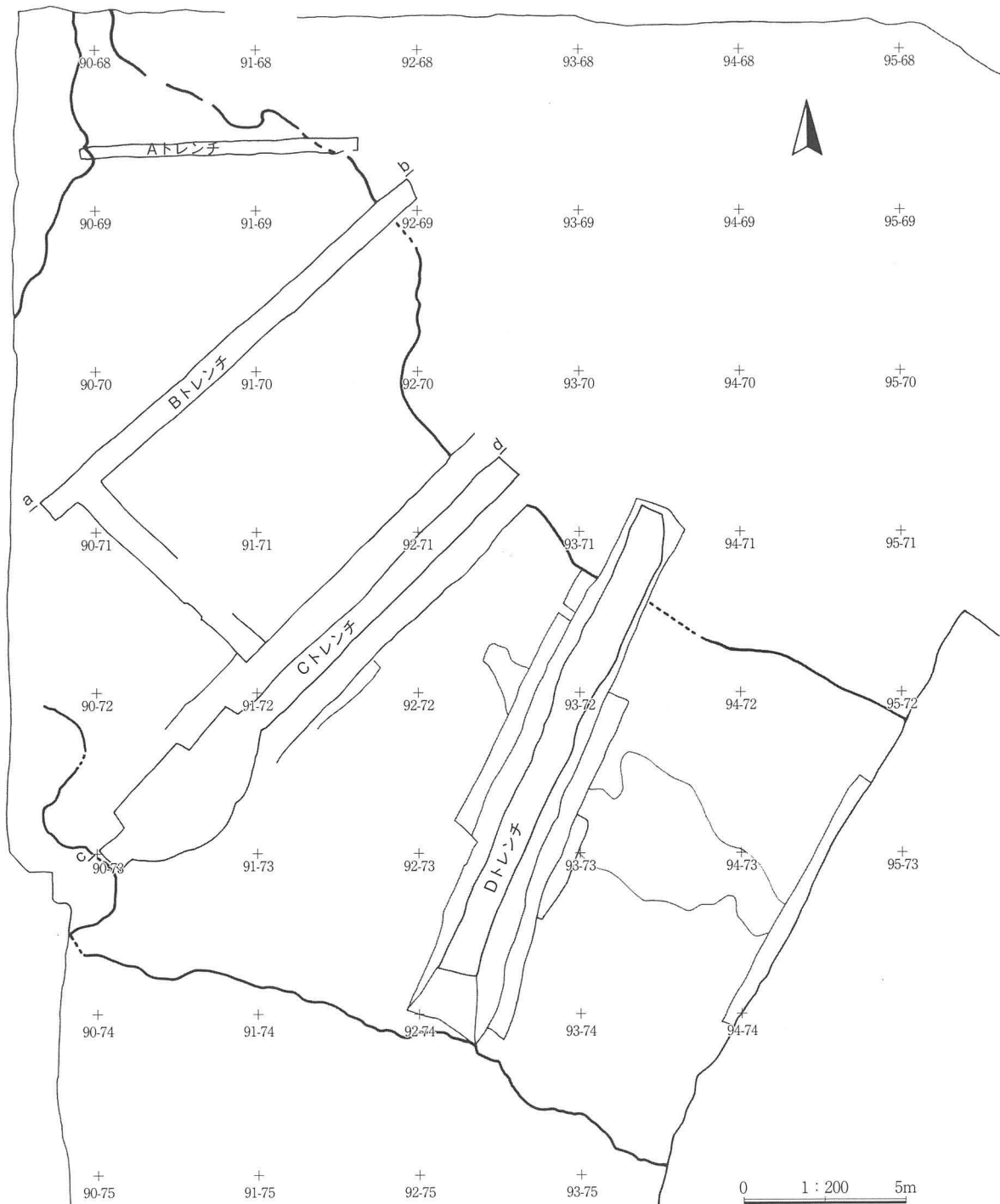
調査の結果、表土（I層）、盛土・排土（II層）を除いて10の層の堆積が確認された。地山である12層は北と南側からそれぞれ落ち込み始めることを確認したが最深部まで掘削することが出来なかった。したがって、Cトレンチ最下層である10b層以下についてはまだ幾層か堆積していると推定される。以下、表土・盛土層を除き、順に記述する。

2層は灰褐色の砂質土を主体とする堆積土であり、すべて12世紀に所属する遺物が出土する層であるが、近世の溝跡や雨裂溝と想定される溝跡の埋土と類似した層相であることから比較的新しい時期に流れ込んだ堆積と捉えた。3層は低地一帯に広がっていたと想定しているが、度重なる流水によって削平されており、調査区内では一部分にしか残存していない。したがって、トレンチによっては存在しない断面もある。この層は黄褐色の地山ブロックを主体とする人為堆積層であることから整地層と考える。これを第1整地層とした。68SD2（42SD1）の近世溝や68SD3・SD4などの雨裂溝はこの層を含む上位層から掘り込まれている。そのため近世以降の時期に年代が降ることはないが、近世かあるいはそれ以前の年代が想定されるであろう。出土遺物は少ないものの近世遺構の遺物は含まないため12世紀代の堆積かもしれない。しかし、層の残存状態が悪く、遺物量も少ないためここでは年代は不明としておきたい。3層の標高は24.30m～24.50mである。

4層・5層・5b層は基本的に同一層であるが、構成物の差により細分した。自然堆積層と考えているが確たる証拠が無く判断が難しい。12世紀の遺構である土坑SK35が少なくともこの層を掘り込んでいることと出土遺物から、これらの層は12世紀代に堆積したと判断できる。

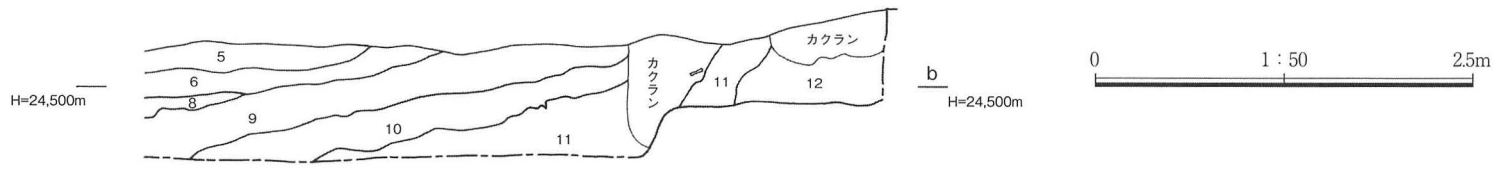
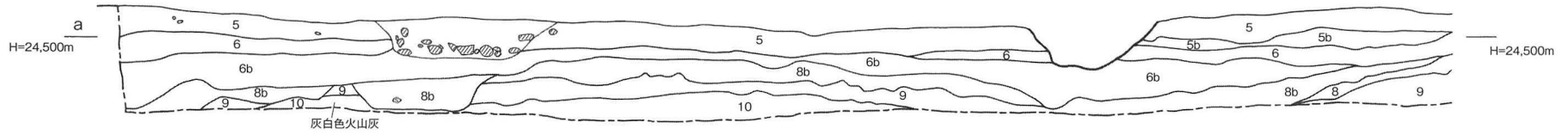
6層（6b・6'層を含む、以下6層と一括）も5層に類似するが、全体的に砂質土を含んでいることを特徴とする。したがって、流水による堆積土と想定した。上位の5層が12世紀の堆積層のため、6層も12世紀の堆積層と想定する。7層は植物遺体層である。

8層は黄褐色地山ブロックを主体とする人為堆積層であり、3層と同様に整地層と考えた。上下の層との層界も明瞭である。これを第2整地層と呼ぶことにする。この第2整地層は比較的良く残存していると思われるが、全体的に流水（6層）によって削られているため層厚が薄くなっている。また、部分的に途切れている場所もある。平面的に掘り下げたグリッドを観察しても、流水の痕跡や流れてきた木本類や木製品が散乱した状態であった。灰白色火山灰の上層であること12世紀の層である6層の下層である点から8層（第2整地層）も12世紀代の堆積土と考えている。この層の標高は23.70m前後である。第1整地層とは60～80cmも比高がある。9層は黒色の粘質土で植物遺体層である。腐食し



第14図 低地平面図

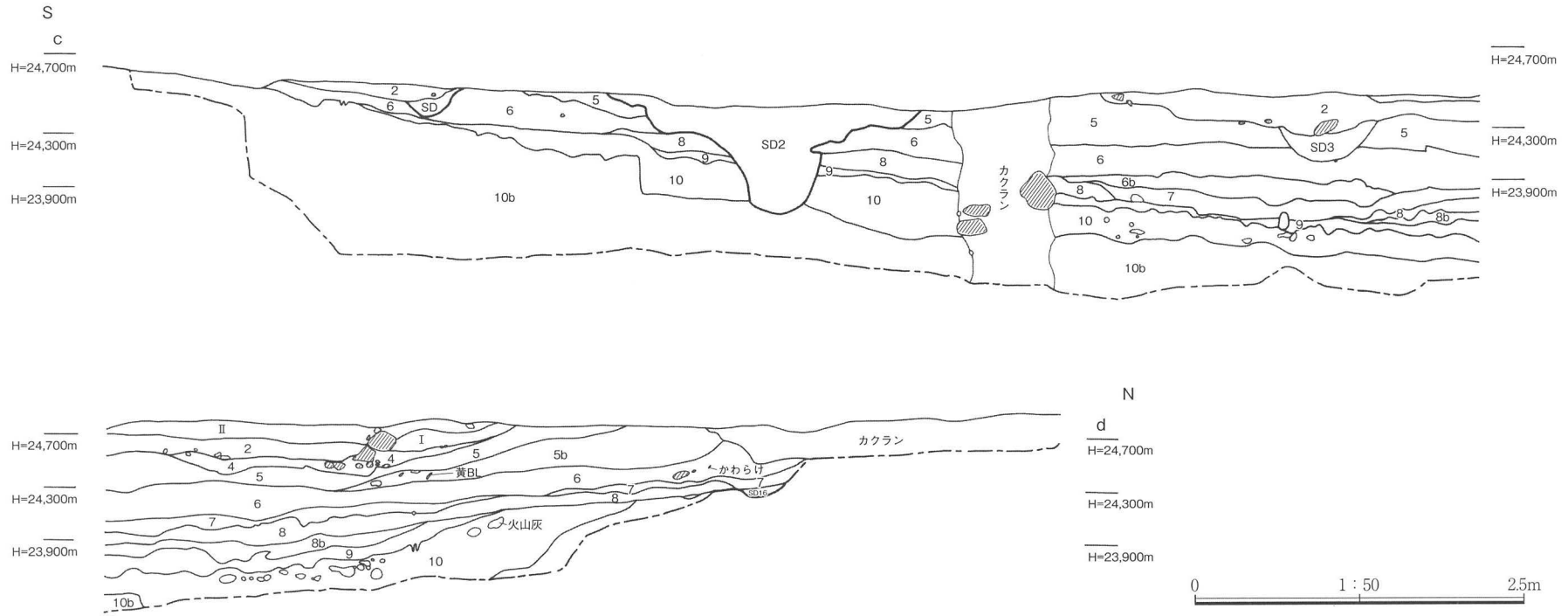
きれずに植物の繊維が重なっている。整地前は草本類等が茂っており、やや乾燥した状態であったと考えられる（Ⅲ－4節参照）。10層（10b層含む）は褐灰色の粘質土で、層中に灰白色火山灰の2次堆積ブロックを含んでいる。分析の結果はTo-aテフラと同定されている（Ⅲ－2節）。また、これは層中に土師器や須恵器が出土していることから裏付けられる。11層は岸際にみられる褐灰色の粘質土である。12層は淡黄色から浅黄橙色を呈するシルトである地山である。



第15図 低地跡断面1

- | | | | | | |
|-----|----------------|-----------------|------|----------------|------------------------------|
| II層 | 褐灰色粘土10YR6/1 | 現代の盛土, 過去調査の排土 | 6b層 | 褐灰色砂質土10YR5/1 | |
| 2層 | 灰褐色粘質土7.5YR4/2 | 多量のかわけ | 7層 | 褐灰色粘質土5YR4/1 | 植物遺体層 |
| 3層 | 黄橙色粘質土10YR8/6 | 「第1整地層」 | 8層 | 浅黄橙色粘質土10YR8/4 | 地山起源のブロック土主体の人為堆積層, 「第2整地層」 |
| 4層 | 褐灰色粘質土10YR4/1 | 多量の炭化物 | 8b層 | 褐灰色粘質土10YR6/1 | VIII・IX・X層の混合土 |
| 5層 | 褐灰色粘質土10YR4/1 | IV層に類似, 炭化物少量 | 9層 | 黒色粘質土10YR1.7/1 | 植物遺体層 |
| 5b層 | 灰褐色粘質土7.5YR4/2 | 上部に淡黄色ブロックを含む | 10層 | 褐灰色粘質土10YR6/1 | 上位に灰白色 (10YR8/2) 火山灰2次堆積層を含む |
| 6層 | 褐灰色粘質土7.5YR4/1 | | 10b層 | 褐灰色砂質土10YR6/1 | グライ化した砂層と植物遺体層の混合 |
| 6'層 | 暗褐色粘質土10YR3/3 | 植物遺体層, VIb層と同一か | 11層 | 褐灰色粘質土5YR4/1 | 沢跡の岸側のみ存在 |
| | | | 12層 | 浅黄橙色シルト10YR8/4 | 地山 |

第16図 低地断断面2



- II層 褐灰色粘土10YR6/1 現代の盛土。過去調査の排土
- 2層 灰褐色粘質土7.5YR4/2 多量のかわれけ
- 3層 黄褐色粘質土10YR8/6 「第1整地層」
- 4層 褐灰色粘質土10YR4/1 多量の炭化物
- 5層 褐灰色粘質土10YR4/1 IV層に類似。炭化物少量
- 5b層 灰褐色粘質土7.5YR4/2 上部に淡黄色ブロックを含む
- 6層 褐灰色粘質土7.5YR4/1
- 6'層 暗褐色粘質土10YR3/3 植物遺体層。VIb層と同一か

- 6b層 褐灰色砂質土10YR5/1
- 7層 褐灰色粘質土5YR4/1 植物遺体層
- 8層 浅黄褐色粘質土10YR8/4 地山起源のブロック土主体の人為堆積層。「第2整地層」
- 8b層 褐灰色粘質土10YR6/1 VII・IX・X層の混合土
- 9層 黒色粘質土10YR1.7/1 植物遺体層
- 10層 褐灰色粘質土10YR6/1 上位に灰白色(10YR8/2)火山灰2次堆積層を含む
- 10b層 褐灰色砂質土10YR6/1 グライ化した砂層と植物遺体層の混合
- 11層 褐灰色粘質土5YR4/1 沢跡の岸側のみに存在
- 12層 浅黄褐色シルト10YR8/4 地山

1 遺構

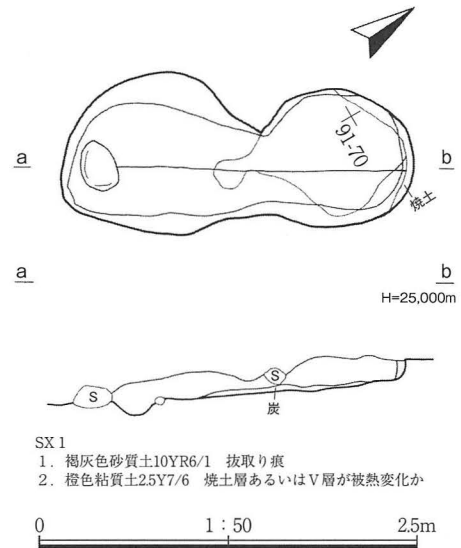
以上のような土層が低地全体に広がっていることがわかった。ほとんどが自然堆積層と考えられるが、3層と8層が地山ブロックを主体とする人為堆積層と捉えた。したがって、現状では層厚がやや薄い整地層と考えている。第2整地層の年代は、To-aテフラブロックが含まれる層上にあるうすい草本類腐食層の直上に位置することから、12世紀に求められる可能性が高い。遺跡の土地利用のあり方は12世紀と近世（17世紀末から19世紀）にほぼ限定できることからその蓋然性は高いと思われる。これに対し第1整地層の時期は下層である6層が12世紀の堆積と想定されるため12世紀以降であると限定はできるが、近世まで降るのかどうか今回の調査では確証がつかめなかった。

12層の地山は低地全体で確認していないが、Cトレンチ付近では現地表面から少なくとも1.6m以上は下にあると予想される。また、図示していないが、Aトレンチについては、深さ約50cmで12層の地山が確認できる。このため12層は北側に行くにつれ底面標高が高くなっていくことがわかる。北側ほど低地が浅くなり、調査区北西端付近で消滅することになる。

以上の観察結果から、12世紀以前この低地に相当する部分は地山12層が大きく落ち込んだ自然の沢跡もしくは湿地跡であることがわかった。この湿地状態は少なくとも灰白色火山灰が降下する10世紀前半まで続いていたと考えられる。そこを12世紀に入ると少なくとも一度は整地を行い、地形を整えたと考えられる。遺跡西側に存在する猫間が淵と呼ばれる低地と類似した構造である。

(6) その他の遺構

調査時にSXと命名した遺構を含む。性格など不明なものを広義的に使用しているため、調査が進めば他の遺構となる場合や遺構ではない可能性もある。本書においては便宜的に使用している呼称である。今回の調査では6基が検出されており、1基のみ調査した。内容は表7にまとめている。



第17図 SX 1 実測図

第7表 不明遺構一覧表

遺構略称	グリッド	検出次数	重複	新旧関係	大きさ	調査	特徴・その他	時期
68SX 1	91-69・70, 90-70	68	68SD4	68SD4より古い	230×110	一部調査	焼土・炭化物を検出, カマド状遺構か	不明
68SX 2	89-68	50・68	68SD3	68SD3より古い	320×(210)	検出のみ	不整形な平面形, 調査区外へ続く	不明
68SX 3	91-68, 91-67	50・68	50SA10	50SA10より古い	250×(85)	検出のみ	不整形な平面形を呈する	12世紀代か
68SX 4	91・92-68	50・68	68SD17 68SD18 68SD19 その他柱穴	68SD17・18・19とは不明	430×330	検出のみ	不整形な平面形を呈する	不明
68SX 5	92-69	50・68	68SX6	68SX6より新しい	275×70	検出のみ	不整形な平面形を呈する	不明
68SX 6	92-69, 93-69・70	50・68	68SX 5 68SK15 その他柱穴	68SX 5より古い 68SK15とは不明	1010×130	検出のみ	黒いしみが広がっている範囲攪乱によって大部分を破壊されている	不明
48SX 1	89・90-75	48	68SK25 48SD2	68SK25より古い 48SD2より古い	(200)×140	検出のみ	不整形な平面形を呈する	不明

() は現状値

2 出土遺物

(1) 概要

今年度出土した遺物の総重量は540.2kg（木製品を除く）になる。そのうち、土器類が494.8kgと総重量うち92%を占める。ついで国産陶器類12.7kg（2%）、輸入陶磁器類0.15kg（0.002%）、となる。出土地点としてはそのほとんどが調査区中央にある低地から出土したものである。遺構出土のものは精査した遺構が少ないこともあり、低い割合にとどまる。低地は周囲より一段低い場所であり、降雨の際には流水がここを流れることもあって、流れ込みによる遺物がほとんどである。したがって、本来は別の地点に存在した遺物と考えられ、原位置を保った遺物ではないがある程度まとまった数量が出土しているため代表的な遺物を抽出して掲載した。

(2) 土器類

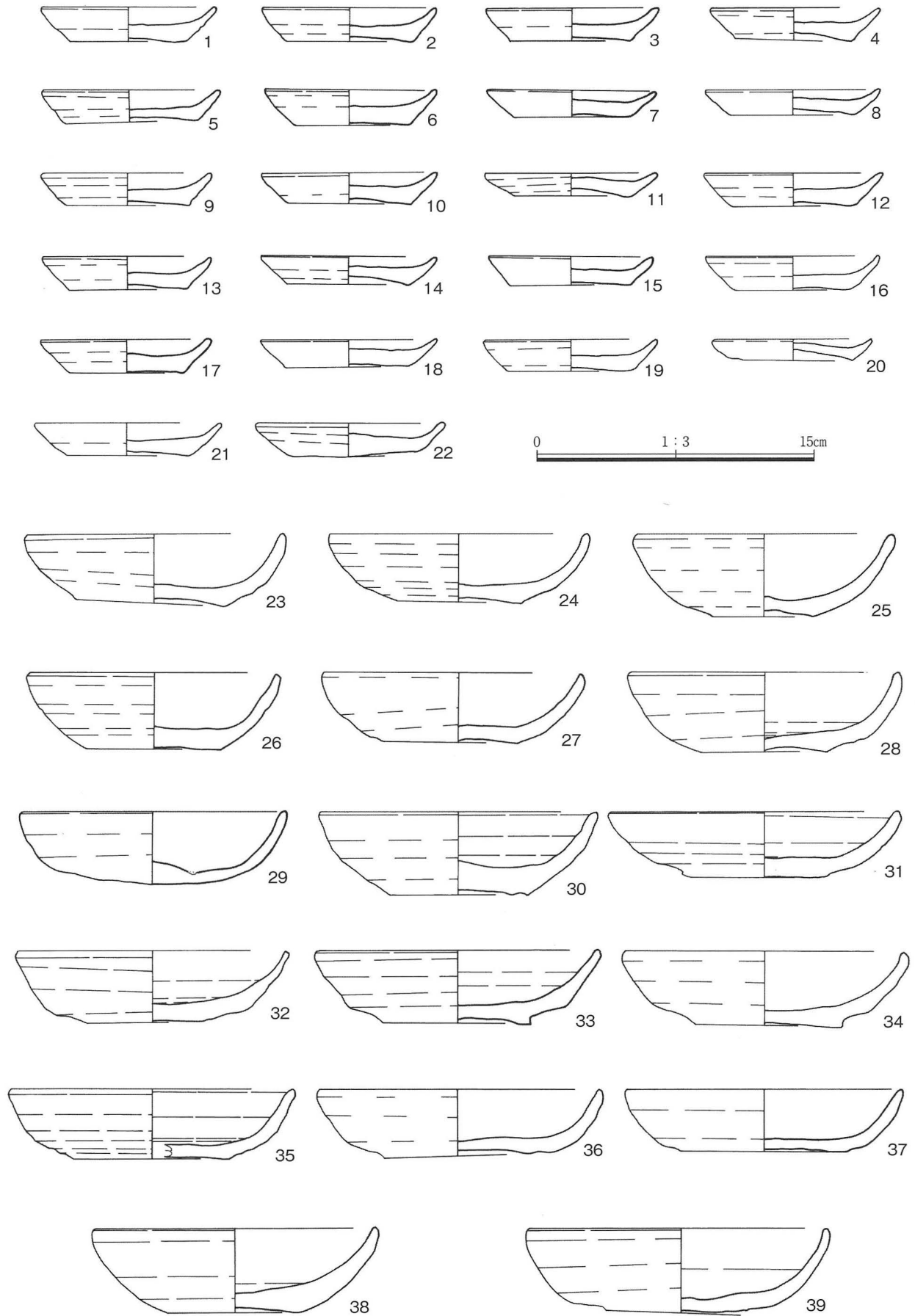
SK35出土土器 SK35からは総重量17.3kgのかわらけが出土している。このうち56点77kgを図化した。このかわらけはほとんどが堆積土上層からの出土であることから土坑の埋没過程の最終段階にまともって廃棄されたと考えられる。かわらけのほかに、記載は別であるが、国産陶器4点が出土している。

1～22はロクロかわらけの小皿である。口径は、9.5cm前後のものがほとんどであり、それ以外でも9.2cm～10.2cmの間におさまる。口径が10cmを超えるのは21、22の2点のみである。また形態も広い底部から緩く外反し、厚い口縁部をもつ点で共通するなど規格性が高い。

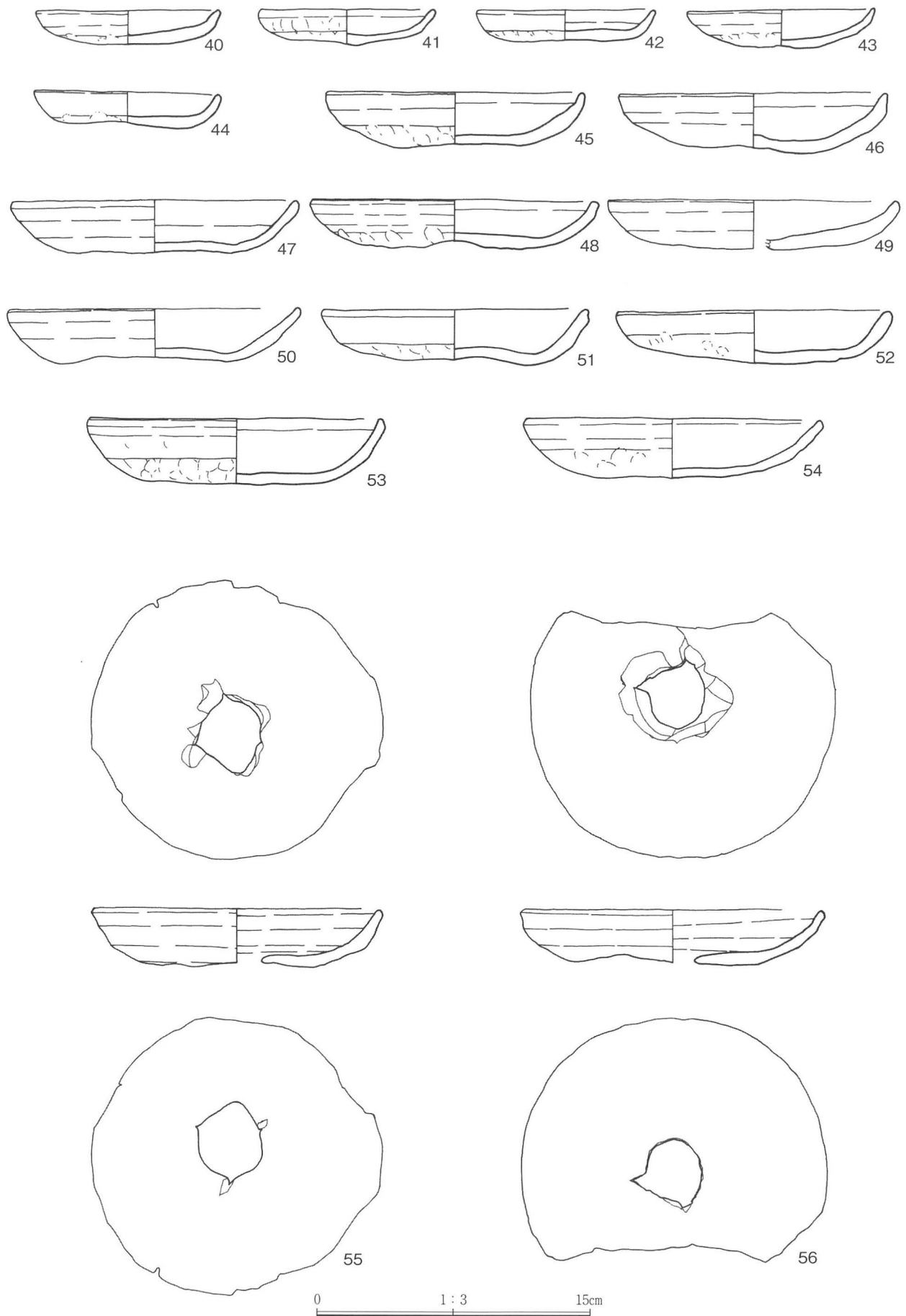
23～39はロクロかわらけ大皿である。口径は14.5cm以下のもの（23～29、32）と15cm以上のもの（30～31、33～39）に大別できる。後者の方の出土数が多い。器高は3.4～4.6cmと1cm以上の幅があるが、口径の大きさと是对応しない。つまり、口径が大きくても器高の低いもの、口径が小さくても器高が高いものが存在する。おおむね器高は4cm前後のものが多い。器形を見ると底部から口縁部までの外形線が底部付近で一度屈曲してから立ち上がる、底部が突出するような形態はわずかに認められる（27、31、32、33、34、35、36、37、39）がその突出度合いは小さい。それ以外は底部から口縁部までの外形線が緩やかにやや内彎しながら立ち上がる皿形の形態をもつ。椀形から皿形への移行期の形態をもつものかもしれない。

40～56は手づくねかわらけである。40～44は手づくねかわらけの小皿である。口径は9.7～10cm、器高も1.8～2cmの間に収まる規格性の高いものである。45～54は手づくねかわらけ大皿である。口径は15cm前後のものがほとんどであり、なかには16cmを超えるもの（53、54）もある。ロクロかわらけに比べても同じかやや大きい口径をもつものが多い特徴がある。器高は3cm前後のものも多く総じてロクロかわらけよりも低くより皿形を呈する形態である。なかには4cmに近い器高を有するものもある（53）。調整技法をみると2段ナデ技法が多く確認できるが1段ナデも少数ながら認められる（51、52）。

55・56は手づくねかわらけ大皿であるが、底部中央に穿孔が認められるものである。いずれも焼成後に孔が穿たれている。口径は55が15.8cm、56が16.5cmと比較的大きく、器高はそれぞれ3.2、3.0cmである。外面調整に2段ナデが、口縁端部には面取りも施される。SK35出土の手づくねかわらけはいずれの特徴も古い様相が確認できる。

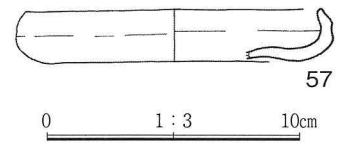


第18図 SK35出土土器 1



第19図 SK35出土土器 2

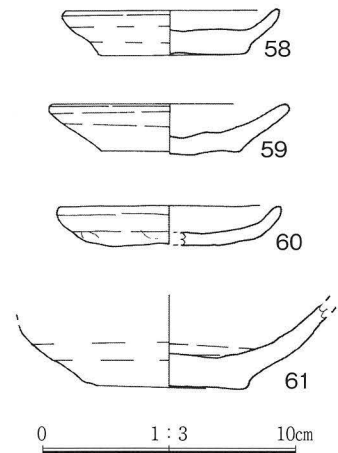
SD4出土土器 SD4からは21kgの遺物が出土しているが1点のみ図化した。57は手づくねかわらけの小皿と考えられるが、器形が通常のものとは異なり極端に内彎した形態をもつ。破片であるためこの部分だけの特徴かどうか不明である。口径11.8cm、器高2.1cmである。



第20図 SD 4 出土土器

2層出土土器 2層からは合計135kgの土器類が出土しているが、すべて流水によって運び込まれたと判断している。この層自体の年代も近世以降から現代までの間に形成された比較的新しい層と考えている。したがって本層出土土器については大量にあるが各時期のものが混合しており一括性は低く、そのため接合作業は行っていない。そのなかで図化できる遺物のみを図示しているため、本層を代表する遺物とは限らない。上記の理由のため参考程度に掲載していると理解されたい。

4点を掲載している。58・59はロクロかわらけの小皿である。口径はそれぞれ8.4、9.4cmで、底部からの外形線が外方に向けて広がる形態を有する。60は手づくねかわらけ小皿である。口径は8.8cmである。体部にはわずかに指オサエの痕跡が残る。61はロクロかわらけの大皿である。口縁部付近は欠損しているが、外形線から類推すると比較的器高が高い碗形を呈すると考えられる。



第21図 2層出土土器

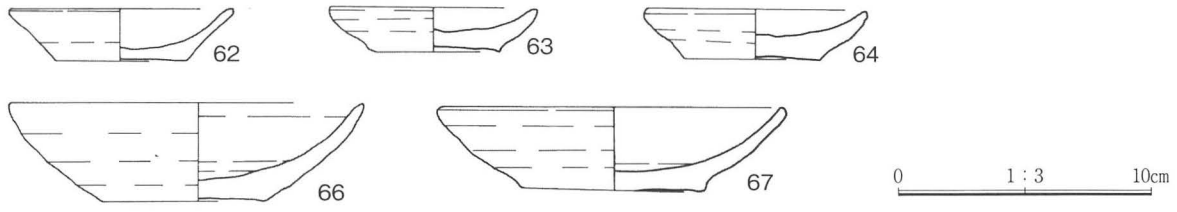
3層出土土器 3層は第1整地層と呼んでいる上位に位置する整地層である。90-70～92-72グリッドを掘り下げた際や各トレンチから出土したものである。そのため、一部を調査したに過ぎないため土器類の出土は少ない(5.3kg)。

62～65はロクロかわらけの小皿である。口径は8cm前後(63)と9cm前後(62・64・65)に2分される。形態をみると、65以外は類似しているが、65は底部が厚いため柱状高台状を呈する。66・67はロクロかわらけ・大皿である。器高はいずれも4cm以下で、皿形を呈するが、66はやや器高が高い。口径はいずれも14cm前後である。その他図示していないが手づくねかわらけの破片が、約60片出土している。

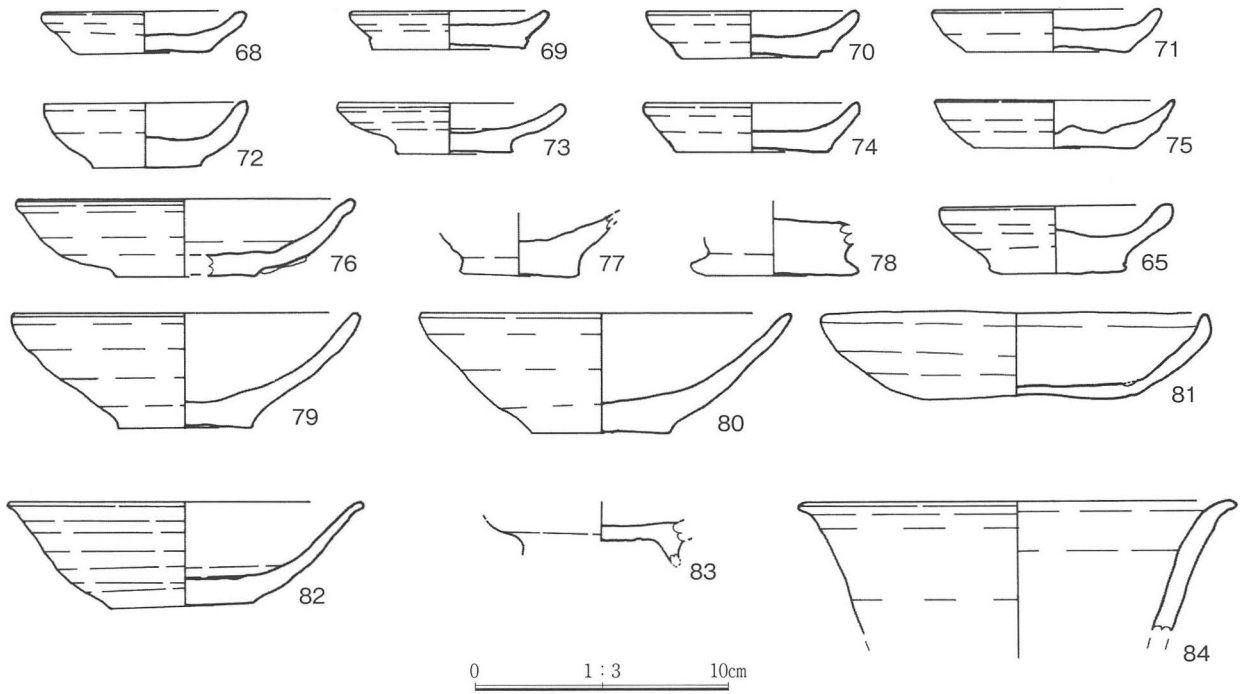
4・5・6・7層出土土器類 第1整地層である3層より下層で、第2整地層である8層より上層、つまり、第1整地層と第2整地層の間にある層を一括した。合計29.9kgの遺物が出土している。

68～75はロクロかわらけ小皿である。口径は8cm前後のもの(68～70・72)、9cm前後のもの(71・73・74・75)の2者に分けられる。形態は72・73は比較的小さい底部からゆるやかに内彎する体部をもつ。比較的器高の高い形態を呈する。68～71、74・75は比較的低い器高であり、大きな底部よりわずかに外反する体部をもつ形態である。

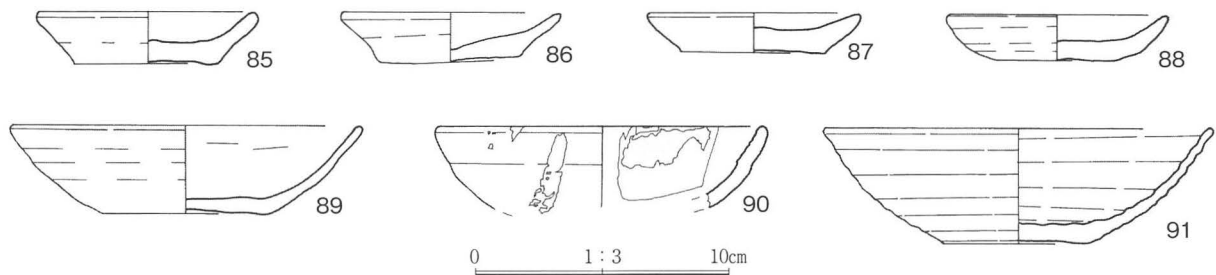
76・77・79・80はロクロかわらけであるが、碗形を呈するもの(77・79・80)と皿形を呈するもの(76)に分けられる。81は手づくねかわらけの大皿である。76と77・79は5層から、80は4層から出土している。また、77は底部破片のためあるいは小皿かもしれない。81は5～6層からの出土である。76は口径が13.5cmで、器高が3.0cmであり、皿形にしてはやや器高が高い。碗形を呈する79・80は器



第22図 3層出土土器



第23図 4・5・6・7層出土土器



第24図 その他の層出土土器

高が4.5cm以上ある。77は破片であるが、椀形のロクロかわらけと推定される。81は、口径が15.0cmであり、手づくねかわらけにしては大きい傾向がある。調整には2段ナデが観察され、椀形のロクロかわらけとの共伴から類推すると、古い形態なのかもしれない。

78は柱状高台の底部である。破片であるため詳細は不明であるが、底部切り離しを糸切りで行っているのが観察される。

82～84は土師器である。82は6b層からの出土の土師器の杯である。復元口径が13.8cm、器高が4.9cmと深い。口縁端部はわずかに外反している。外面調整はロクロナデのみであるが、間隔が非常にせまい。内面には黒色処理が施されておらず、また底部切り離し技法は糸切りである。内外面ともにススが付着する。83は土師器高台杯である。脚部端、杯部を欠損しているため全容は不明である。杯部内面には黒色処理が施されている。6～7層の出土である。84は6層からの出土である。破片であり、全形は不明ながら杯とは異なる形態を呈する。鉢あるいは甕かもしれない。復元口径は17.2cmである。4～7層から出土した土器をみると、椀形を呈するロクロかわらけと手づくねかわらけが4～6層の間で共伴することは非常に興味深い。ただ、同じ6層から土師器が出土するなど、土器の混合があるため、注意が必要である。そのほか、4～7層から、ロクロかわらけ489片、手づくねかわらけ283片が出土しているが、いずれも図示できない小破片である。

その他の層出土土器 上記までに触れた遺構・層以外から出土した土器や遺物取上げの際に一括したものなどをここでまとめて説明する。85～87はロクロかわらけの小皿である。口径はいずれも8.5～8.7cmであり、9cm前後のまとまりに属する一群である。3～4層の出土である。88・89は2～6層のいずれから出土したものである。88はロクロかわらけ小皿で、口径が8.4cm、器高1.8cmである。89は口径14cmのやや大きめのロクロかわらけ大皿である。90は3～7層のいずれから出土したもので、手づくねかわらけ大皿の破片であるが内面に漆が付着しており、製造工程で使用された可能性がある。復元口径は13cmである。

91は須恵器の杯である。口径は15.3cm、器高は4.5cmである。9層からの出土である。

(3) 国産陶器・須恵器

概要 国産陶器は表採・攪乱からの出土を含めて重量12.7kg出土している。そのうち、全点を表に掲載しているが、図示したものはそのうち68点である。遺構や各地点・各層位などから出土した点数が少ないため以下では産地別一括して記述する。

渥美窯産陶器 76点が出土している。そのうち34点を図示した。出土器種としては、壺類や甕類、渥美窯系として山茶碗、小皿（山皿）がある。

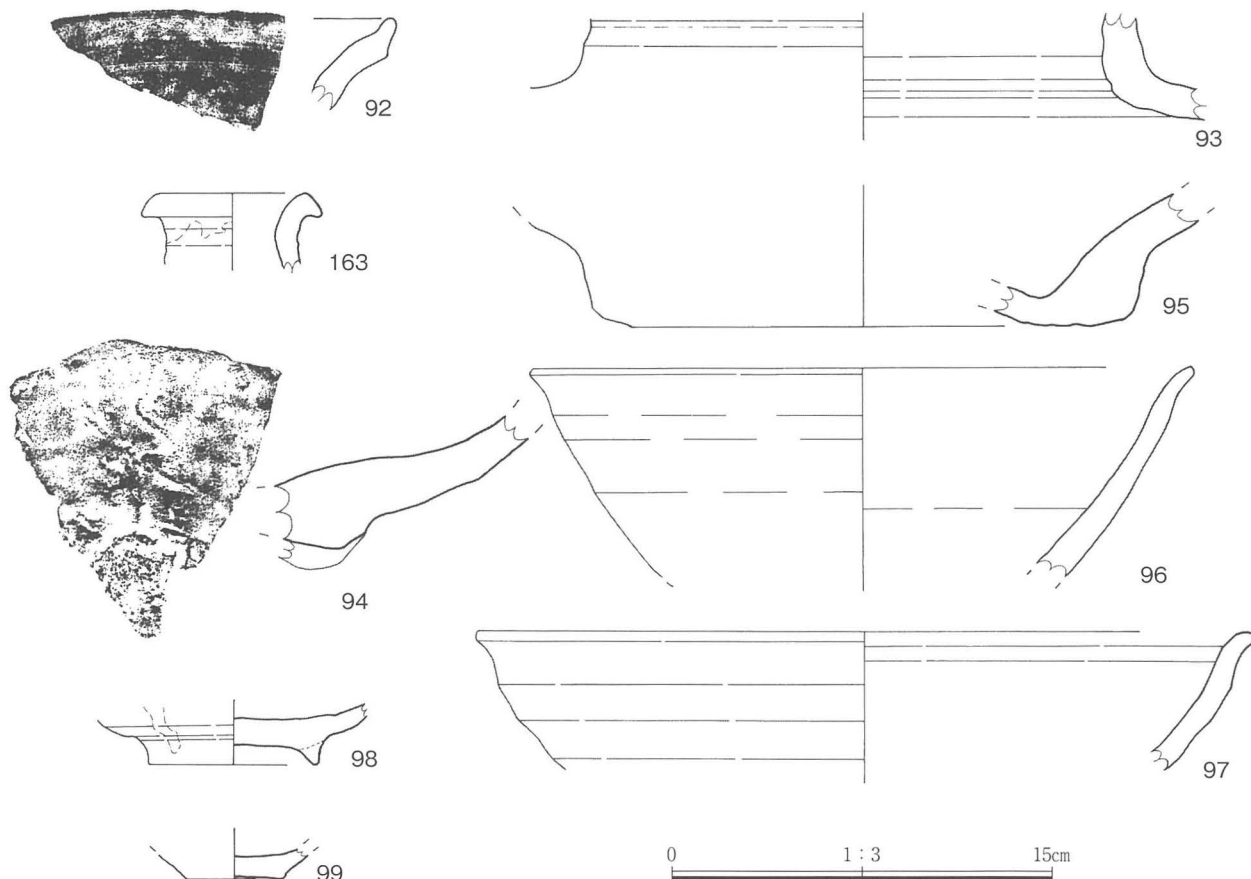
92は大甕の口縁部片である。小片のため口径は復元できなかった。93は大甕頸部片である。94・95は大甕底部片である。95のみ底径を20cmと復元した。96・97は片口鉢の口縁部から体部片である。いずれも小破片のため詳細は不明である。98は山茶碗底部片、99は小皿底部片である。98は低い高台が残存している。外面には自然釉だれが認められる。

100～125は大甕の体部片である。いずれも押印が施されているものであるが、破片が小さく、押印の単位や位置などが判明するものはすくない。3～4種類の押印が確認される。

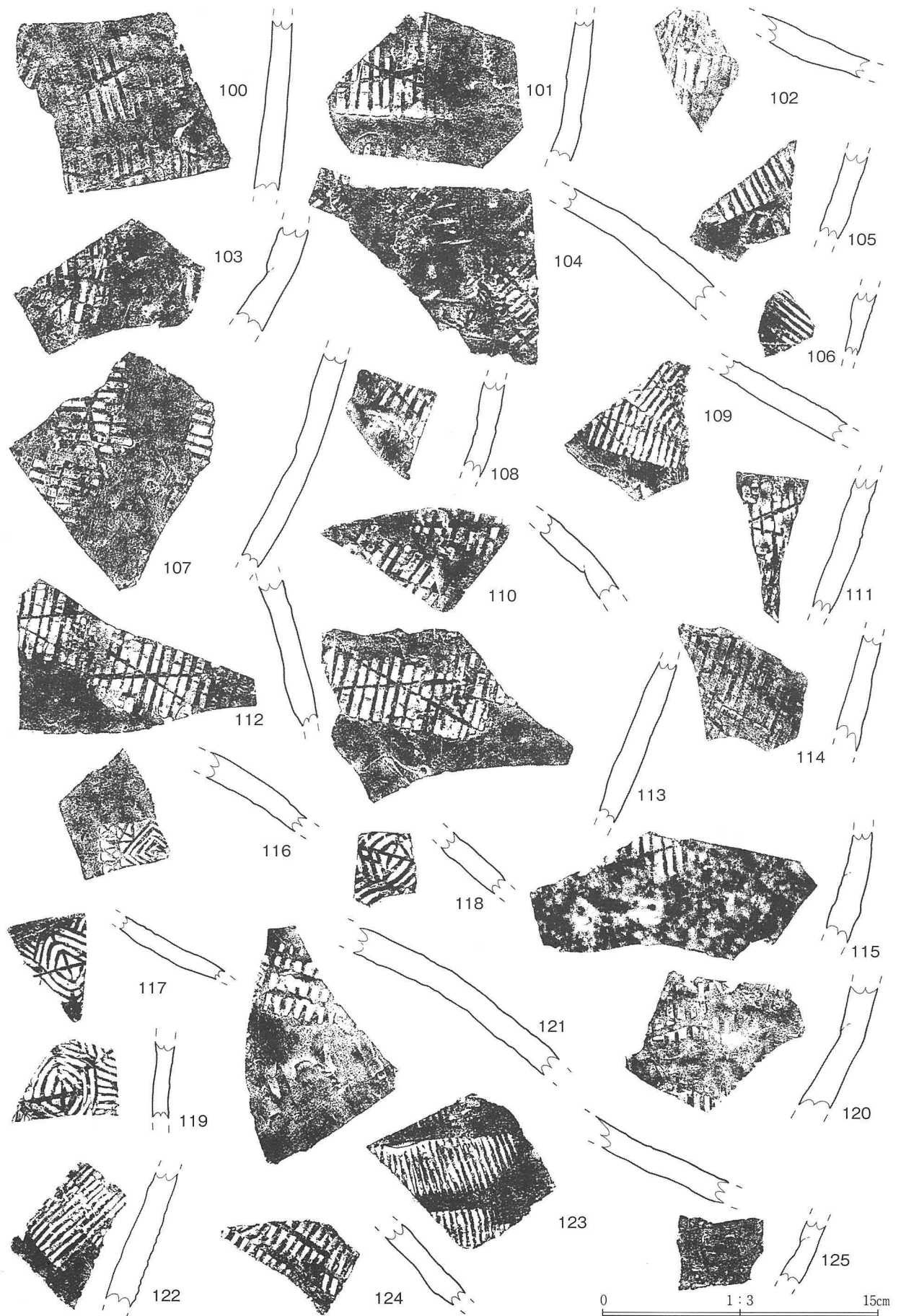
常滑窯産陶器 37点が出土している。このうち13点を図示した。126～130、132～135は甕類の破片である。126・127は口縁部片である。いずれも小破片のため詳細は不明であるが数少ない口縁部資料である。128～130、132～135は甕の体部片である。いずれも押印があるが、単位が判明するものはない。

131は三筋文壺の胴部片である。筋文が一部で二重になるのが観察される。

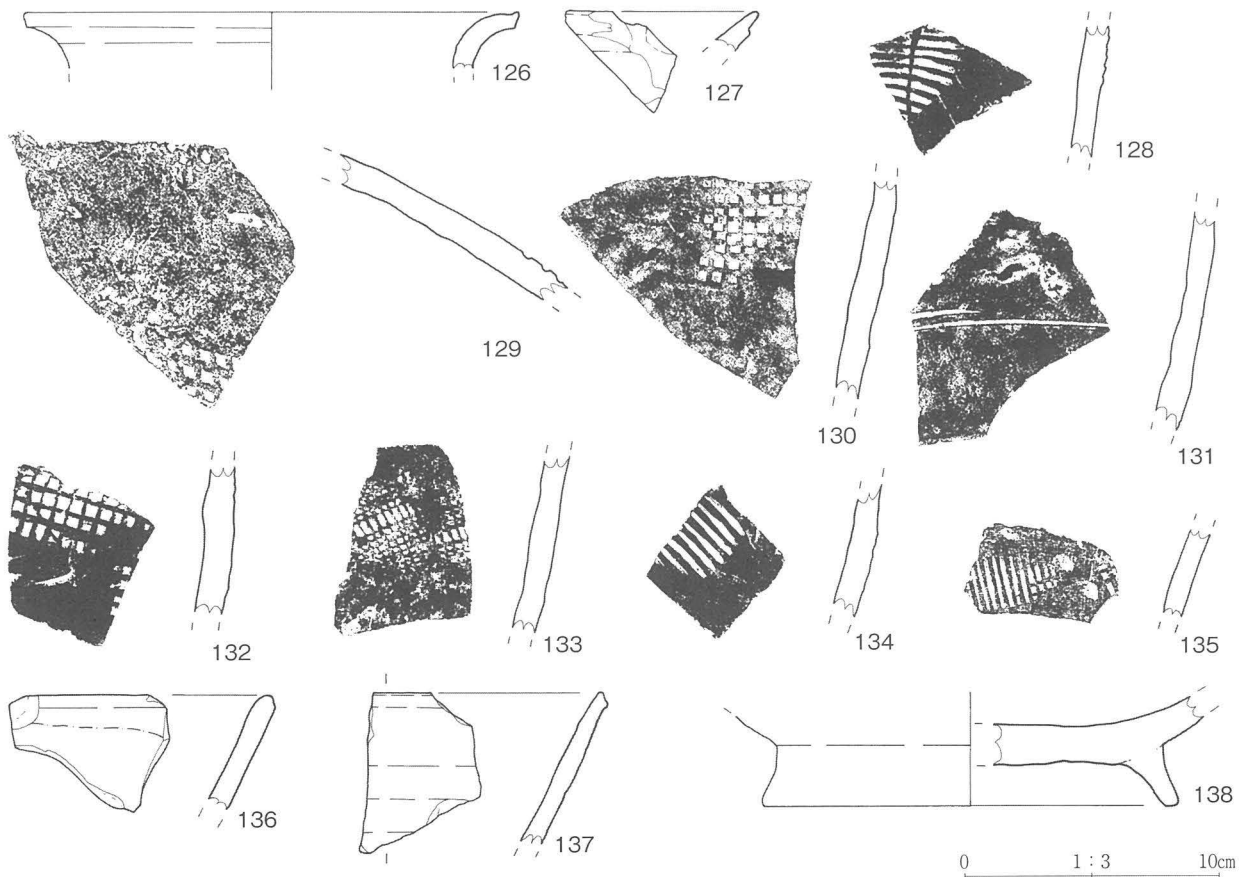
136～138は片口鉢の破片である。136・137は口縁部片、138は底部片であり、高さ2.4cmの高台が接合する。



第25図 渥美1



第26図 渥美2

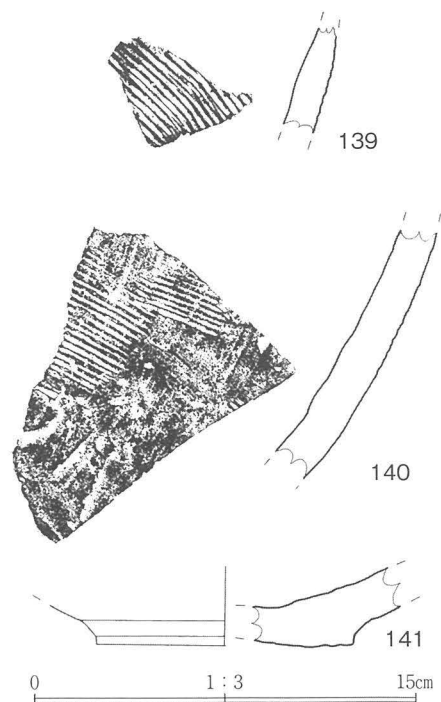


第27図 常滑

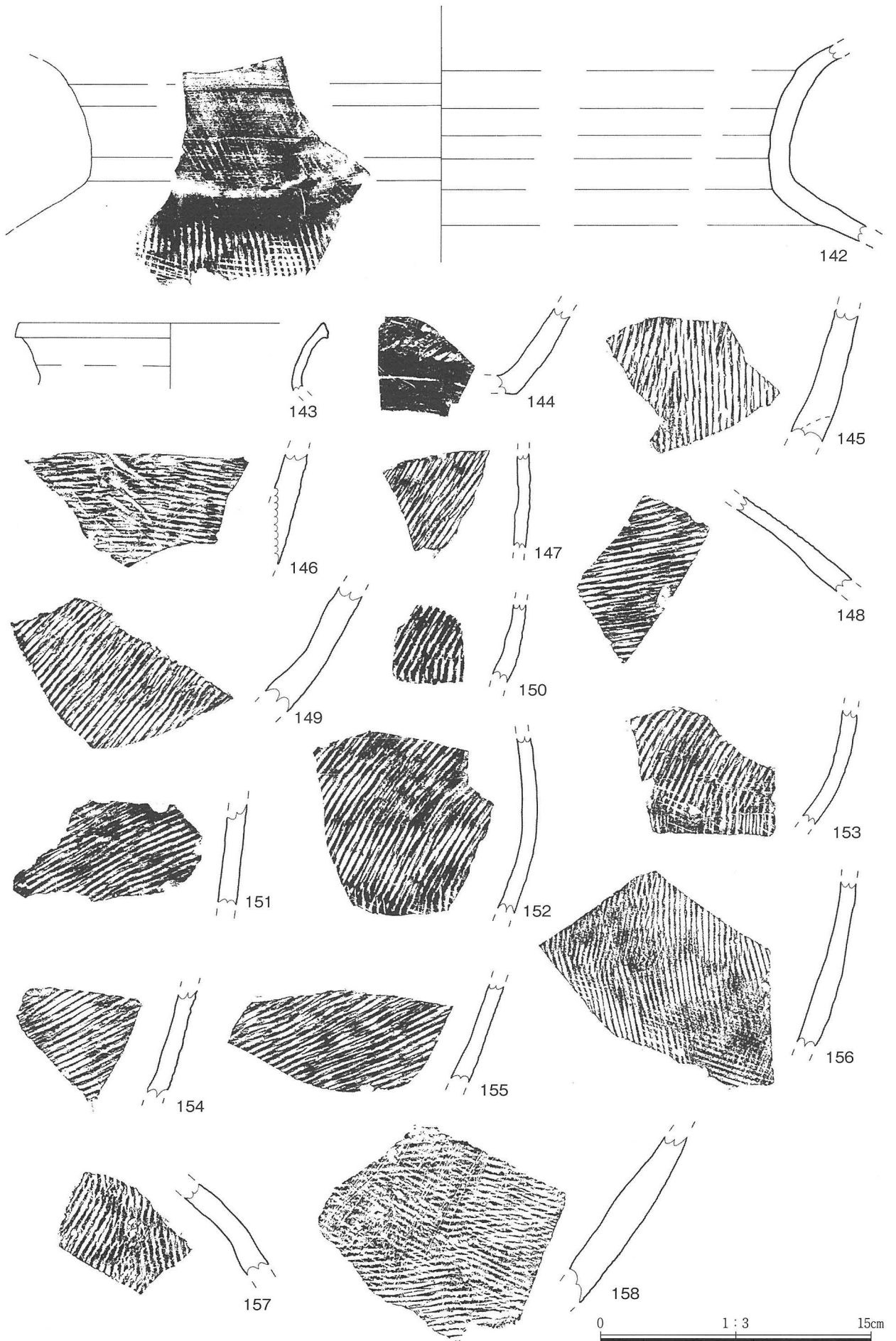
須恵器系陶器 5点が出土し、3点を図示した。他の国産陶器類に比べて出土量は非常に少ない。

139・140は大甕類の体部片である。いずれもタタキ目が施されている。外面に透明の自然釉がうすくかかる。141は甕の底部であり、復元底径10cmである。

須恵器 柳之御所遺跡出土の須恵器と呼んでいるものは通常古代に属すると考えられている。したがってこれまで報告されている「須恵器」とは12世紀以前の古代の土器を指して報告しているものである。本書でも同様の内容をもつものとして報告するが、先に触れた須恵器系陶器よりも量的に多く出土し（とくに大甕の破片を指す）、あるいは12世紀にもこのような「須恵器」が存在していた可能性も当然ながら残る。これまでこの点に関し産地を含めて詳細な検討は行って、または行われてこなかったため「須恵器」は曖昧な位置づけになってしまっている。ここでこれ以上踏み込むことは時間の制約上困難であり今後の課題としていきたいが上記のような注意点があることを明記しておく。



第28図 須恵器系陶器



第29図 須恵器

142～158は須恵器甕類の破片である。142・143は口縁部片である。142は大甕の、143は甕の破片で、142は口縁端部が欠損しているため口径は不明である。143は16.8cmに復元している。144はここでは仮に須恵器に含めたがあるいは東海系の陶器かもしれない。SK35からの出土であるが底面付近からの出土であり、下層を巻き込んでいるかもしれない。145～158は甕類の体部片である。いずれもタタキ目が施される。内面は図示していないが当て具痕が残る。製作技法からも古代須恵器の系統と考えられる。また、破断面をみると、赤褐色の胎土のものが多く特徴的である。

(4) 輸入陶磁器

今回出土した輸入陶磁器には、白磁、青白磁、青磁、陶器がある。総数は24点で、小片でも全て図示している。出土比率は白磁が大多数を占め、陶器、青白磁、青磁とつづく。なお分類に当たっては「大宰府分類」(太宰府市2000)を参考にしている。

白磁 160～177は白磁である。160～162は椀・皿類である。小片であるが可能な限り口径を復元している。160は白磁2類碗である。復元口径は11.4cmである。161は玉縁状口縁をもつIV類碗である。口径は復元で16.4cmである。162は白磁皿である。小破片のため難しいが大宰府分類のVII-2a類かもしれない。

163～177は白磁壺類の破片である。164は頸部の破片である。165～177までは壺体部片である。2類と3類に大別すると。前者には165、166、170、171、172、174、175、177があり、後者には、164、167、176がある。また、縦の広い沈線が172、174、176に認められる。

青白磁 159、178は青白磁である。159は碗であるが小片である。復元した口径は9.2cmである178は小壺の蓋と考えられる。上面には花状の文様が陽刻されている。

青磁 179は青磁碗の底部片である。見込みには花卉状の文様が片彫りで描かれている。龍泉窯1類かもしれない。

陶器類 180～182は陶器の破片である。いずれも褐色の釉を外面に施している。180のような底部～体部下半の形態からXII類の壺と想定される。181・182も同種の壺片であろう。

(5) 瓦

瓦は柳之御所遺跡からは少ないながらも一定量出土している。今回の出土瓦についてはほとんどが小片であり、瓦当文様の判明するものは皆無であるが、出土例が少ないため資料的な価値は大きいと判断し小さいものも含めて13点を図示している。

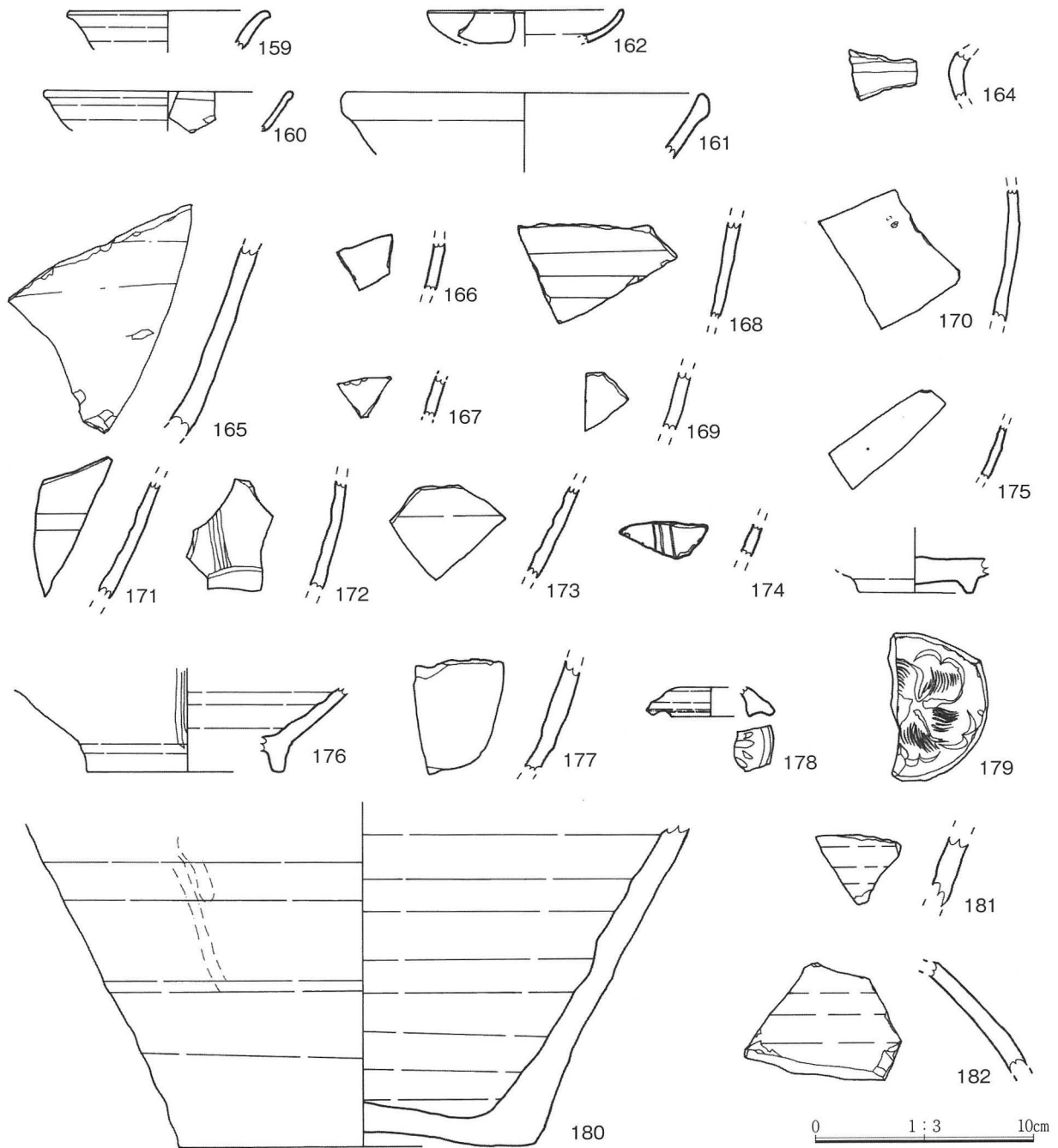
平瓦 183～194は平瓦片である。いずれも小破片のため全体の大きさ、形状などは不明である。上面には布目痕が、下面には縄文が残存している。端面が残存するものに183、185、187、189、191、192、194がある。ほとんどが端部上面に面取りが施されている。

丸瓦 1点のみ出土している。195は小破片のため部位は不明であるが断面の曲線は丸瓦のものであろう。

(6) 土製品

土製品と分類したものは総数49点(1,386g)出土している。鞆羽口が11点、土壁が37点(483g)、不明土製品が1点(98g)出土している。このうち図示したのは鞆羽口が2点、不明土製品が1点の3点のみである。

不明土製品 196は、断面が「L」字状に屈曲する硯に似た形状を呈する。外面には指オサエの痕跡が明瞭に残る。破片であるためか全体の形状がわからず、したがってその名称・機能とも不明であ



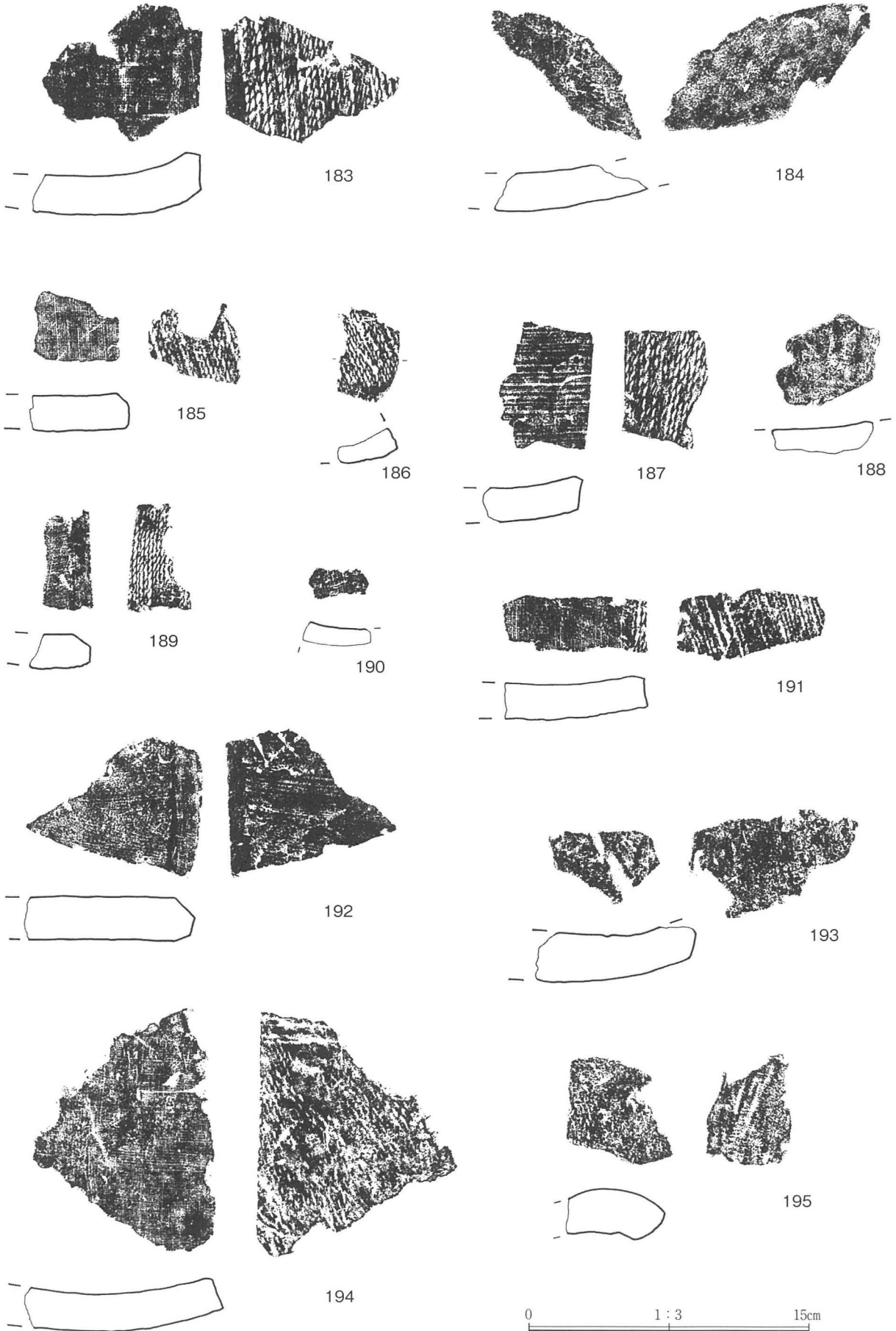
第30図 輸入陶磁器

る。5層からの出土である。

韃羽口 197・198は韃羽口の破片である。197は韃部との接合箇所付近の破片で溶解した金属が付着する。197・198ともに酸化、還元した範囲が残されている。胎土にはスサ等の繊維が含んでいる。

(7) 石器・石製品

石器・石製品は珪化木・焼けた自然石も含めて16点出土している。このうち3点のみを図示している。



第31図 瓦

基石状石製品 199・200は基石かどうか判断がつかないが、地山に含まれる石ではないが、整形した痕跡が観察できないため基石状とした。199は黒石、200は白石である。いずれも6b層からの出土である。

砥石 201は上下面と1側面を使用している。長さ14.0cm、幅5.4cm、厚さ1.6cmである。石材は同定していない。

(8) 金属製品

金属製品そのものは出土していないが、鉄滓が6点出土している。図示はしていない(表24)。

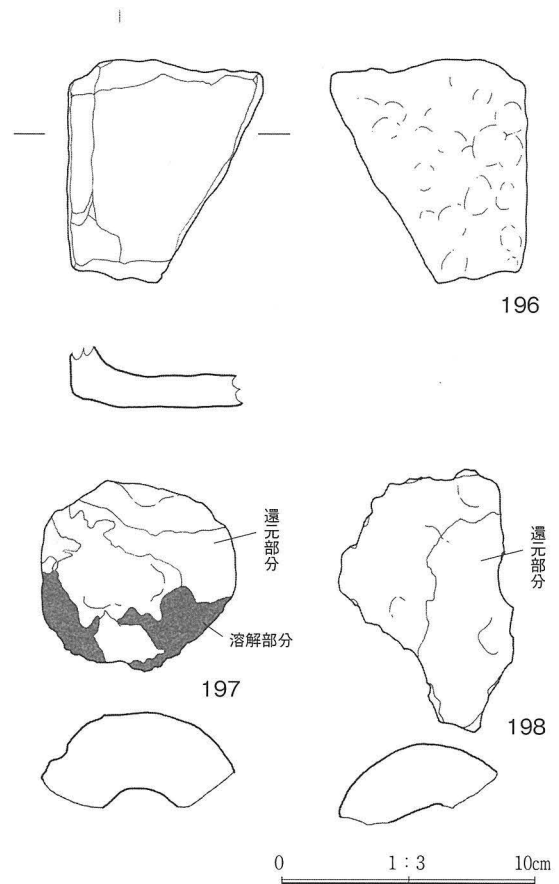
(9) 木製品

出土した木製品は187点ある。これらは製品を特定することが困難なほど小破片なものがほとんどである。このうち製品を特定できるものとある程度形態をとどめるものを含めて12点を図示した。

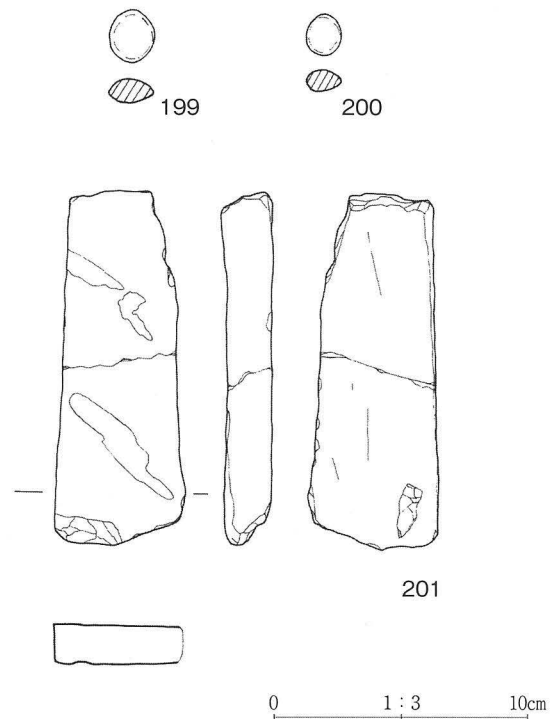
下駄 3点が出土している。202・203は連歯下駄である。202は腐食により若干大きさが失われているものの歯以外はほぼ完形に近い状態である。長さは22.2cm、幅は13.5cmである。歯は2本とも欠損しているが基部のみ残存している。鼻緒孔が3カ所確認できる。203は左側縁と踵側が一部欠損している。全体的に202よりもう少しその分腐食していると考えられる。現存長23.0cm、現存幅12.2cmである。歯も基部のみ残存している。鼻緒孔は2カ所確認できるが、横緒孔1カ所は欠損している。204は差歯下駄である。ほとんど腐食しており、歯の差し込み部分のみ残存している。

漆器椀 1点が出土している。遺存状態は非常に悪く、底部のみ残存している。残存部からみると、高台が存在していた可能性がある。内面には黒漆の痕跡が残るが非常にもろくなっている。底部径は復元で9cmである。

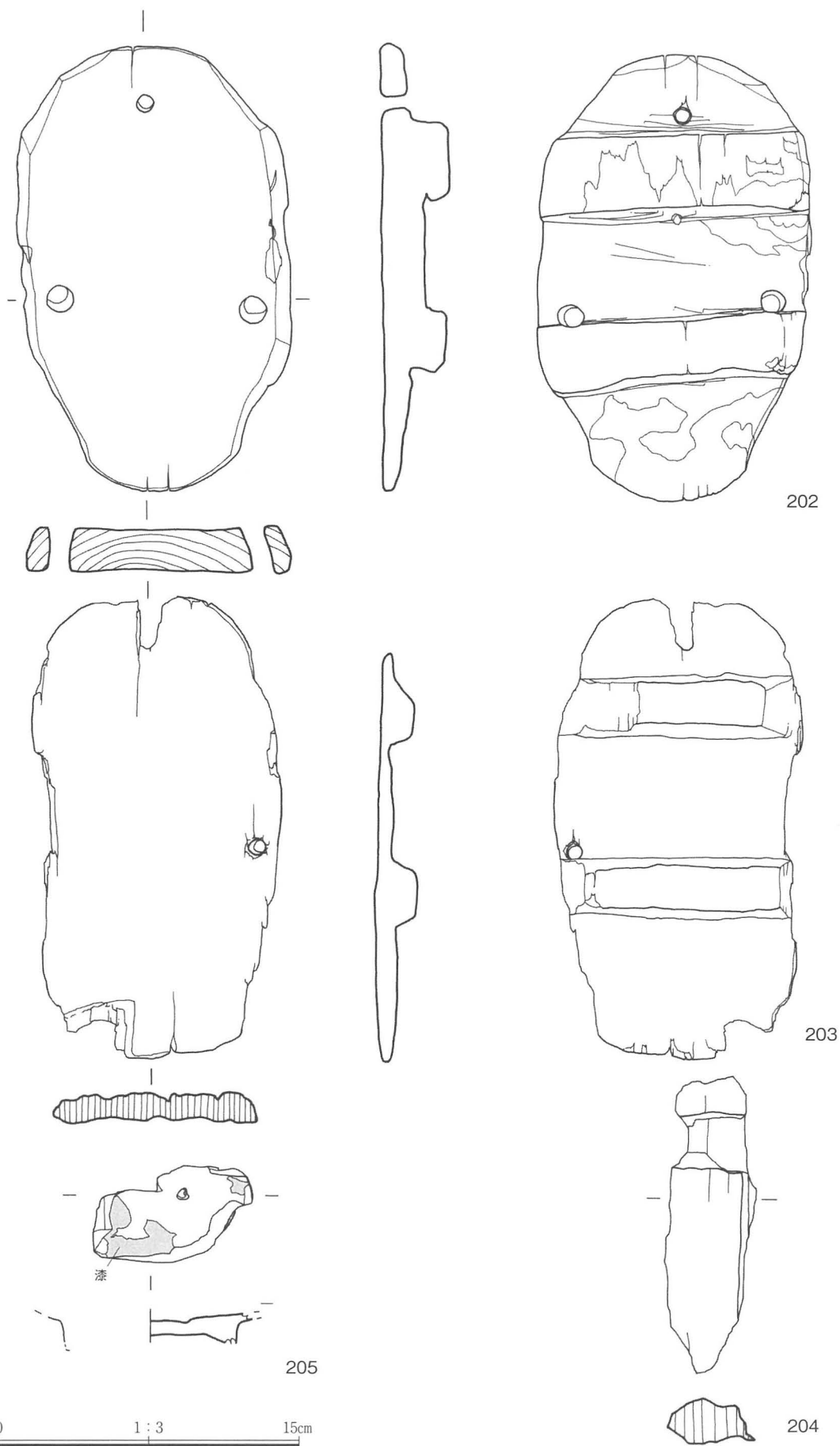
部材 206～211は名称不明ながら建築、あるいは調度品を構成する部材と考えられる。206は長さ36.4cmの角材であるが端部に長さ2cmの楕円形状の貫通孔が穿たれている。207は断面が「L」字状を呈する部材である。一端に仕口が施されており、他の部材



第32図 土製品



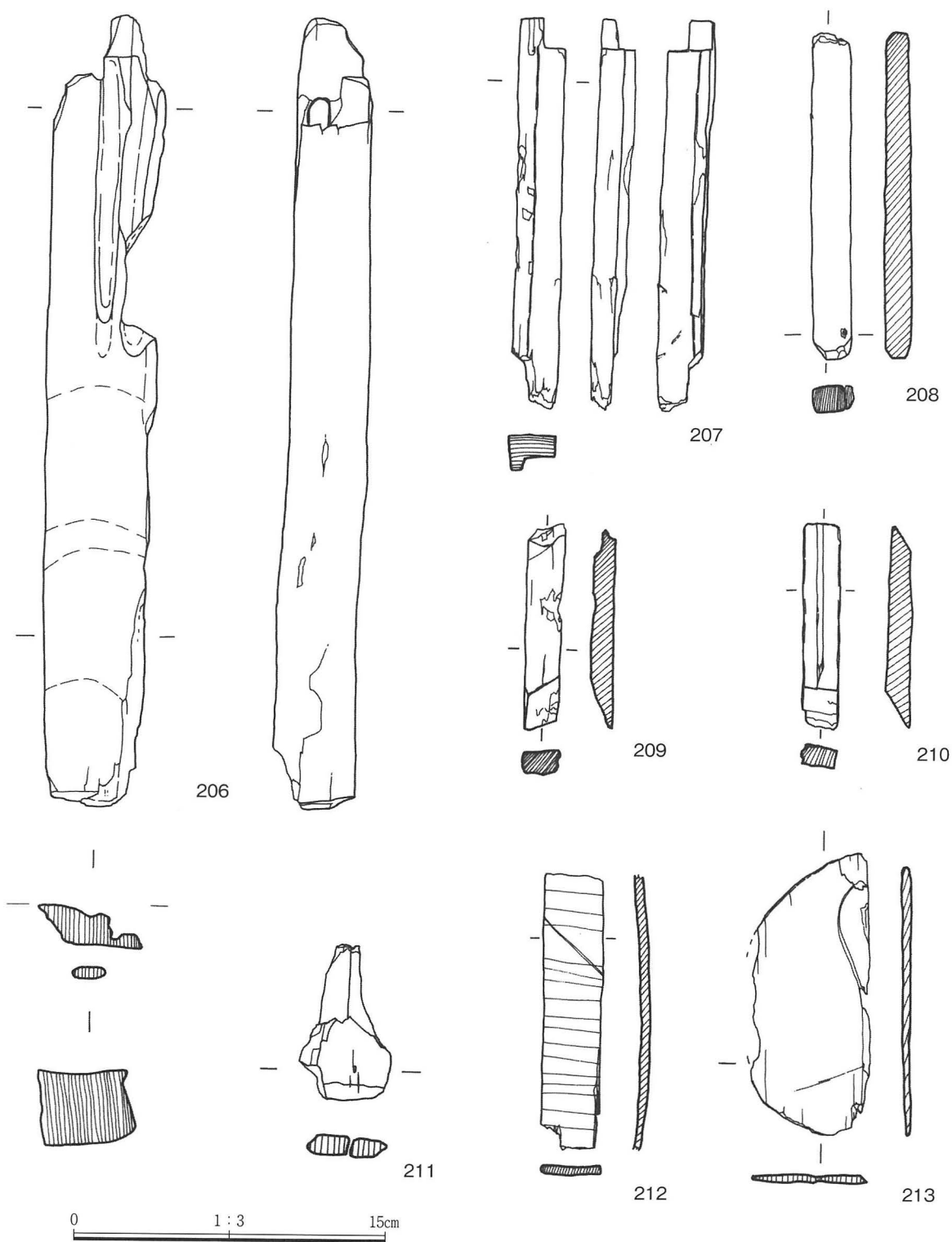
第33図 石製品



第34図 木製品 1

と組み合わせて使用する部材と考えられる。208も用途不明の部材である一端に約1cmの貫通孔が穿たれている。209・210は一端が鋭角に整形されている部材である。用途は不明である。211は一端に貫通孔が穿たれる部材である。

曲物 211・212は曲物を構成する部材である。212は野引きが施されている。213は曲物の底板と考えられる。半分のみ残存している。



第35図 木製品 2

Ⅲ 自然科学分析

1 出土木材樹種同定

(1) はじめに

柳之御所遺跡から出土した釘穴折敷、下駄の樹種を同定した。

(2) 試料と方法

試料は、柳之御所遺跡から出土した釘穴折敷 1 試料、下駄 2 試料である。

試料は、カミソリ刃で 3 断面（横断面、接線断面、放射断面）の切片を採取し、ガムクロラールを用いてプレパラートに封入後、光学顕微鏡を用いて観察・同定した。なお、作製した木材プレパラートは、岩手県立博物館に保管してある。

(3) 結果

樹種を同定した結果、釘穴折敷が常緑針葉樹のスギ、下駄がいずれも落葉広葉樹のクリであった（表 8）。

第 8 表 木製品と樹種同定結果

試料No.	遺跡	製品名	遺物No.	樹種
1	56次	釘穴折敷	4109	スギ
2	68次	下駄	68RW187	クリ
3	68次	下駄	68RW186	クリ

以下に同定根拠とした材組織の特徴を記載し、材の 3 方向の組織写真を示す。

(1) スギ *Cryptomeria japonica* D.Don スギ科 図版28 1a-1c (No.1)

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材である。晩材の量が多く晩材の仮道管に壁は極めて厚い。樹脂細胞は年輪の後半に散在する。分野壁孔は大きく、孔口が水平に大きく開いたスギ型で 1 分野に 2 個ある。放射柔細胞は 2-10 細胞高である。

スギは、本州以南の暖帯から温帯下部の湿気のある谷間に生育する常緑高木である。日本海側では縄文時代に低地にスギ林が成立していたことが知られている。材は、やや軽軟で加工は容易であり、建築材や樽桶材、楽器材や玩具材など用途は広い。

(2) クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科 図版28 2a-2c (No.2)、3a-3c (No.3)

年輪の始めに大型の管孔が配列し、晩材部は非常に小型の管孔が火炎状に配列する環孔材。道管の壁孔は小型で交互状、穿孔は単穿孔である。放射組織は単列同性、道管との壁孔は孔口が大きく交互状・柵状である。

クリは、北海道西南部以南の暖帯から温帯下部の山野に普通に生育する落葉高木である。材は、粘りがあり耐朽性に優れ、杭などの土木材、器具材、家具材など用途は広い。

(パレオ・ラボ 藤根 久・中村賢太郎)

参考文献

平井信二 1996 木の大自然, 642p. 朝倉書店

2 テフラ分析

(1) はじめに

東北地方岩手県域南部とその周辺には、焼石、栗駒、鳴子、鬼首、肘折、十和田など東北地方の火山のほか、洞爺、御岳、三瓶、阿蘇、始良など遠方の火山に由来するテフラ（火山碎屑物、いわゆる火山灰）が数多く認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている指標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになっている。

そこで、テフラの可能性のある土層が検出された平泉町柳之御所遺跡においても、発掘調査担当者により採取された試料を対象に、テフラ検出分析と火山ガラス比分析、さらに火山ガラスの屈折率測定を実施して、含まれるテフラ粒子の起源について調べた。分析対象試料は、試料Va（YG68トレ10層中火山灰）である。

(2) テフラ検出分析・テフラ組成分析

A. 分析方法

試料Vaに含まれる火山ガラス比の比率や色調形態などの特徴を知るために、テフラ検出分析と火山ガラス比分析を行った。分析の手順は次のとおりである。

- 1) 試料10gを秤量。
- 2) 超音波洗浄により泥分を除去。
- 3) 80°Cで恒温乾燥。
- 4) 実体顕微鏡下でテフラ粒子の特徴を観察（テフラ検出分析）。
- 5) 分析篩により1/4～1/8mmと1/8～1/16mmの粒子を篩別。
- 6) 1/4～1/8mmの粒子について、偏光顕微鏡下で250粒子を観察し、火山ガラスの色調形態別比率を求める（火山ガラス比分析）。

B. 分析結果

テフラ検出分析の結果を表9に示す。試料Vaには、軽石やスコリアなど比較的粗粒のテフラ粒子は含まれていないものの、白色や透明の軽石型ガラスが多く含まれており、ガラス質テフラのようにみえる。重鉱物はさほど多くないものの、斜方輝石や単斜輝石が認められる。ほかに、黒雲母がごく少量含まれている。また、火山ガラス比分析の結果をダイヤグラムにして図36に、その内訳を表10に示す。火山ガラスは、試料（1/4～1/8mm）中に40.4%と多く含まれている。その内訳は、比率が高い順に繊維束状に発泡した軽石型（24.4%）、スポンジ状に発泡した軽石型（12.8%）、透明のバブル型（2.8%）、分厚い中間型（0.4%）である。

(3) 屈折率測定

A. 測定試料と測定方法

一般的に、土壌や堆積物などに含まれる細粒の火山ガラスの起源を求めるためには、特徴的な粒子が検出されない限り、テフラ検出分析や火山ガラス比分析などに合わせ、さらに高度なレベルの分析測定を実施する必要がある。そこで、試料に含まれる火山ガラス（1/8～1/16mm）について、温度変化型屈折率測定装置（古澤地質社製MAIOT）により、屈折率（n）の測定を実施した。

B. 測定結果

屈折率測定の結果を表11に示す。試料に含まれる火山ガラス（30粒子）の屈折率（n）は、1.497-1.505である。

（4）考 察

今回は現地における土層の観察ができないために、試料の詳細については不明な点が多いが、試料に含まれるテフラ粒子については、火山ガラスの比率、色調、形態、また重鉱物の組み合わせ、さらに火山ガラスの屈折率をみる限り、本地域に分布が知られているテフラの中では、915年に十和田火山から噴出した十和田 a テフラ（To-a、大池、1972、町田ほか、1981、町田・新井、1992、2003）の総合的な特徴にもっとも良く似ている。したがって、分析の結果からは、試料中にTo-a起源のテフラ粒子が多く含まれているように思われる。

火山灰編年学においては、テフラの一次堆積層の利用が基本であり、その認定には現地での火山灰編年学研究者による層相観察が不可欠である。今後、分析者による現地での土層観察や試料採取を期待したい。それができない場合には、信頼できるEPMAを利用した火山ガラスの主成分化学組成分析を実施すると良い。

（5）ま と め

平泉町柳之御所遺跡において、発掘調査担当者により採取された試料Vaを対象として、テフラ検出分析、火山ガラス比分析、火山ガラスの屈折率測定を行った。その結果、試料に十和田 a 火山灰（To-a、A.D.915年）に由来する火山ガラスが含まれている可能性が高いことが指摘された。

（株式会社 古環境研究所）

文 献

町田 洋・新井房夫（1992）火山灰アトラス．東京大学出版会、276p.
 町田 洋・新井房夫（2003）新編火山灰アトラス．東京大学出版会、336p.
 町田 洋・新井房夫・森脇 広（1981）日本海を渡ってきたテフラ．科学、51、p.562-569.
 大池昭二（1972）十和田火山東麓における完新世テフラの編年．第四紀研究、11、p.232-233.

第9表 テフラ検出分析結果

試料	軽石・スコリア			火山ガラス			重鉱物
	量	色調	最大径	量	形態	色調	
V a 層	—	—	—	+++	pm>bw	白,透明	opx,cpx,(bi)

++++：とくに多い，+++：多い，++：中程度，+：少ない，—：認められない．bw：バブル型，pm：軽石型
 opx：斜方輝石，cpx：単斜輝石，bi：バブル型．重鉱物の（ ）は量が少ないことを示す．

第10表 火山ガラス比分析結果

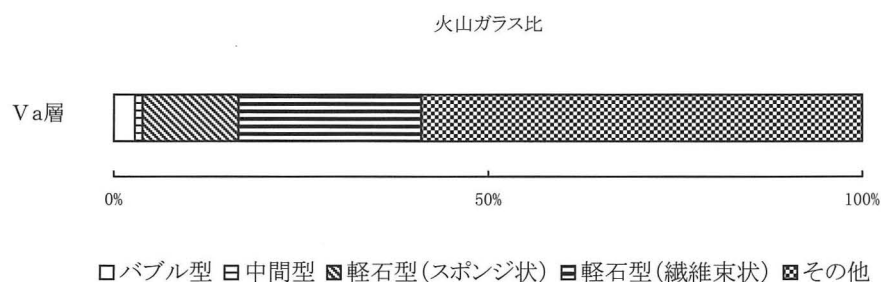
土層	bw(cl)	bw(pb)	bw(br)	md	pm(sp)	pm(fb)	その他	合計
V a層	7	0	0	1	32	61	149	250

数字は粒子数. bw: バブル型, md: 中間型, pm: 軽石型, cl: 無色透明, pb: 淡褐色, br: 褐色, sp: スポンジ状, fb: 繊維束状.

第11表 柳之御所遺跡試料と代表的な指標テフラに含まれる火山ガラスの屈折率

遺跡・試料/指標テフラ (年代)	火山ガラスの屈折率
柳之御所遺跡*1・V a層	1.497-1.505 (30)
十和田 a (To-a, AD915)	1.496-1.508*2
	1.500-1.508*3
十和田中掘 (To-Cu, 5.5k.yBP)	1.508-1.512
肘折尾花沢 (Hj-O, 10k.yBP)	1.499-1.504
十和田八戸 (To-H, 12-13k.yBP)	1.505-1.509
浅間板鼻黄色 (As-YP, 13-14k.yBP)	1.501-1.504
鳴子瀉沼上原 (Nr-KU, 20k.yBP)	1.492-1.500
始良Tn (AT, 24-25k.yBP)	1.499-1.501
十和田大不動 (To-Of, >32k.yBP)	1.506-1.510
鳴子柳沢 (Nr-Y, 41-63ka)	1.500-1.503
阿蘇 4 (Aso-4, 85-90ka)	1.506-1.510
鳴子荷坂 (Nr-N, 90ka)	1.500-1.502
肘折北原 (Hj-Kth, 90-100ka)	1.499-1.502
御岳第 1 (On-Pm1, ca.100ka)	1.500-1.503
三瓶木次 (SK, 110-115ka)	1.494-1.498
洞爺 (Toya, 112-115ka)	1.494-1.498

*1: 屈折率の測定は、温度変化型屈折率測定装置 (MAIOT) による。(): 測定粒子数.
指標テフラのデータは、町田・新井 (1992, 2003) による.*2: 青森地域.*3: 岩手・秋田地域.
k.yBP: 1,000年前 (14C年代). ka: 1,000年前.



第36図 柳之御所遺跡テフラ試料の火山ガラス比ダイアグラム

3 放射性炭素年代測定

(1) はじめに

放射性炭素年代測定は、呼吸作用や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素 (^{14}C) の濃度が、放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。過去における大気中の ^{14}C 濃度は変動しており、年代値の算出に影響を及ぼしていることから、年輪年代学などの成果を利用した較正曲線により ^{14}C 年代から暦年代に較正する必要がある。

ここでは、柳之御所遺跡の堆積年代を検討するために、土層断面より出土した炭化物を対象に加速器質量分析法による放射性炭素年代測定を行った。測定にあたっては、米国のBeta Analytic Inc. の協力を得た。

(2) 試料と方法

測定試料は、Cトレンチ7層出土の炭化物(試料No.1)、Cトレンチ4層出土の炭化物(試料No.2)、SK35出土の炭化物(試料No.3)の3点である。放射性炭素年代測定の手順は以下のとおりである。

まず、試料に二次的に混入した有機物を取り除くために、以下の前処理を行った。

- 1) 蒸留水中で細かく粉碎後、超音波および煮沸により洗浄
- 2) 塩酸(HCl)により炭酸塩を除去後、水酸化ナトリウム(NaOH)により二次的に混入した有機酸を除去
- 3) 再び塩酸(HCl)で洗浄後、アルカリによって中和
- 4) 定温乾燥機内で80°Cで乾燥

前処理後、試料中の炭素を燃焼して二酸化炭素に変え、これを真空ライン内で液体窒素、ドライアイス、メタノール、n-ペンタンを用いて精製し、高純度の二酸化炭素を回収した。こうして得られた二酸化炭素を鉄触媒による水素還元法でグラファイト粉末とし、アルミニウム製のターゲットホルダーに入れてプレス機で圧入しグラファイトターゲットを作製した。これらのターゲットをタンデム加速器質量分析計のイオン源にセットして測定を行った。測定試料と方法を表11にまとめた。

第12表 測定試料及び処理

試料名	地点	種類	前処理・調整	測定法
No.1	Cトレンチ, 7層	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄	AMS
No.2	Cトレンチ, 4層	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄	AMS
No.3	SK35	炭化物	酸-アルカリ-酸洗浄	AMS

※AMS (Accelerator Mass Spectrometry) は加速器質量分析法

(3) 結果

年代測定の結果を表13に示す。

1) ^{14}C 年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在(AD1950年)から何年前かを計算した値。 ^{14}C の半減期は国際的慣例によりLibbyの5568年を使用した(実際の半減期は5730年)。

2) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)。この値は標準物質 (PDB) の同位体比からの千分偏差 (‰) で表す。

3) 補正 ^{14}C 年代値

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定値に補正值を加えた上で算出した年代。試料の $\delta^{13}\text{C}$ 値を -25 (‰) に標準化することによって得られる年代である。

4) 暦年代 Calendar Age

^{14}C 年代測定値を実際の年代値 (暦年代) に近づけるには、過去の宇宙線強度の変動などによる大気中 ^{14}C 濃度の変動および ^{14}C の半減期の違いを較正する必要がある。暦年較正には、年代既知の樹木年輪の ^{14}C の詳細な測定値およびサングのU/Th (ウラン/トリウム) 年代と ^{14}C 年代の比較により作成された較正曲線を使用した。最新の較正曲線であるIntCal04ではBC24050年までの換算が可能である (樹木年輪データはBC10450年まで)。

暦年代の交点とは、補正 ^{14}C 年代値と較正曲線との交点の暦年代値を意味する。1 σ (68%確率) と 2 σ (95%確率) は、補正 ^{14}C 年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点や複数の 1 σ ・2 σ 値が表記される場合もある。

第13表 測定結果

試料名	測定No. (Beta-)	^{14}C 年代 ¹⁾ (年BP)	$\delta^{13}\text{C}$ ²⁾ (‰)	補正 ^{14}C 年代 ³⁾ (年BP)	暦年代 (西暦) ⁴⁾	
No. 1	241429	880 \pm 40	-25.0	880 \pm 40	交点: cal	AD 1170
					1 σ : cal	AD 1060~1080, AD 1150~1210
					2 σ : cal	AD 1040~1240
No. 2	241430	1070 \pm 40	-25.7	1060 \pm 40	交点: cal	AD 990
					1 σ : cal	AD 970~1020
					2 σ : cal	AD 890~1030
No. 3	241431	1080 \pm 40	-26.2	1060 \pm 40	交点: cal	AD 990
					1 σ : cal	AD 970~1020
					2 σ : cal	AD 890~1030

(4) 所 見

加速器質量分析法 (AMS) による放射性炭素年代測定の結果、C トレンチ 7 層で出土した炭化物は880 \pm 40年BP (2 σ の暦年代でAD1040~1240年)、C トレンチ 4 層で出土した炭化物は1060 \pm 40年BP (同AD890~1030年)、S K 35で出土した炭化物は1060 \pm 40年BP (同AD890~1030年) の年代値が得られた。
(株式会社 古環境研究所)

文 献

- Paula J Reimer et al., (2004)IntCal04 Terrestrial radiocarbon age calibration, 26-0 ka BP. Radiocarbon 46, 1029-1058.
尾寄大真 2005 INTCAL98からIntCal04へ. 学術創成研究費 弥生農耕の起源と東アジアNo.3 -炭素年代測定による高精度編年体系の構築-, p.14-15.
中村俊夫 1999 放射性炭素法. 考古学のための年代測定学入門. 古今書院, p.1-36.

4 微化石（花粉・珪藻・種実）分析

（1）試料

分析試料は、柳之御所遺跡第68次発掘調査のCトレンチから採取された堆積物であり、内訳は以下のとおりである。

- 1) 花粉分析
Cトレンチ 5層、7層、9層、10層
- 2) 珪藻分析
Cトレンチ 5層、7層
- 3) 種実同定
第2面相当層上面91-70・6～7層

（2）花粉分析

A. 原理

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

B. 方法

花粉の分離抽出は、中村（1973）の方法をもとに、以下の手順で行った。

- 1) 0.5%リン酸三ナトリウム（12水）溶液を加え15分間湯煎
- 2) 水洗処理の後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
- 3) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置
- 4) 水洗処理の後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸9：濃硫酸1のエルドマン氏液を加え1分間湯煎）を施す
- 5) 再び氷酢酸を加えて水洗処理
- 6) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示す。イネ属については、中村（1974、1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とする。またこの処理を施すとクスノキ科の花粉は検出されない。

C. 結果

1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉27、樹木花粉と草本花粉を含むもの5、草本花粉25、シダ植物孢子2形態の計59である。これらの学名と和名および粒数を表14に示し、花粉数が200個以上計数できた試

料は、周辺の植生を復元するために花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを図37に示す。主要な分類群は顕微鏡写真に示した。また、寄生虫卵についても同定した結果、4分類群が検出された。以下に出現した分類群を記載する。

〔樹木花粉〕

モミ属、マツ属複維管束亜属、マツ属単維管束亜属、スギ、コウヤマキ、イチイ科ーイヌガヤ科ーヒノキ科、ヤナギ属、クルミ属、サワグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、ハシバミ属、クマシデ属ーアサダ、クリ、シイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、ニレ属ーケヤキ、エノキ属ームクノキ、ウルシ属、カエデ属、トチノキ、ムクロジ属、ブドウ属、ミズキ属、トネリコ属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科ーイラクサ科、バラ科、マメ科、ウコギ科、ニワトコ属ーガマズミ属

〔草本花粉〕

ガマ属ーミクリ属、サジオモダカ属、オモダカ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、タデ属、タデ属サナエタデ節、ソバ属、アカザ科ーヒユ科、ナデシコ科、キンポウゲ属、カラマツソウ属、アブラナ科、ツリフネソウ属、アカバナ科、アリノトウグサ属ーフサモ属、セリ亜科、オオバコ属、キュウリ属、タンポポ亜科、キク亜科、オナモミ属、ヨモギ属、ベニバナ

〔シダ植物孢子〕

単条溝孢子、三条溝孢子

〔寄生虫卵〕

回虫卵、鞭虫卵、肝吸虫卵、不明虫卵

2) 花粉群集の特徴

Cトレンチ（5層、7層、9層、10層）において、下位より花粉構成と花粉組成の変化の特徴を記載する。

・10層（火山灰混じり：十和田a、915年）

樹木花粉の占める割合が草本花粉より高い。樹木花粉では、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、ニレ属ーケヤキ、クマシデ属ーアサダ、カエデ属、スギ、ウルシ属など多様な分類群が出現する。樹木花粉と草本花粉を含むクワ科ーイラクサ科、バラ科、草本花粉のカヤツリグサ科、イネ科（イネ属型を含む）、ヨモギ属、ガマ属ーミクリ属、サジオモダカ属が低率に出現する。

・9層

樹木花粉より草本花粉の占める割合が高くなる。イネ科とヨモギ属が増加することで特徴付けられ、樹木花粉ではニレ属ーケヤキ、ブナ属、クマシデ属ーアサダ、カエデ属、ウルシ属が減少する。

・7層（14C年代：AD1170）

花粉密度が下位より低くなり、草本花粉の占める割合は増加する。イネ科にはイネ属型が伴われることで特徴付けられ、ヨモギ属とともに優占し、オオバコ属、アカザ科ーヒユ科、キュウリ属、ベニバナなどが伴われる。樹木花粉と草本花粉を含むクワ科ーイラクサ科、樹木花粉のクリがわずかに増加する。回虫卵、鞭虫卵、肝吸虫卵がわずかに検出される。

・5層

ほとんどが草本花粉で占められる。下位同様イネ科（イネ属型を含む）、ヨモギ属が優占し、アカザ科ーヒユ科、カヤツリグサ科、タデ属、オナモミ属が伴われ、ソバ属、キュウリ属がわずかに出現する。

(3) 珪藻分析

A. 原理

珪藻は、珪酸質の被殻を有する単細胞植物であり、海水域や淡水域などの水域をはじめ、湿った土壌、岩石、コケの表面にまで生息している。珪藻の各分類群は、塩分濃度、酸性度、流水性などの環境要因に応じて、それぞれ特定の生息場所を持っている。珪藻化石群集の組成は、当時の堆積環境を反映しており、水域を主とする古環境復元の指標として利用されている。

B. 方法

以下の手順で、珪藻の抽出と同定を行った。

- 1) 試料から 1 cm³を秤量
- 2) 10%過酸化水素水を加え、加温反応させながら 1 晩放置
- 3) 上澄みを捨て、細粒のコロイドと薬品を水洗 (5~6 回)
- 4) 残渣をマイクロピペットでカバーガラスに滴下して乾燥
- 5) マウントメディアによって封入し、プレパラート作成
- 6) 検鏡、計数

検鏡は生物顕微鏡によって 600~1500 倍で行った。計数は珪藻被殻が 200 個体以上になるまで行い、少ない試料についてはプレパラート全面について精査を行った。

C. 結果

1) 分類群

試料から出現した珪藻は、貧塩性種 (淡水生種) 30 分類群である。表 15 に分析結果を示し、珪藻総数を基数とする百分率を算定した珪藻ダイアグラムを図 38 に示す。珪藻ダイアグラムにおける珪藻の生態性は Lowe (1974) や渡辺 (2005) 等の記載により、陸生珪藻は小杉 (1986)、環境指標種群の淡水生種は安藤 (1990) による。主要な分類群について顕微鏡写真を示した。以下にダイアグラムで表記した分類群を記載する。

〔貧塩性種〕

Achnanthes lanceolata, *Amphora montana*, *Aulacoseira canadensis*, *Cymbella silesiaca*, *Cymbella turgidula*, *Fragilaria capucina*, *Frustulia vulgaris*, *Gomphonema minutum*, *Gomphonema parvulum*, *Gomphonema* spp., *Hantzschia amphioxys*, *Navicula contenta*, *Navicula cryptocephala*, *Navicula cryptotenella*, *Navicula kotschyi*, *Navicula mutica*, *Navicula mutica* v. *ventricosa*, *Navicula* spp., *Navicula veneta*, *Nitzschia brevissima*, *Nitzschia palea*, *Nitzschia* spp., *Nitzschia umbonata*, *Pinnularia borealis*, *Pinnularia microstauron*, *Pinnularia* spp., *Pinnularia subcapitata*, *Rhopalodia gibberula*, *Surirella angusta*, *Surirella ovata*

2) 珪藻群集の特徴

C トレンチ (5 層、7 層) において、下位より珪藻構成と珪藻組成の変化の特徴を記載する。

・ 7 層

検出される珪藻はすべて貧塩性種 (淡水生種) で、流水不定性種、陸生珪藻で占められる。流水不定性種では、*Navicula cryptocephala*, *Navicula veneta* が優占し、*Navicula* spp., *Nitzschia umbonata*, *Gomphonema* spp., *Nitzschia palea*, *Navicula cryptotenella* などが出現する。陸生

珪藻では、*Amphora montana*、*Hantzschia amphioxys*が優占する。真・好止水性種では*Pinnularia microstauron*が、真・好流水性種では*Surirella ovata*が低率に出現する。

・ 5層

珪藻密度が下位よりやや低くなり、陸生珪藻の占める割合が増加する。陸生珪藻の*Amphoramontana*が優占種となり、*Hantzschia amphioxys*、*Navicula mutica*が伴われる。流水不定性種では、*Nitzschia umbonata*、*Nitzschia palea*、*Navicula veneta*などが出現し、下位で優占した*Navicula cryptocephala*は減少する。

（４）種実同定

A. 原理

植物の種子や果実は比較的強靱なものが多く、堆積物中に残存する。堆積物から種実を検出しその群集の構成や組成を調べ、過去の植生や群落の構成要素を明らかにし古環境の推定を行うことが可能である。また出土した単体試料等を同定し、栽培植物や固有の植生環境を調べることができる。

B. 方法

試料（堆積物）に以下の物理処理を施して、抽出および同定を行う。

- 1) 試料100cm³（全量）に水を加え放置し、泥化を行う。
- 2) 攪拌した後、沈んだ砂礫を除去しつつ、0.25mmの篩で水洗選別を行う。
- 3) 残渣を双眼実体顕微鏡下で観察し、種実の同定計数を行う。

試料を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行う。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示す。

C. 結果

1) 分類群

草本16分類群が同定される。学名、和名および粒数を表16に示し、主要な分類群を写真に示す。以下に同定の根拠となる形態的特徴を記載する。

イネ *Oryza sativa* L. 穎（完形・破片） イネ科

茶褐色で扁平楕円形を呈し、下端に枝梗が残る。表面には微細な顆粒状突起がある。

エノコログサ属 *Setaria* Beauv. 穎 イネ科

茶褐色で楕円形を呈す。表面には横方向の微細な隆起がある。

ヒエ *Echinochloa utilis* Vigna 果実 イネ科

茶褐色で楕円形を呈す。表面には縦方向に微細で滑らかな隆起がある。

イネ科 Gramineae 穎

穎は灰褐色～茶褐色で楕円形を呈す。腹面はやや平ら。背面は丸い。表面は滑らかである。

スゲ属 *Carex* 果実 カヤツリグサ科

茶褐色で倒卵形、扁平である。果皮は柔らかい。

カヤツリグサ科 Cyperaceae 果実

茶褐色で倒卵形を呈す。断面は扁平である。

タデ属サナエタデ節 *Polygonum* sect. *Persicaria* 果実 タデ科

黒褐色で頂端が尖る広卵形を呈す。表面は滑らかで光沢があり、断面は扁平で中央がややくぼむ。

タデ属 *Polygonum* 果実 タデ科

黒褐色で先端がとがる卵形を呈す。表面にはやや光沢があり、断面は三角形である。

アカザ属 *Chenopodium* 種子 アカザ科

黒色で光沢がある。円形を呈し、片面の中央から周縁まで浅い溝が走る。

ヒユ属 *Amaranthus* 種子 ヒユ科

黒色で光沢がある。円形を呈し、一ヶ所が切れ込みヘソがある。断面は両凸レンズ形である。

ナデシコ科 *Caryophyllaceae* 種子

黒色で円形を呈し、側面にへそがある。表面全体に突起がある。

キジムシロ属 *Potentilla* 種子 バラ科

黄褐色で腎臓形を呈す。表面はやや粗い。

カタバミ属 *Oxalis* 種子 カタバミ科

茶褐色で楕円形を呈し、上端がとがる。両面には横方向に6～8本の隆起が走る。

イヌホオズキ *Solanum nigrum* L. 種子 ナス科

黄褐色で扁平楕円形を呈し、一端にくぼんだヘソがある。表面には網目模様がある。

ナス *Solanum melongera* L. 種子 ナス科

黄褐色で扁平楕円形を呈し、一端にくぼんだヘソがある。表面には網目模様がある。

メナモミ *Siegesbeckia pubescens* Makino 果実 キク科

黒色で倒卵形を呈し、上端は切形で、下端は細く曲る。表面は粗く、断面はひし形である。

2) 種実群集の特徴

検出された種実はずべて草本であり、イネ類6、エノコログサ属2、ヒエ557、イネ科1、スゲ属19、カヤツリグサ科13、タデ属サナエタデ節20、タデ属21、アカザ属28、ヒユ属29、ナデシコ科7、キジムシロ属23、カタバミ属5、イヌホオズキ1、ナス2、メナモミ4である。

(5) 推定される植生、環境、農耕

Cトレンチ(5層、7層、9層、10層)において、下位より植生、環境、農耕の復元を行う。

1) 10層(火山灰混、十和田a:915年)柳之御所以前の時期

周辺は樹木が優勢であり、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、ニレ属一ケヤキ、クマシデ属一アサダ、カエデ属、ウルシ属など、多様な落葉広葉樹で構成される森林が分布していた。ブナ属花粉はブナに類似するものがほとんどであり、コナラ属コナラ亜属も生態的にミズナラとみなされ、周辺地域はブナやミズナラの落葉広葉樹林が分布していた。本トレンチ一帯はその林縁から低湿な箇所にかかる場所に位置することから、ここにも多様な落葉広葉樹が分布していた。日当たりの良いところに生育するバラ科(ここでは形態がサクラ属に近似)やクワ科一イラクサ科(ここでは形態上カナムグラ、カラムシなどに近似)などの樹木や草本も生育し、他に水生植物のカヤツリグサ科、イネ科、ガマ属一ミクリ属、サジオモダカ属、イネ属型が出現することから、近隣に水田が分布していた。

2) 9層

周辺の森林が激減し、イネ科とヨモギ属を中心にカヤツリグサ科やキク亜科の草本が生育し、やや乾燥した環境が示唆される。上位の6～7層からヒエの種実が検出されているが、草本花粉の組成はその7層および5層と基本構成が類似することから、ここも同様にヒエの栽培地であったと考えられる。樹木はニレ属一ケヤキ、ブナ属、クマシデ属一アサダ、カエデ属、ウルシ属など激減し、地域的に大きな開発が行われたとみなされる。

3) 6～7層（年代測定 AD1170）

イネ科にはイネ属型が伴われ、ヨモギ属とともに優占し、オオバコ属、アカザ科－ヒユ科、オモダカ属、キュウリ属、ベニバナなどが伴われる。種実では、第2面相当層上面91-70・6～7層で栽培植物のヒエが多産し、他に栽培植物ではイネとナスが含まれ、ヒユ属、アカザ属、キジムシロ属、タデ属、タデ属サナエタデ節、スゲ属、カヤツリグサ科、ナデシコ科、カタバミ属、オオバコ属、メナモミ、エノコログサ属、イネ科、イヌホウズキの耕地雑草が検出された。このことから、ヒエの栽培地であったことが示唆される。

花粉および種実ともにヨモギ属、ヒユ属、アカザ属、キジムシロ属、タデ属、ナデシコ科、カタバミ属、メナモミ、エノコログサ属、イヌホウズキなどの畑雑草とタデ属サナエタデ節、スゲ属、カヤツリグサ科、オモダカ属などの水田雑草、双方を含むイネ科が検出され、ヒエの栽培地が畑地と水田の中間的な環境であったことが示唆される。珪藻も陸生珪藻が多く、湿った土壌の環境が示唆される。また近隣に水田とウリ類（キュウリ属）、ナス、ベニバナの畑の分布が推定される。

4) 5層

イネ科（イネ属型を含む）とヨモギ属が優占し、アカザ科－ヒユ科、カヤツリグサ科、タデ属、オナモミ属が伴われ、ソバ属、キュウリ属がわずかに出現する。アカザ科－ヒユ科の増加から、周辺では畑地がやや拡大したと推定される。下位の7層と同じく、ヒエ栽培が行われ、珪藻も同様に陸生珪藻が多く、湿った土壌の環境が示唆される。また近隣に水田とソバ属、ウリ類（キュウリ属）などの畑地が分布していた。

（6）ま と め

（1）10層の時期は、周辺にはブナ属（ブナ）とコナラ属コナラ亜属（ミズナラ）の落葉広葉樹林が分布し、本地点の周囲はニレ属－ケヤキ、クマシデ属－アサダ、カエデ属、ウルシ属などの落葉広葉樹やバラ科（ここでは形態がサクラ属に近似）樹木やクワ科－イラクサ科（形態上カナムグラ、カラムシなど）の草本が生育し、林縁周辺であったと推定され、近隣に水田も分布していた。

（2）5層、6～7層（年代測定 AD1170）、9層の時期は、周辺の森林が激減し、イネ科とヨモギ属の草本が中心に分布し、やや湿ったからやや乾燥した環境が示唆された。畑地雑草と水田雑草が伴われ、6～7層から多量のヒエの種実、7層からイネ属型、キュウリ属、ベニバナの花粉、5層からソバ属、キュウリ属の栽培植物が検出され、水田や畑の分布が示唆された。ヒエが多いことから、本地点周辺はヒエ栽培が行われていたとみなされ、畑雑草と水田雑草が生育し、畑地と水田の中間的な環境であった。
(株式会社 古環境研究所)

参考文献

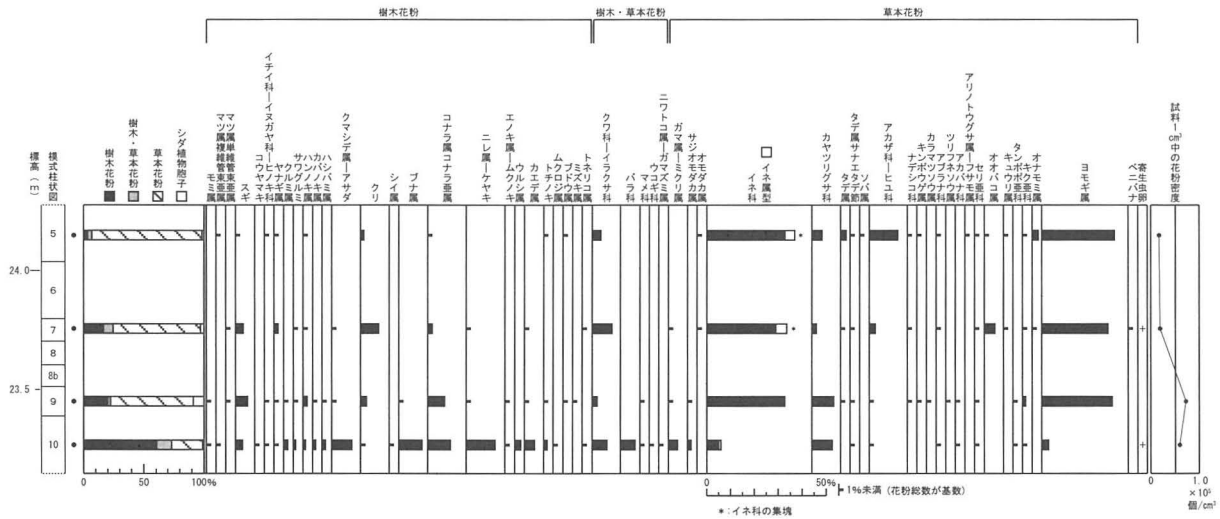
- 金原 正明 1993 花粉分析法による古環境復原. 新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法、角川書店、p.248-262.
島倉巳三郎 1973 日本植物の花粉形態. 大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集、60p.
中村 純 1973 花粉分析. 古今書院、p.82-110.
中村 純 1974 イネ科花粉について、とくにイネ (*Oryza sativa*) を中心として. 第四紀研究,13,p.187-193.
中村 純 1977 稲作とイネ花粉. 考古学と自然科学、第10号、p.21-30.
中村 純 1980 日本産花粉の標徴. 大阪自然史博物館収蔵目録第13集、91p.
Hustedt, F. 1937-1938 Systematische und ologische Untersuchungen über die DiatomeenFlora von Java,Bali und Sumatra nach dem Material der Deutschen Limnologischen Sunda-Expedition. Arch.Hydrobiol,

- Suppl. 15, p.131-506.
- Lowe,R.L. 1974 Environmental Requirements and pollution tolerance of fresh-water diatoms. 333p., National Environmental Reserch. Center.
- K.Krammer・H.Lange-Bertalot (1986-1991) Bacillariophyceae. 1-4.
- Asai,K.&Watanabe,T. 1995 Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution(2) Saprophilous and saproxenous taxa.Diatom,10,p.35-47.
- 安藤 一男 1990 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復原への応用. 東北地理、42、p.73-88.
- 伊藤 良永・堀内 誠示 1991 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用. 珪藻学会誌, 6 ,p.23-45.
- 小杉 正人 1986 陸生珪藻による古環境解析とその意義-わが国への導入とその展望-. 植生史研究、第1号、植生史研究会、p.29-44.
- 小杉 正人 1988 珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用. 第四紀研究、27、p. 1-20.
- 渡辺 仁治 2005 淡水珪藻生態図鑑 群集解析に基づく汚濁指数DAIpo, pH耐性能. 内田老鶴圃、pp.666.
- 笠原 安夫 1985 日本雑草図説、養賢堂、494p.
- 笠原 安夫 1988 作物および田畑雑草種類. 弥生文化の研究第2巻生業、雄山閣 出版、p.131-139.
- 吉崎 昌一 1992 古代雑穀の検出. 月刊考古学ジャーナルNo.355、ニューサイエンス社、p. 2-14.

第14表 柳之御所遺跡第68次発掘調査における花粉分析結果

学名	分類群	Cトレンチ			
		5層	7層	9層	10層
Arboreal pollen	樹木花粉				
<i>Abies</i>	モミ属			1	1
<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属複維管束亜属	2			3
<i>Pinus</i> subgen. <i>Haploxylon</i>	マツ属単維管束亜属		1	1	
<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ	2	15	30	14
<i>Sciadopitys verticillata</i>	コウヤマキ				1
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae	イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	1		2	2
<i>Salix</i>	ヤナギ属	1	8	1	1
<i>Juglans</i>	クルミ属			1	8
<i>Pterocarya rhoifolia</i>	サワグルミ		2	5	5
<i>Alnus</i>	ハンノキ属	1	4	10	5
<i>Betula</i>	カバノキ属			1	6
<i>Corylus</i>	ハシバミ属			1	7
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>	クマシデ属-アサダ		1	5	41
<i>Castanea crenata</i>	クリ	6	35	14	4
<i>Castanopsis</i>	シイ属				1
<i>Fagus</i>	ブナ属			5	46
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属	1	9	42	49
<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>	ニレ属-ケヤキ		1	5	57
<i>Celtis-Aphananthe aspera</i>	エノキ属-ムクノキ			2	1
<i>Rhus</i>	ウルシ属				12
<i>Acer</i>	カエデ属		2	2	20
<i>Aesculus turbinata</i>	トチノキ	1		1	7
<i>Sapindus</i>	ムクロジ属				1
<i>Vitis</i>	ブドウ属	1		1	
<i>Cornus</i>	ミズキ属			1	
<i>Fraxinus</i>	トネリコ属		1		2
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉				
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科	17	40	12	30
Rosaceae	バラ科				29
Leguminosae	マメ科			5	1
Araliaceae	ウコギ科				2
<i>Sambucus-Viburnum</i>	ニワトコ属-ガマズミ属				1
Nonarboreal pollen	草本花粉				
<i>Typha-Sparganium</i>	ガマ属-ミクリ属		1	1	18
<i>Alisma</i>	サジオモダカ属			1	7
<i>Sagittaria</i>	オモダカ属	1	1		
Gramineae	イネ科	156*	136*	196	24
<i>Oryza type</i>	イネ属型	19	21	1	5
Cyperaceae	カヤツリグサ科	20	9	55	41
<i>Polygonum</i>	タデ属	11	2	2	
<i>Polygonum sect. Persicaria</i>	タデ属サナエタデ節	4	1	2	2
<i>Fagopyrum</i>	ソバ属	1			
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科	57	12	4	3
Caryophyllaceae	ナデシコ科	2	3	1	
<i>Ranunculus</i>	キンポウゲ属	4		1	
<i>Thalictrum</i>	カラマツソウ属			3	
Cruciferae	アブラナ科	2	2		1
<i>Impatiens</i>	ツリフネソウ属			1	
Onagraceae	アカバナ科			1	1
<i>Haloragis-Myriophyllum</i>	アリノトウグサ属-フサモ属	1			
Apioidae	セリ亜科	3	4	1	4
<i>Plantago</i>	オオバコ属	2	21		
<i>Cucumis</i>	キュウリ属	1	1		
Lactuoidae	タンポポ亜科			1	1
Asteroidae	キク亜科	2	2	8	2
<i>Xanthium</i>	オナモミ属	12	3		
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	144	129	177	14
<i>Carthamus tinctorius</i>	ベニバナ		2		
Fern spore	シダ植物胞子				
Monolate type spore	単条溝胞子	4	10	56	5
Trilate type spore	三条溝胞子	5	3	2	1
Arboreal pollen	樹木花粉	16	79	131	294
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	17	40	17	63
Nonarboreal pollen	草本花粉	442	350	456	123
Total pollen	花粉総数	475	469	604	480
Pollen frequencies of 1cm ³	試料 1 cm ³ 中の花粉密度	1.7	1.9	7.2	5.9
		×10 ⁴	×10 ⁴	×10 ⁴	×10 ⁴
Unknown pollen	未同定花粉	7	9	8	9
Fern spore	シダ植物胞子	9	13	58	6
Helminth eggs	寄生虫卵				
<i>Ascaris (lumbricoides)</i>	回虫卵		4		
<i>Trichuris (trichiura)</i>	鞭虫卵		4		
<i>Clonorchis sinensis</i>	肝吸虫卵		1		
Unknown eggs	不明虫卵				1
Total	計	0	9	0	1
Helminth eggs frequencies of 1cm ³	試料 1 cm ³ 中の寄生虫卵密度	0.0	1.3	0.0	0.7
			×10 ²		×10 ²
Digestion rimeins	明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)
Charcoal fragments	微細炭化物	(+)	(+)	(+++)	(-)

* : 集塊

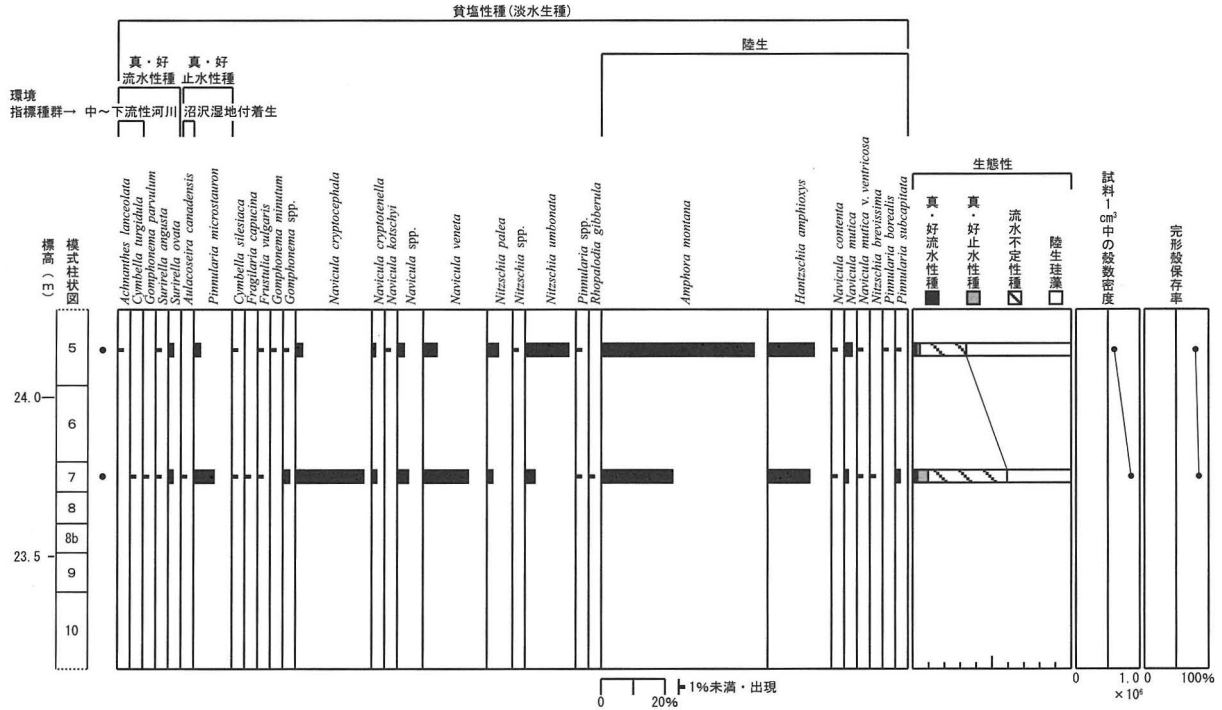


第37図 柳之御所遺跡第68次発掘調査のCトレンチにおける花粉ダイアグラム

第15表 柳之御所遺跡第68次発掘調査における珪藻分析結果

分類群	Cトレンチ	
	5層	7層
貧塩性種 (淡水生種)		
<i>Achnanthes lanceolata</i>	1	
<i>Amphora montana</i>	178	73
<i>Aulacoseira canadensis</i>		1
<i>Cymbella silesiaca</i>	1	2
<i>Cymbella turgidula</i>		1
<i>Fragilaria capucina</i>		2
<i>Frustulia vulgaris</i>	1	1
<i>Gomphonema minutum</i>	2	
<i>Gomphonema parvulum</i>		3
<i>Gomphonema</i> spp.	1	7
<i>Hantzschia amphioxys</i>	54	43
<i>Navicula contenta</i>	1	2
<i>Navicula cryptocephala</i>	8	70
<i>Navicula cryptotenella</i>	4	5
<i>Navicula kotschyi</i>	1	
<i>Navicula mutica</i>	9	4
<i>Navicula mutica v. ventricosa</i>	1	3
<i>Navicula</i> spp.	8	11
<i>Navicula veneta</i>	16	46
<i>Nitzschia brevissima</i>		3
<i>Nitzschia palea</i>	13	6
<i>Nitzschia</i> spp.	1	
<i>Nitzschia umbonata</i>	51	10
<i>Pinnularia borealis</i>	1	
<i>Pinnularia microstauron</i>	8	21
<i>Pinnularia</i> spp.	2	1
<i>Pinnularia subcapitata</i>	3	5
<i>Rhopalodia gibberula</i>		1
<i>Surirella angusta</i>	2	1
<i>Surirella ovata</i>	6	5
合計	373	327
未同定	6	16
破片	87	65
試料 1 cm ³ 中の殻数密度	6.0	8.6
	× 10 ⁵	× 10 ⁵
完形殻保存率 (%)	81.3	84.1

4 微化石（花粉・珪藻・種実）分析



第38図 柳之御所遺跡第68次発掘調査のCトレンチにおける珪藻ダイアグラム

第16表 柳之御所遺跡第68次発掘調査における種実同定結果

分類群		部位	第2面相当層 上面91-70 6~7層
学名	和名		
Herb	草本		
<i>Oryza sativa</i> L.	イネ	穎	1
		穎(破片)	5
<i>Setaria</i> Beauv.	エノコログサ属	穎	2
<i>Echinochloa</i> Ohwi et Yabuno	ヒエ	穎	557
Gramineae	イネ科	穎	1
<i>Carex</i>	スゲ属	果実	19
Cyperaceae	カヤツリグサ科	果実	13
<i>Polygonum</i> sect. <i>Persicaria</i>	タデ属サナエタデ節	果実	20
<i>Polygonum</i>	タデ属	果実	21
<i>Chenopodium</i>	アカザ属	種子	28
<i>Amaranthus</i>	ヒユ属	種子	29
Caryophyllaceae	ナデシコ科	種子	7
<i>Potentilla</i>	キジムシロ属	種子	23
<i>Oxalis</i>	カタバミ属	種子	5
<i>Solanum nigrum</i> L.	イヌホウズキ	種子	1
<i>Solanum melongena</i> L.	ナス	種子	2
<i>Siegesbeckia pubescens</i> Makino	メナモミ	果実	4

(100cm³中0.25mm篩)

IV 総 括

さいごに、今回の調査を以下の項目ごとにまとめながら総括とする。

今年度の調査目的 今年度の目的は、中心域の東側にある沢状の低地が12世紀当時どのような地形であったかを確認することを主たる目的として計画された。あわせて、南から延長する道路跡や堀跡の有無の確認を行ったものである。調査の結果、以下に触れるように、12世紀当時もある程度窪んだ状態であったことが確認された。

低地の状況 低地に相当する部分の一部にトレンチと、約4グリッド分(100m²)を掘り下げて調査を行った。最下層までは確認できなかったが、北側と南側から遺構がのる基盤層(地山)がそれぞれ低地に向かって落ち込んでいることを確認し、もともとこの低地は沢状の地形(開析谷)を呈していたことが判明した。今回調査した最下層から現地表面まで12層の堆積があり、最下層にはTo-aテフラが確認されることから10世紀前半頃には沢状の地形は今回確認した深さまで堆積が進んでいたことがわかる。このTo-aテフラは2次堆積と考えられることから、この層も自然堆積と考えられる。12世紀以降の痕跡が残るのはその上層の第2整地層である8層より上層である。今回確認した12つの層はその多くが自然に堆積した層と考えられるが2つの層のみ人為堆積と考えた。自然堆積では考えにくい地山主体の堆積だからである。これを、ある程度広い範囲を人工的に埋めている状況であることから、広義の整地と捉えている。しかし、いずれの層も、上部を流水によって削平されているため厚くなく、実際どの程度整地されていたか不明である。8層の断面を観察すると、ほぼ水平に堆積していることが読み取れるが、この層のレベルが底面で23.5m前後、南側や北側の標高とは1.5~2.0mの差がある。そのため、整地は行われているものの、窪んだ地形であることは変わらないことがわかる。第2整地層である8層が沈下により本来あった位置から降下している可能性も考えられるが、8層が水平に堆積していること、整地層上面にも流水の痕跡が確認されること、高低差が2m前後と大きいことなどから、顕著には沈下がおこっていないと判断した。

以上のような検討から、少なくとも12世紀代に位置づけられる第2整地層(8層)は、南北の地山面が落ち込んでおり、地山が同一レベルでは存在しない範囲を整地していたものと想定される。この面は周囲よりも1.5~2.0cmほど低くなっている。

第2整地層の上層にはいずれも流水時の痕跡である自然堆積層(4~7層)があり、その上に人為堆積である3層が堆積する。第1整地層であり、第2整地層と同様の様相を呈する。ただし、第1整地層については12世紀かどうか時期を特定できなかった。第1整地層は、より上位の層によって削平されているため遺存率が悪く、上位層はすべて現代の新しい層であるため、上限が特定できないからである。

このように、本来自然の沢地形は、10世紀前半頃にはある程度埋まり、その後遺跡の中心時期である12世紀には、整地が行われているものの、地形的にはある程度窪んでいたことが確認された。こうした状況は遺跡西側に広がる猫間が淵跡の状況に類似すると思われる。猫間が淵跡も必ずしも十分な調査が行われているわけではないが、これまでのところ類似した堆積環境、堆積状況が確認されている。ここでは、これらと十分比較することはできず、また、それぞれみつかった整地層が同時期かどうか判断できないが、いずれ「本報告書」の際に明らかにしていきたいと考える。

出土遺物について 68次調査から出土した遺物は土坑SK35と低地から出土した土器がほとんどである。さらに後者では盛土やこれまでの調査時の排土であるⅡ層中からの出土が大半を占める。したがって、今回の出土遺物は原位置を保っていないものがほとんどである。そのなかでSK35のみは、遺物の出土状況にやや不安があるものの、良好な一括遺物であるといえる。

SK35出土遺物の特徴は量が多いこともあるが、手づくねかわらけにある。口径が16cm以上を占める大型品にその特徴がある。この特徴は志羅山35次調査南側低地5層から出土した手づくねかわらけと類似した特徴をもっていると思われる。この手づくねかわらけは12世紀中葉頃、平泉に手づくねかわらけ導入期のものと考えられることが多い。したがって、今回のSK35出土遺物はあるいは手づくねかわらけ導入期の特徴を持っているかも知れない。これまで柳之御所遺跡からはこの時期のかわらけの様相が必ずしも明らかにされているわけではない。今後この一括資料が重要となる。

また、土坑SK35は、4・5層を掘り込んで構築されている。したがって、この層以下は土坑35出土遺物が示す年代と同時かあるいは、古くなくてはならない。もし示す年代観が12世紀中葉であるならば、4・5・6・7層から出土した遺物は12世紀前半から中葉の年代が想定されるのである。実際に、図23をみると、これらの遺物はいずれも新しい特徴は見いだせず、先に想定した年代観に当てはまりそうである。手づくねかわらけが確認されるが導入時期のものであって、基本的には12世紀中葉前後の土器様相を示していると思われる。

道路・堀跡の延長について 今回の調査目的のなかには道路や堀跡の延長が、具体的に道路跡21SC1と堀跡23SA1が、確認できるかも含まれている。調査の結果、道路も堀跡の延長も確認することができなかった。これは調査区の幅が、整備工事の制約もあって、各遺構の延長想定範囲に余裕がなかったこともあるが、上記でも触れたように、地形的に窪んでいたためでもある。また道路跡21SC1は、調査区南の県道付近までしか確認されておらず、地形的に高い今次調査区付近（低地を除き）ではすでに削平されていたのかも知れない。そのため、いずれに考えても、道路跡はその痕跡を残しておらず、延長していたか否かは不明である。調査の結果をふまえて見れば、地形的に窪んでいるため、道路跡がそれを越えて造られる可能性は低いかもしれない。また、堀跡23SA1は報告書によると、南側は板堀の可能性が考えられるが、東側は確認されている範囲では材木堀である。この形式の堀は湿地などに用いられることが多いが、今回の調査で確認することができなかった。この結果と49次調査の結果を合わせると現段階では21SA1は北に延長しない可能性が高いといえる。

今後の課題 今回の調査では、中心域東側の地形確認を行った。予想以上に削平が及んでいることや、低地には流れてきた大量の土器類が層をなして覆っており、これまで2回の調査（37・57次）が行われたものの十分状況を確認するには至らなかった。地形の確認はいまだ不確定要素はあるもののある程度状況が判断できるに至ったが、想定される遺構が検出できなかったことは、本来あったのか、あるいは当初からなかったのか、十分に判断することができない。ただ、12世紀段階の地形の状態が一端でも明らかになったことは、この範囲について想定されていた様々な考えについては反論、あるいは補強できる材料となる。ここが今年度の大きな成果といえる。今後も不明確な点を認識しつつ、少しずつ明らかにしていきたい。

第17表 かわらけ観察表

掲載番号	登録番号	種別	器種名	出土遺構	層位	残存率 (%)	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	色調	胎土	備考
1	68ROk18	かわらけ	ロクロ・小	SK35		65	(9.1)	1.9	6.25	7.5YR8/4	密、底面に黒褐色粒多数付着	
2	68ROk21	かわらけ	ロクロ・小	SK35 取り上げNo.25		80	(9.35)	1.85	6.75	10YR8/3	密、骨針含む	
3	68ROk22	かわらけ	ロクロ・小	SK35 取り上げNo.27		100	9.2	1.8	6.4	10YR8/3	密、骨針含む	
4	68ROk28	かわらけ	ロクロ・小	SK35 取り上げNo.23		95	9.05	1.85	6.3	7.5YR8/3 2.5YR7/4	密、骨針・長石やや含む	
5	68ROk25	かわらけ	ロクロ・小	SK35 取り上げNo.38		90	9.3	1.85	7.3	10YR8/3 5YR8/4	やや密、赤褐色・茶褐色粒多く含む	
6	68ROk19	かわらけ	ロクロ・小	SK35		80	9.1	2.0	6.25	10YR8/3	密、骨針含む	
7	68ROk20	かわらけ	ロクロ・小	SK35 取り上げNo.9		70	9.0	6.1	1.6	10YR8/4	密?長石やや含む	
8	68ROk34	かわらけ	ロクロ・小	SK35	1層	70	9.3	1.4	6.7	2.5Y8/3	骨針・雲母・赤褐色粒含む	
9	68ROk14	かわらけ	ロクロ・小	SK35		70	9.0	1.8	6.75	10YR8/3	やや密、黒褐色粒多く含む	
10	68ROk31	かわらけ	ロクロ・小	SK35		90	9.4	1.7	6.7	7.5YR8/3	密、骨針含む	
11	68ROk27	かわらけ	ロクロ・小	SK35 取り上げNo.42		96	9.2	1.25	6.0	7.5YR8/2	密、雲母らしき粒多く含む	
12	68ROk24	かわらけ	ロクロ・小	SK35 取り上げNo.30		95	9.65	1.8	6.3	10YR8/3	密、骨針多く含む	
13	68ROk17	かわらけ	ロクロ・小	SK35		95	9.0	1.85	6.35	10YR8/3	密、茶褐色粒多く含む	
14	68ROk23	かわらけ	ロクロ・小	SK35 取り上げNo.29		100	9.45	1.55	6.5	7.5YR8/3	密、骨針多く含む	
15	68ROk33	かわらけ	ロクロ・小	SK35	2層	90	8.7	1.7	6.55	10YR8/1	密、骨針含む	
16	68ROk29	かわらけ	ロクロ・小	SK35 取り上げNo.23		75	(9.2)	1.9	6.2	2.5Y8/3	やや粗・骨針・長石を少量、赤褐・暗褐色粒を含む	
17	68ROk30	かわらけ	ロクロ・小	SK35 取り上げNo.24		100	9.1	1.85	6.0	10YR8/3	密	
18	68ROk26	かわらけ	ロクロ・小	SK35 取り上げNo.38		70	9.45	1.6	6.7	10YR8/3	骨針・長石含む	
19	68ROk15	かわらけ	ロクロ・小	SK35		95	9.2	1.8	6.3	10YR8/3	やや粗、骨針含む	
20	68ROk6	かわらけ	ロクロ・小	SK35 取り上げNo.35		65	(8.45)	1.2	6.45	10YR8/3	やや粗、暗赤褐色粒含む	
21	68ROk16	かわらけ	ロクロ・小	SK35		55	(9.9)	1.78	6.55	2.5Y8/4	やや粗、骨針少量・赤褐色粒子を多く含む	
22	68ROk32	かわらけ	ロクロ・小	SK35	2層	70	9.7	2.05	6.9	10YR8/3	やや粗、長石・砂・赤褐色粒多く含む	
23	68ROk60	かわらけ	ロクロ・大	SK35 取り上げNo.10		100	13.75	3.95	8.05	10YR8/3	やや粗、長石・砂粒・雲母片多く含む	
24	68ROk57	かわらけ	ロクロ・大	SK35 取り上げNo.12		80	13.9	3.75	6.65	7.5YR7/6	密、骨針・赤褐色粒・黒褐色粒多く含む	
25	68ROk66	かわらけ	ロクロ・大	SK35	1層	35	(13.7)	4.5	(5.5)	2.5Y8/1 10YR8/3 10YR8/4	やや粗、長石・茶褐色粒多く含む	
26	68ROk64	かわらけ	ロクロ・大	SK35	2層	65	(13.35)	4.1	(7.2)	10YR5/2	やや密、骨針・長石多く含む	
27	68ROk51	かわらけ	ロクロ・大	SK35 取り上げNo.1		90	(13.9)	3.8	7.4	10YR8/3	やや密、黒褐・赤褐色粒を多く含む	
28	68ROk45	かわらけ	ロクロ・大	SK35	1層	90	14.25	4.4	7.0	10YR8/4 2.5Y8/1	やや粗、長石・砂粒多く含む	
29	68ROk37	かわらけ	ロクロ・大	SK35 取り上げNo.5		65	14.2	3.95	6.9	7.5YR8/3	密、骨針・長石多く含む	
30	68ROk63	かわらけ	ロクロ・大	SK35	1層	65	(14.8)	4.5	6.65	10YR8/4 2.5YR7/6 7.5YR6/1	やや密、長石・砂粒多く含む	
31	68ROk56	かわらけ	ロクロ・大	SK35 取り上げNo.11		90	16.45	3.62	7.8	7.5YR7/6 2.5YR7/6 10YR4/1	密、骨針多数・雲母らしき粒含む	
32	68ROk52	かわらけ	ロクロ・大	SK35 取り上げNo.2		85	14.45	4.0	6.3	5Y8/2	やや粗、骨針・長石・砂粒含む	
33	68ROk53	かわらけ	ロクロ・大	SK35 取り上げNo.3		100	14.9	4.1	7.9	5YR8/4	密、骨針多く含む	
34	68ROk54	かわらけ	ロクロ・大	SK35 取り上げNo.4		100	14.8	4.1	7.8	7.5YR8/3	密、骨針含む	
35	68ROk59	かわらけ	ロクロ・大	SK35 取り上げNo.20		40	(15.1)	3.82	(8.35)	5YR8/4 7.5YR8/2	やや密、骨針・黒褐色粒多数混入	
36	68ROk55	かわらけ	ロクロ・大	SK35 取り上げNo.7		100	15.05	7.7	3.9	5YR8/4	密、骨針長石含む	
37	68ROk62	かわらけ	ロクロ・大	SK35 取り上げNo.36		50	(14.8)	3.4	(8.8)	10YR8/4	密、骨針・長石含む	
38	68ROk65	かわらけ	ロクロ・大	SK35	2層	40	(14.9)	4.6	(7.1)	2.5Y8/4	密	
39	68ROk61	かわらけ	ロクロ・大	SK35 取り上げNo.22		95	15.85	4.8	7.6	7.5YR8/3	密、骨針含む	
40	68ROk4	かわらけ	手づくね・小	SK35 取り上げNo.28		96	9.85	1.9		2.5Y8/3	密、骨針含む	

掲載番号	登録番号	種別	器種名	出土遺構	層位	残存率 (%)	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	色調	胎土	備考
41	68ROk1	かわらけ	手づくね・小	SK35 取り上げNo.33		95	9.35	2.0		2.5Y8/3	密、骨針・長石含む	
42	68ROk3	かわらけ	手づくね・小	SK35 取り上げNo.40		98	9.7	1.7		2.5Y8/3	密、骨針含む	
43	68ROk5	かわらけ	手づくね・小	SK35 取り上げNo.32		95	10.1	2.1		2.5Y8/4	密、骨針含む	
44	68ROk2	かわらけ	手づくね・小	SK35 取り上げNo.40		97	9.9	1.9		2.5Y8/3	密、骨針含む	
45	68ROk44	かわらけ	手づくね・大	SK35 取り上げNo.41		97	13.95	3.1		7.5YR8/3	密	
46	68ROk41	かわらけ	手づくね・大	SK35 取り上げNo.43		97	14.5	3.5		2.5Y8/4	密	
47	68ROk58	かわらけ	手づくね・大	SK35 取り上げNo.18		55	(14.5)	2.9		2.5YR8/4	密、わずかに骨針含む	
48	68ROk47	かわらけ	手づくね・大	SK35	1層	45	(15.0)	2.7		10YR8/3	密	
49	68ROk38	かわらけ	手づくね・大	SK35 取り上げNo.14		40	(15.7)	2.7		2.5Y8/3	やや密、長石・砂粒を多く含む	
50	68ROk46	かわらけ	手づくね・大	SK35	2層	60	15.8	3.0		2.5Y8/3	密、長石・赤褐色粒を多く含む	
51	68ROk39	かわらけ	手づくね・大	SK35 取り上げNo.15		98	14.4	3.1		7.5YR8/3	密	
52	68ROk43	かわらけ	手づくね・大	SK35 取り上げNo.39		98	14.75	3.0		2.5YR8/2	密、骨針あり	
53	68ROk35	かわらけ	手づくね・大	SK35		95	15.3	3.65		2.5Y8/2	密	
54	68ROk40	かわらけ	手づくね・大	SK35 取り上げNo.31		95	15.8	3.3		10YR8/3	密、骨針・長石含む	内面にスス
55	68ROk42	かわらけ	手づくね・大	SK35 取り上げNo.8		60	15.55	3.2	9.05	7.5YR8/3	やや密、長石・砂粒・黒褐色粒多く含む	穿孔かわらけ
56	68ROk36	かわらけ	手づくね・大	SK35 取り上げNo.4		65	16.2	3.1	10.05	10YR8/2	密、黒褐色粒多く含む	穿孔かわらけ
57	68ROk84	かわらけ	内折れ?	92-72 SD4	埋土一括	5	(11.7)	2.1		2.5Y8/3	密	
58	68ROk8	かわらけ	ロクロ・小	Cトレンチ 90-72	2層	80	8.4	1.8	5.9	5YR7/6	やや粗、骨針・赤褐色粒含む	
59	68ROk88	かわらけ	ロクロ・小	93-74	2層	90	9.2	1.9	5.35	10YR8/2	密、長石・砂粒多く含む	
60	68ROk85	かわらけ	手づくね・小	89・90-72	2層	40	8.7	1.6		7.5YR8/3	密	
61	68ROk87	かわらけ	ロクロ・大	93-74	2層	45		(3.4)	6.2	7.5YR8/4	やや密、骨針・長石多数混入	
62	68ROk68	かわらけ	ロクロ・小	92-71	3層	60	(8.8)	2.9	(5.2)	10YR8/3	密、長石・砂粒多く含む	
63	68ROk67	かわらけ	ロクロ・小	92-71	3層	85	8.2	1.8	5.2	10YR8/3	やや密、長石・黒褐色粒・赤褐色粒多く含む	
64	68ROk10	かわらけ	ロクロ・小	92-72 第1整地層	3・4層	98	8.1	2.0	5.35	7.5YR8/2	密、骨針・長石含む	
65	68ROk74	かわらけ	ロクロ・小	91-70	6層	100	9.15	2.7	5.4	7.5YR8/3	やや密、長石多く含む	
66	68ROk49	かわらけ	ロクロ・大	92-71	3層	80	(14.95)	3.85	6.45	7.5YR8/4	やや密、長石・赤褐色粒含む	
67	68ROk77	かわらけ	ロクロ・大	91-71	3層	40	(13.45)	7.3	3.35	2.5Y8/4	密、骨針含む	
68	68ROk72	かわらけ	ロクロ・小	Cトレンチ	5層	70	8.9	1.7	5.05	10YR8/2	粗、長石多く含む	
69	68ROk71	かわらけ	ロクロ・小	91-72	5層	55	(7.7)	1.5	5.7	7.5YR8/3	やや粗、底部に黒褐色粒多数	
70	68ROk9	かわらけ	ロクロ・小	91-70	4~5層	80	8.2	1.85	6.0	7.5YR8/2	密、骨針含む	
71	68ROk69	かわらけ	ロクロ・小	91-68	5層上面	80	8.9	1.7	6.4	10YR8/4 2.5Y8/2	やや粗、赤褐色・黒褐色粒多く含む	
72	68ROk73	かわらけ	ロクロ・小	Cトレンチ	5層	60	(7.9)	2.6	4.3	2.5Y8/2	やや粗、骨針・長石・赤褐色粒含む	
73	68ROk70	かわらけ	ロクロ・小	91-70	5層	70	8.8	2.1	4.65	5YR8/4	やや密、骨針多く含む	
74	68ROk76	かわらけ	ロクロ・小	91-71	6層	80	8.3	2.0	6.0	10YR8/1 10YR4/1	密、骨針多く含む	
75	68ROk75	かわらけ	ロクロ・小	91-71	6層	40	(9.25)	1.93	(6.45)	2.5Y8/2	密	
76	68ROk78	かわらけ	ロクロ・大	90-69	5層	35	(13.1)	3.1	(5.3)	2.5Y8/4	密、骨針含む	粘土付着
77	68ROk83	かわらけ	柱状高台	Eトレンチ	一括	20		(2.5)	4.65	5YR7/6	やや密、骨針・黒褐色粒多く含む	
78	68ROk82	かわらけ	柱状高台	91-71	6層	20		(2.2)	6.7	7.5YR8/3	やや密、長石・赤褐色粒を含む	
79	68ROk79	かわらけ	ロクロ・大	90-70	5層	40	(13.6)	4.5	(5.2)	5R6/1	密、骨針多く含む	
80	68ROk80	かわらけ	ロクロ・大	Cトレンチベルト中 91-71	4層	50	(14.5)	4.75	5.4	2.5Y8/3	密	
81	68ROk50	かわらけ	手づくね・大	Cトレンチ北端 92-70	5~6層	75	14.9	3.4		2.5Y8/3	密、骨針あり	
85	68ROk13	かわらけ	ロクロ・小	91-71	3~4層	80	8.55	2.1	5.6	10YR8/1	やや粗、骨針・長石含む	
86	68ROk11	かわらけ	ロクロ・小	91-71	3~4層	80	8.6	2.2	5.7	2.5Y8/3	密、長石多く含む・雲母片混入	
87	68ROk12	かわらけ	ロクロ・小	91-71	3~4層	100	8.3	1.6	5.7	7.5YR8/3	骨針・長石含む	
88	68ROk7	かわらけ	ロクロ・小	Cトレンチ	2~6層	97	8.4	1.85	4.45	5YR8/3	やや粗、骨針・長石やや含む	
89	68ROk48	かわらけ	土師器・杯	Cトレンチ	2~6層	40	(13.5)	3.5	6.75	内10YR4/1 外7.5YR8/3	密	内面黒色処理
90	68ROk81	かわらけ	手づくね・大	Aトレンチ	3~7層	5	(12.9)			7.5YR8/3	密	内外面に漆付着
	68ROk86	かわらけ	ロクロ・大	91-71~92-71	II層							

第18表 国産陶器観察表

掲載番号	登録番号	産地	器種名	出土遺構	層位	部位	残存率 (%)	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	備考
92	68ROt128	渥美	甕	93-73	Ⅱ～2層	口縁部	5				
93	68ROt108	渥美	甕	91-70	Ⅱ～2層	頸部	10				
94	68ROt130	渥美	甕	93-74	2層	底部	10				
95	68ROt144	渥美	甕	Cトレンチ 92-72～92-71	Ⅱ～2層	底部	10				
96	68ROt87	渥美	片口鉢	72-73	Ⅱ層	口縁部	10	25.8			
97	68ROt57	渥美	片口鉢	93-73	2層	口縁部	5	(30.4)			
98	68ROt38	渥美	山茶碗	91-72		底部	10			(6.7)	
99	68ROt160	渥美	山皿	91-70	4～5層	底部					
100	68ROt63	渥美	甕	93-73	3層	胴部	5				
101	68ROt55	渥美	甕	93-73	2層	胴部	5				
102	68ROt103	渥美	甕	91-70	Ⅱ～2層	胴部	5				
103	68ROt6	渥美	甕	89-71	2層	胴部	5				
104	68ROt23	渥美	甕	90-71	2層	胴部	5				
105	68ROt129	渥美	甕	91-69	4層	胴部	5				
106	68ROt78	渥美	甕	SD2 (90-71)		胴部	5				
107	68ROt109	渥美	甕	91-71	2層	胴部	5				
108	68ROt104	渥美	甕	91-70	Ⅱ～2層	胴部	5				
109	68ROt2	渥美	甕	89-70	I層	胴部	5				
110	68ROt75	渥美	甕	T11	I層(表土)	胴部	5				
111	68ROt86	渥美	甕	SK35	2層	胴部	5				
112	68ROt133	渥美	甕	94-75	Ⅱ層	胴部	10				押印
113	68ROt127	渥美	甕	93-73	Ⅱ～2層	胴部	5				
114	68ROt106	渥美	甕	91-70	Ⅱ～2層	胴部	5				
115	68ROt121	渥美	甕	92-72	3～4層(第1遺地層)	胴部	5				
116	68ROt41	渥美	甕	91-73	Ⅱ層	胴部					
117	68ROt11	渥美	甕	90-70	2層	胴部	5				
118	68ROt13	渥美	甕	90-70	2層	胴部	5				
119	68ROt88	渥美	甕	89-73	Ⅱ層	胴部	5				
120	68ROt137	渥美	甕	T8 南斜面表土(盛土)	1層	胴部	5				
121	68ROt113	渥美	甕	91-71, 92-72	Ⅱ～2層	胴部	5				
122	68ROt71	渥美	甕	T10	I層(表土)中	胴部	5				
123	68ROt8	渥美	甕	90-68		胴部	5				
124	68ROt116	渥美	甕	92-71	Ⅱ層	胴部	5				
125	68ROt102	渥美	甕	91-70	2～5層	胴部	5				
126	68ROt114	常滑	広口壺	91-73	Ⅱ～2層	口縁部	10	(19.4)			
127	68ROt65	常滑	大甕	93-74	Ⅱ～2層	口縁部	3				
128	68ROt58	常滑	甕	93-73	2層	胴部	5				
129	68ROt111	常滑	甕	91-72	2層	胴部	5				
130	68ROt30	常滑	甕	91-70	3～5層	体部	5				
131	68ROt143	常滑	三筋壺	Cトレンチ	3～7層	胴部	10				二条の沈線
132	68ROt154	常滑	甕	SD2 (89-71)		胴部	5				
133	68ROt66	常滑	甕	93-75	Ⅱ層	胴部	5				
134	68ROt74	常滑	甕	T11	I層(表土)	胴部	5				
135	68ROt7	常滑	甕	89-71	Ⅱ層	体部	5				
136	68ROt151	常滑	片口鉢	Cトレンチ 91-72	Ⅱ～2層	口縁部	5				
137	68ROt42	常滑	片口鉢	91-73	Ⅱ層	口縁部	5				
138	68ROt51	常滑	片口鉢	92-71	6層	底部					Ro t 153と接合
	68ROt153	常滑	片口鉢	Cトレンチ 91-72	Ⅱ～2層	底部	5				Ro t 51と接合
139	68ROt27	須恵器系	甕	SD2 90-71	2層	胴部	5				
140	68ROt99	須恵器系	甕	90-73	Ⅱ層	胴部	5				
141	68ROt76	須恵器系	甕	SD2 (89-71)		底部	5			(10.2)	

掲載番号	登録番号	産地	器種名	出土遺構	層位	部位	残存率(%)	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	備考
142	68ROt47	須恵器	甕	91-71~92-71	2層	頸部	20				タタキ
143	68ROg4	須恵器	甕	SK35	上層	口縁部	5				
144	68ROt49	須恵器?	壺か	SK35 下々層	3. 4. 6層	底部	5				タタキ
145	68ROt119	須恵器	甕	92-72	II層	胸部	5				タタキ
146	68ROt112	須恵器	甕	91-71~92-71	II層	胸部	5				タタキ
147	68ROt100	須恵器	甕	90-70~91-70	II~2層	胸部	5				
148	68ROt48	須恵器	甕	92-70	II~2層	胸部	5				タタキ
149	68ROt120	須恵器	甕	92-72	II層残存	胸部	5				タタキ
150	68ROt142	須恵器	甕	91-71~92-71 Cトレンチ東	II層	胸部	5				タタキ
151	68ROt10	須恵器	甕	90-70	2層	胸部	3				タタキ
152	68ROt59	須恵器	甕	93-73	3層	胸部	5				タタキ
153	68ROt132	須恵器	甕	93-74	2層	胸部	5				タタキ
154	68ROt96	須恵器	甕	90-71	4~5層	胸部	5				タタキ
155	68ROt56	須恵器	甕	93-73	2層	胸部	5				タタキ
156	68ROt81	須恵器	甕	SD3 (92-71)		胸部	8				タタキ
157	68ROt82	須恵器	甕	SD4 (92-72)		胸部	5				タタキ
158	68ROt84	須恵器	甕	SD4 (92-72)		胸部	10				タタキ
163	68ROt155	渥美	壺	SD2 (90-71)		口縁部	10				
	68ROt1	渥美	甕	89-70	I層	胸部	10				
	68ROt3	渥美	甕	89-70	I層	頸部	5				
	68ROt4	渥美	甕	89-70	I層	胸部	3				
	68ROt5	渥美	甕	89-71	II層	胸部	3				
	68ROt9	渥美	甕	90-70		胸部	3				
	68ROt14	須恵器	甕	90-70	9~10層	頸部	5				
	68ROt15	渥美	甕	90-71		胸部	5				
	68ROt17	須恵器	甕	90-71	4層	胸部	5				
	68ROt22	渥美	甕	90-71	2層	胸部	5				
	68ROt24	渥美	甕	90-71	2層	胸部	5				
	68ROt25	渥美	甕	90-71	2層	胸部	5				
	68ROt26	渥美	甕	SD2 (90-71)	2層	胸部	5				
	68ROt28	常滑	甕	SD2 (90-71)	2層	胸部	5				
	68ROt31	須恵器	甕	91-70	5層	胸部	3				
	68ROt32	渥美	甕	91-71	II~2層	胸部	5				
	68ROt33	須恵器	甕	91-71	6~7層	胸部	5				
	68ROt34	須恵器	甕	91-71	2層	胸部	5				
	68ROt35	渥美	甕	91-72		胸部	10				
	68ROt36	渥美	片口鉢	91-72		口縁部	7				
	68ROt37	須恵器	甕	91-72	2層	胸部	3				
	68ROt39	渥美	山茶碗	91-72		底部	5				
	68ROt40	渥美	甕	91-72	2層	胸部	5				
	68ROt43	渥美	甕	91-73		胸部	3				
	68ROt44	渥美	甕	91-73	II層	胸部	3				
	68ROt45	渥美	甕	91-73	II~2層	胸部	3				
	68ROt46	常滑	甕	91-71~92-71	II層	胸部	3				
	68ROt50	渥美	甕	92-71	3層	胸部	10				
	68ROt52	渥美	甕	92-73	2層	胸部	3				
	68ROt53	常滑	甕	91-74 92-74		胸部	5				
	68ROt54	渥美	甕	93-73	2層	胸部	3				
	68ROt60	常滑	甕	93-73	3層	胸部	3				
	68ROt61	須恵器	甕	93-73	3層	胸部	5				タタキ
	68ROt62	渥美	甕	93-73	3層	胸部	3				押印
	68ROt64	渥美	甕	93-74	II~2層	胸部	3				

掲載番号	登録番号	産地	器種名	出土遺構	層位	部位	残存率 (%)	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	備考
	68ROt67	渥美	甕	94-72	第1面上	胴部	10				押印
	68ROt68	常滑	甕	94-72	第1面上	胴部	3				
	68ROt69	渥美	甕	Dトレンチ南斜面	地山直上層	胴部	5				
	68ROt70	渥美	甕	T4 粗堀		胴部	5				
	68ROt72	渥美	甕	T11	I層(表土)	胴部	3				
	68ROt73	常滑	甕	T11	I層(表土)	胴部	5				
	68ROt77	常滑	甕	SD2 (89-71)		胴部	5				
	68ROt79	渥美	甕	SD3 (92-72)		胴部	5				
	68ROt80	須恵器	甕	SD3 (92-72)		胴部	5				
	68ROt83	渥美	甕	SD4 (91-72)		胴部	3				
	68ROt85	常滑	甕	SK35		胴部	5				
	68ROt89	渥美	甕	89-73	II層	胴部	3				
	68ROt90	須恵器系	甕	90-69	2層	胴部	3				
	68ROt92	常滑	甕	90-69	4層	胴部	3				
	68ROt93	常滑	甕	90-71	2~5層	胴部	5				
	68ROt95	渥美	甕	90-71	II層	頸部	5				
	68ROt97	常滑	甕	90-72	II層	胴部	3				
	68ROt98	渥美	甕	90-72	2~5層	胴部	5				
	68ROt101	常滑	甕	91-70	2~5層	胴部	3				
	68ROt107	渥美	甕	91-70	II~2層	胴部	3				
	68ROg27	常滑	甕	T8	II層	胴部	5				
	68ROg31	近現代		92-71	II層						
	68ROt115	常滑	甕	91-73	II~2層	胴部	5				
	68ROt117	須恵器	甕	92-71	II層	胴部	5				タタキ
	68ROt118	現代		92-71	II層						
	68ROt122	常滑	甕	92-73	2層	胴部	3				
	68ROt123	常滑	甕	92-73	2層	胴部	3				
	68ROt124	渥美	甕	92-73	2~4層(第1面検出中)	胴部	3				
	68ROt125	須恵器系	甕	93-73	II~2層	胴部	5				
	68ROt126	渥美	甕	93-73	II~2層	胴部					押印
	68ROt129	渥美	甕	93-74	2層	胴部	5				
	68ROt131	渥美	甕	93-74	II~2層	胴部	5				
	68ROt136	須恵器	甕	T8 北拡張区	II層	口縁部	3				
	68ROt138	渥美	甕	Aトレンチ(北)	3~7層	頸部	5				
	68ROt139	須恵器	甕	Aトレンチ(北)	3~7層	胴部	3				
	68ROt140	渥美	甕	Aトレンチ	3~7層	胴部	3				
	68ROt141	常滑	甕	91-71~92-72 Cトレンチ	2層	胴部	5				
	68ROt145	常滑	片口鉢	Dトレンチ	II層	胴部	3				
	68ROt146	渥美	甕	Dトレンチ	II層	胴部	10				
	68ROt147	常滑	片口鉢	Dトレンチ(南)	II層	胴部	5				
	68ROt148	須恵器	甕	Dトレンチ(南)	II層	胴部	5				
	68ROt150	須恵器	甕	Cトレンチ	6b層	胴部	5				
	68ROt157	常滑	甕	SD4 (91-72)		口縁部	3				
	68ROt159	現代		Dトレンチ(南)	II層						
	68ROg1	渥美	甕	91-71	2層	胴部	3				
	68ROg3	常滑	甕	91-73	II~2層	胴部	3				
	68ROg5	常滑	甕	91-71	II~2層	胴部	3				
	68ROg15	常滑	甕	90-72	2~5層	胴部	3				
	68ROg20	肥前	皿	91-73	II層						初期伊万里
	68ROg23	現代		92-72	3~4層						
	68ROg25	肥前	皿	92-73(中央ベルト)	I~II層						

第19表 中国産陶磁器観察表

掲載番号	登録番号	種別	器種名	出土遺構	層位	部位	残存率 (%)	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	備考
159	68ROg7	青白磁	碗	91-72	2層	口縁部	3				
160	68ROg26	白磁	碗	94-72	3層	口縁部	3	(11.4)			II類か
161	68ROg24	白磁	碗	92-72 (中央ベルト)	I～II層	口縁部	10	16.5			III類
162	68ROg11	白磁	皿	93-73	2層	口縁部	3	(9.2)			VII-2aか
164	68ROg6	白磁	壺類	92-71	2層	頸部	5				III類
165	68ROg29	白磁	壺類	SD3 (89-69)	埋土一括	胴部	15				II類
166	68ROg21	白磁	壺類	92-71	II層	胴部	3				II類
167	68ROg14	白磁	壺類	90-71	2～5層	胴部	3				III類
168	68ROg8	白磁	壺類	93-73	II～2層	胴部	10				II類
169	68ROg9	白磁	壺類	93-73	2層	胴部	3				III類
170	68ROg17	白磁	壺類カ	91-71～92-71	II層	胴部	5				II類
171	68ROg2	白磁	壺類	91-71	3層	胴部	5				II類
172	68ROg16	白磁	壺類	90-73	II層	胴部	3				II類
173	68ROg22	白磁	碗	92-72	II～2層	胴部	5				II類
174	68ROg10	白磁	壺類	93-73	2層	胴部	3				II類
175	68ROg18	白磁	壺類	91-71	2層残存	胴部	3				II類
176	68ROg19	白磁	壺類	91-72	II～2層	底部	10			9.0	III類
177	68ROg30	白磁	壺類	SD2 (89-71)	埋土一括	胴部	5				II類
178	68ROg28	青白磁	小壺蓋	SD2 (89-71)	埋土一括	蓋	5				
179	68ROg13	青磁	碗	89-70	2層	底部	10			5.0	龍泉I類か
180	68ROt12	中国陶器	壺類	90-70	断面(91-71)-1層	胴部	5				ROt19と接合
180	68ROt16	中国陶器	壺類	90-71	2層	底部	10			16.4	ROt20と接合 XII類 Rot16.18.19.20. 91と同一個体
180	68ROt18	中国陶器	壺類	90-71	2層	底部	10				Rot12.18.19.20. 91と同一個体
180	68ROt19	中国陶器	壺類	90-71	2層	胴部	5				ROt12と接合 Rot12.16.20.91 と同一個体
180	68ROt20	中国陶器	壺類	90-71	2層	胴部	3				ROt16と接合 Rot12.16.18.19. 91と同一個体
180	68ROt91	中国陶器	壺類	90-70	2層	底部	10			16.4	XII類か Rot12.16.18.19. 20と同一個体
181	68ROt94	中国陶器	壺類	90-71	2～5層	胴部	3				XII類
182	68ROt135	中国陶器	壺類	T1	II層	胴部	5				XII類か

第20表 その他土器観察表

掲載番号	登録番号	種別	器種名	出土遺構	層位	部位	残存率 (%)	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	備考
82	68RO5	土師器	杯	Bトレンチ	6b層	底部	40	(13.8)	(4.9)	5.6	68RO6.8.10と接合
83	68RO1	土師器	高台杯	91-70	6~7層	底部	20		(2.05)	(5.9)	内黒
84	68RO46	土師器	鉢?	92-71	6層	口縁部	5	16.9			
91	68RO33	須恵器	杯	Bトレンチ	9層	底部	70	15.2	4.6	5.7	Ro34と接合
	68RO34	須恵器	杯	Bトレンチ	9層	体部					Ro33と接合
	68RO2	土師器	杯	Bトレンチ	7層	体部	3				内黒
	68RO3	土師器	杯	91-72	II層	口縁部	3				内黒
	68RO4	土師器	杯	91-71	6層	底部	10				内黒
	68RO7	土師器	杯	Bトレンチ	6b層	底部	10				
	68RO9	土師器	甕	Bトレンチ	6b層	底部?	5				
	68RO11	土師器	杯	Bトレンチ	6b層	体部?	3				
	68RO12	土師器	甕	Bトレンチ	6b層	体部?	5				
	68RO13	土師器	杯	Bトレンチ	6b層	体部?	3				
	68RO14	土師器	杯	No.99	6~7層	口縁部	5				
	68RO15	土師器	杯	91-70	5層	底部	5				内黒
	68RO16	土師器	甕	SK35	8.9.10層	体部	5				
	68RO17	土師器	甕	90-70	6~7層	体部	5				
	68RO18	土師器	甕	90-70	6~7層	口縁部	5				
	68RO19	土師器	甕	90-70	6~7層	体部	3				
	68RO20	土師器	甕	90-70	6~7層	体部	5				
	68RO21	土師器	甕	90-70	6~7層	底部	10				
	68RO22	土師器	甕	90-70	6~7層	体部?	10				
	68RO23	土師器	甕	90-70	6~7層	体部	10				
	68RO24	土師器	杯	90-71	II層	体部	5				内黒
	68RO25	土師器	杯	91-71	9層	体部	5				内黒
	68RO26	土師器	杯	91-71	9層	体部	3				内黒
	68RO27	土師器	杯	91-71	9層	体部	3				内黒
	68RO28	土師器	杯	91-71	9層	体部	3				内黒
	68RO29	土師器	甕	91-71	7層	体部	3				
	68RO30	土師器	甕	91-71	7層	体部	3				
	68RO31	土師器	甕	91-71	7層	体部	3				
	68RO32	土師器	甕	Aトレンチ	5~7層	体部	10				
	68RO35	縄文土器	深鉢	92-71	3層	体部	5				
	68RO36	縄文土器	深鉢	92-73付近	I~II層	体部	3				
	68RO37	縄文土器	深鉢	SK35	8.9.10層	体部	5				
	68RO38	縄文土器	深鉢	SK35	8.9.10層	体部	3				
	68RO39	縄文土器	深鉢	37次のCトレンチ		体部	5				3条の沈線
	68RO40	縄文土器	深鉢	90-70	6~7層	体部	5				
	68RO41	土師器	甕	90-70	5層	底部	5				
	68RO42	土師器	甕	90-70	5層	体部	5				
	68RO43	土師器	甕	90-70	5層	体部	3				
	68RO44	土師器	高台杯	90-72	4層	底部	5				
	68RO45	土師器	高台杯	91-72	2層	底部	5			4.6	
	68RO t 134	土師器	甕	90-71	6~7層	胴部	2				須恵質
	68RO t 152	土師器	甕	91-72 Cトレンチ	II~2層	胴部	10				須恵質
	68ROt158	土師器	甕	92-71	3層(第1整地層)	胴部	10				須恵質

第21表 土製品観察表

掲載番号	登録番号	種別	器種名	出土遺構	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
196	68RP6	土製品	不明	92-72	5層	(8.8)	(7.7)	(1.4)	98	
197	68RP7	土製品	鞆羽口	92-74	2層	(6.8)	(7.8)	(2.9)	180	
198	68RT5	土製品	鞆羽口	91-71 Cトレベルト中	4層	(10.0)	(6.3)	(2.8)	143	
	68RP1	土製品	鞆羽口	90-69	2層	(6.7)	(5.1)	(2.5)	77	
	68RP2	土製品	鞆羽口	91-70	4～5層	(8.2)	(5.8)	2.8	138	
	68RP3	土製品	鞆羽口	91-70	4～5層	(6.3)	(5.3)	(2.8)	62	
	68RP4	土製品	鞆羽口	91-72	2層	(7.4)	(6.5)	(3.1)	156	
	68RP5	土製品	鞆羽口	92-71	II層	(3.3)	(2.9)	(1.7)	18	
	68RP8	土製品	鞆羽口	SD3 (91-70)	埋土一括	(3.1)	(3.9)	(2.1)	24	
	68RP9	土製品	鞆羽口	T10	表土	(2.7)	(2.1)	(1.5)	4	
	68RP10	土製品	鞆羽口	91-71	2層	(1.8)	(1.5)	(0.8)	2	
	68RP11	土製品	鞆羽口	91-70 断面(91-71)	II～2層	(2.0)	(1.4)	(0.7)	1	
	68RY1	土製品	土壁	90-70	5層	(3.8)	(2.6)	(1.7)	16	
	68RY2	土製品	土壁	90-71	5層	(3.0)	(3.1)	(2.2)	15	
	68RY3	土製品	土壁	68SD4 (90-69)	埋土一括	(2.1)	(3.6)	(2.2)	17	
	68RY4	土製品	土壁	90-71	2層	(4.4)	(3.7)	(2.5)	33	
	68RY5	土製品	土壁	90-71	5層	(1.7)	(2.6)	(2.7)	7	
	68RY6	土製品	土壁	90-71	4～5層	(4.7)	(3.1)	(1.3)	16	
	68RY7	土製品	土壁	91-69	5～6層	(5.1)	(3.2)	(2.1)	33	
	68RY8	土製品	土壁	91-71	5層	(5.0)	(3.5)	(1.7)	23	
	68RY9	土製品	土壁	91-72 (根の下)	5, 6層一括	(7.1)	(5.4)	(3.4)	116	
	68RY10	土製品	土壁	92-71		(3.0)	(4.4)	(2.0)	30	
	68RY11	土製品	土壁	90-71	4～5層	(3.6)	(2.5)	1.0	7	
	68RY12	土製品	土壁	68SD2	埋土一括	(3.8)	(3.1)	(2.6)	19	
	68RY13	土製品	土壁	93-73	II～2層	(4.7)	(3.5)	(1.9)	17	
	68RY14	土製品	土壁	SD2 (90-71)	埋土一括	(5.2)	(5.8)	(4.1)	92	
	68RY15	土製品	土壁	90-69	2層	(3.8)	(2.5)	(1.8)	10	
	68RY16	土製品	土壁	90-69	2層	(3.6)	(2.3)	(1.9)	12	
	68RY17	土製品	土壁	90-69	2層	(4.1)	(2.8)	(2.0)	16	
	68RY18	土製品	土壁	90-69	2層	(2.7)	(2.9)	(1.4)	8	
	68RY19	土製品	土壁	90-69	2層	(3.7)	(2.3)	(1.7)	10	
	68RY20	土製品	土壁	90-69	2層	(3.0)	(2.4)	(1.5)	9	
	68RY21	土製品	土壁	90-69	2層	(4.2)	(3.4)	(2.8)	19	
	68RY22	土製品	土壁	90-69	2層	(3.3)	(2.7)	(1.7)	9	
	68RY23	土製品	土壁	90-69	2層	(4.2)	(3.5)	(1.9)	16	
	68RY24	土製品	土壁	SD3 (92-71)	埋土一括	(5.0)	(4.6)	(2.3)	27	
	68RY25	土製品	土壁	SD4 (92-71)	埋土一括	(5.4)	(4.2)	(2.6)	39	
	68RY26	土製品	土壁	トレンチ	粗堀	(3.9)	(2.8)	(2.3)	17	
	68RY27	土製品	土壁	トレンチ	粗堀	(2.5)	(2.1)	(1.4)	7	
	68RY28	土製品	土壁	Cトレンチ	黒褐色粘土層の 上下一括中位層	(2.7)	(2.0)	(1.9)	8	
	68RY29	土製品	土壁	Aトレンチ	5～7層	(4.3)	(3.3)	(2.7)	28	
	68RY30	土製品	土壁	Aトレンチ	5～7層	(3.8)	(3.1)	(2.1)	19	
	68RY31	土製品	土壁	T10	I層(表土)中	(3.2)	(2.6)	(2.0)	10	
	68RY32	土製品	土壁	T10	I層(表土)中	(2.4)	(2.6)	(2.5)	10	
	68RY33	土製品	土壁	T10	I層(表土)中	(2.9)	(2.1)	(1.6)	7	
	68RY34	土製品	土壁	T18	II層	(3.9)	(3.3)	(1.9)	16	
	68RY35	土製品	土壁	90-70	5層	(3.8)	(2.8)	(1.8)	34	
	68RY36	土製品	土壁	90-70	5層	(3.6)	(3.9)	(1.6)	18	
	68RY37	土製品	土壁	92-71	2層	(3.8)	(1.9)	(1.7)	9	

第22表 瓦観察表

掲載番号	登録番号	種別	器種名	出土遺構	層位	部位	残存率 (%)	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
183	68RT3	瓦	平瓦	90-70	灰褐色層 (暗褐色層直上層)		10	(7.7)	(91.5)	(2.3)	178	
184	68RT9	瓦	平瓦	Cトレンチ	II~2層 (整地層の上位層)		10	(6.4)	(84.9)	(2.0)	145	
185	68RT11	瓦	平瓦	Eトレンチ内一括	チョコレート層中		5	(5.0)	(52.9)	(1.8)	55	
186	68RT4	瓦	平瓦	90-72	2層		3	(5.5)	(32.6)	1.2	23	
187	68RT8	瓦	平瓦	91-71~92-71 (Cトレ東)	II層		5	(6.9)	(53.8)	1.8	92	
188	68RT14	瓦	平瓦	92-72	II層		5	(5.7)	(55.9)	(1.5)	43	
189	68RT15	瓦	平瓦	92-72	II層 (炭化物層の上)		5	(6.1)	(33.6)	(1.8)	39	
190	68RT7	瓦	平瓦	91-73 暗青灰色粘土中	II層		2	(3.8)	(50.3)	(1.1)	22	
191	68RT10	瓦	平瓦	Dトレンチ南斜面	地山直上層 青灰色 砂礫層		5	(4.1)	(78.8)	1.8	80	
192	68RT6	瓦	平瓦	91-72	5層		15	(9.5)	(76.2)	2.2	184	
193	68RT12	瓦	平瓦	89-70	砂礫内 (1層?)		10	(5.5)	(90.7)	(2.5)	139	
194	68RT1	瓦	平瓦	89-70	砂礫内 (1層?)		20	(13.5)	(106.1)	2.0	317	
195	68RT13	瓦	丸瓦	92-72	II層		5	(6.7)	(55.7)	(2.5)	79	
	68RT2	瓦	平瓦	SD3検出面 (90-69)	暗褐色土上層		2	(2.7)	(38.5)	(1.0)	8	

第23表 木製品観察表

掲載番号	登録番号	種別	器種名	出土遺構	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	備考
202	68RW187	木製品	下駄	取り上げNo.109 92-72	6~7層	(22.4)	(13.4)	(3.4)	
203	68RW186	木製品	下駄	取り上げNo.10 90-70	6~7層	(23.1)	(12.1)	(2.1)	
204	68RW47	木製品	下駄	91-72	6層	(14.8)	(4.5)	(2.3)	
205	68RW146	木製品	漆器椀	90-70 中央ベルト	不明		(8.6)		高台部のみ残
206	68RW135	木製品	角材	取り上げNo.85	6~7層	(38.2)	(5.4)	(3.4)	
207	68RW 4	木製品	部材	92-72	6~7層	(19.0)	(2.3)	(1.7)	仕口あり
208	68RW39	木製品	角材	91-72	6~7層	(15.8)	(2.0)	(1.3)	
209	68RW17	木製品	角材	90-70~91-70 90-71~91-71	6~7層	(9.8)	(1.7)	(1.1)	
210	68RW15	木製品	角材	90-70~91-70 90-71~91-71	6~7層	(10.1)	(1.8)	(9.5)	
211	68RW23	木製品	板材	SK35		(7.5)	(4.4)	(1.0)	
212	68RW28	木製品	板材	91-72~92-72	6~7層	(13.4)	(2.9)	(0.4)	
213	68RW154	木製品	曲げ物	取り上げNo.9	6~7層	(13.2)	(5.7)	(0.5)	

第24表 金属製品観察表

掲載番号	登録番号	種別	器種名	出土遺構	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
	68RM1	金属製品	鉄滓	90-68		(7.5)	(4.9)	(4.5)	193.1	
	68RM2	金属製品	鉄滓	90-69	2層	(4.9)	(3.1)	(1.2)	27.0	
	68RM3	金属製品	鉄滓	90-70	2~5層	(5.9)	(3.9)	(3.3)	106.5	
	68RM4	金属製品	鉄滓	SK35		(4.2)	(2.9)	(1.9)	20.6	
	68RM5	金属製品	鉄滓	SK35	3.4.6層	(4.3)	(2.5)	(1.9)	26.8	
	68RM6	金属製品	鉄滓	SK35	8.9.10層	(5.6)	(4.1)	(2.4)	41.7	

第25表 石製品観察表

掲載番号	登録番号	種別	器種名	出土遺構	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
199	68RQ12	石器・石製品	碁石か	Bトレンチ	6b層	2.1	1.7	0.9		黒石
200	68RQ14	石器・石製品	碁石か	Bトレンチ	6b層	1.7	1.2	0.8		白石
201	68RQ1	石器・石製品	砥石	90-73	II層 暗青灰色粘土中	(14.0)	(5.4)	(1.6)		RQ2と接合
	68RQ3	石器・石製品	焼石カ	SK35 取り上げNo.46		27.8	16.7	9.7	2840	
	68RQ4	石器・石製品	焼石	90-72	2～5層 (暗褐色)	(10.5)	(6.2)	(3.0)	270	
	68RQ5	石器・石製品	焼石	SD3 (91-70)	埋土一括	(11.6)	(8.9)	(2.3)	308	
	68RQ6	石器・石製品	剥片	92-70 (地山検出時)	II～2層	(2.7)	(2.4)	(0.9)	8	
	68RQ7	石器・石製品	剥片	SK35		(3.3)	(3.0)	(0.5)	7	
	68RQ8	石器・石製品	剥片	T8 北拡張区	II層	(4.4)	(3.9)	(1.1)	24	
	68RQ9	石器・石製品	剥片	SK35	下々層 3.4.6層	(4.3)	(1.7)	(0.6)	5	
	68RQ10	石器・石製品	剥片	91-68	検出?	(6.0)	(3.1)	(0.9)	19	
	68RQ11	石器・石製品	珪化木	SD2		(3.3)	(1.6)	(0.8)	5	
	68RQ13	石器・石製品	碁石か	Bトレンチ	6b層	2.2	1.8	0.6		黒石
	68RQ15	石器・石製品	折斧	取り上げNo.117	6～7層	(11.4)	(5.7)	(2.8)	225	
	68RO t 105	石器・石製品	砥石	91-70		(6.0)	(5.9)	(1.3)		
	68RO t 110	石器・石製品	砥石	SD4 (91-71)	-12mの4層	(4.3)	(3.6)	(1.1)		

第26表 柱穴一覧表

柱穴名	旧番号	グリッド	規模(長径×短径) (cm)	深さ (cm)	底面標高 (m)	調査	柱	その他
1		91-69	46×30	32	24.326			
2		91-69	19	33.8	24.238			
3		91-69	35×25	17.1	24.327			
4		91-69	20×15	31	24.147			
5		89-69	22×20					
6		89-68	34×32					
7		89-68	52					50PP509
8		89-68	34×28					
9		89-68	20×12					
10		89-68	25					50PP508
11		90-67	30×26					
12		90-67	30×27					
13		90-68	26					50PP523
14		90-68	15					
15		90-68	25					
16		90-68	37×30					
17		90-68	48×45	23.4	24.73	半裁		
18		90-68	20					
19		90-68	32×30				○	50PP525
20		90-68	40×36				○	
21		90-68	25×24					50PP522
22		90-68	35					
23		90-68	40×35					
24		90-68	24×20					
25		90-69	35					
26		89-69	37×30					
27		89-69	63×42					
28		89-69	32×28					
29		89-69	35×19					
30		89-69	34×28					
31		90-69	25					
32		91-68	33					
33		91-68	34×30				○	
34		91-68	25					
35		91-68	30×25				○	
36		91-68	32×30					
37		90-68	26					
38		90-69	30×28				○	
39		92-67	37×34					
40		92-68	56×54					
41		92-68	24×22					P42に切られる
42		92-68	32×28					50PP561
43		92-68	22×20					50PP562
44		92-68	38×30				○	
45		92-68	56×49					
46		92-68	24×20					
47		92-68	40×38				○	
48		92-68	20					50PP573
49		92-68	40×35					50PP574
50		92-68	83×55					
51		92-68	73×60					
52		92-68	66×56					
53		92-68	37×32					50PP569
54		92-68	42×27					

柱穴名	旧番号	グリッド	規模(長径×短径) (cm)	深さ (cm)	底面標高 (m)	調査	柱	その他
55		92-68	50×45					50PP567
56		92-68	76×50					
57		92-68	22×20					50PP565
58		93-68	70×49					
59		92-67	34×27					
60		92-68	27×26					
61		92-67	36×34				○	
62		92-69	28×25					50PP592
63		92-67	(52)×37					P64に切られる
64		92-67	36×32					
65		92-69	30×27				○	
66		92-69	43×40					
67		92-69	33					50PP578
68		92-69	24×22					50PP580
69		92-69	23×(20)					攪乱に切られる
70		92-69	29×(18)					攪乱に切られる
71		92-69	22×20					
72		92-69	17					
73		92-69	40×30					50PP582 P74・75に切られる
74		92-69	20×(14)					P75に切られる
75		92-69	26×22					50PP581
76		92-69	30×28					50PP584
77		92-69	25×22					
78		92-69	17×15					
79		92-69	28×27					50PP591
80		92-69	18×16					
81		92-69	45×(27)					50PP575 攪乱に切られる
82		92-69	25×(20)					攪乱に切られる
83		92-69	40				○	50PP585
84		92-69	20×18					
85		92-69	38×32					50PP583
86		92-69	32×30					50PP586
87		92-69	30×28					50PP587
88		92-69	80×58					
89		93-69	36×34					50PP610
90		92-69	64×50					50PP588・590 P91に切られる
91		93-69	30×27					50PP589
92		93-69	42×34				○	50PP614
93		93-69	55×50					50PP609 P94に切られる
94		93-69	15×14					50PP608
95		93-69	60					
96		93-67	24×(18)					50PP593 P97に切られる
97		93-67	(82)×75					区域外に広がる
98		93-68	44×35				○	50PP818
99		93-68	36×(19)					50PP818 P101に切られている
100		93-67	35×30					
101		93-67	(94)×67					P100に切られる 区域外に広がる
102		93-68	35×30				○	50PP594
103		93-68	142×80					
104		93-68	29×(24)					50PP595
105		93-67	42×28					50PP647
106		93-67	24×(18)					50PP648 P105に切られる

柱穴名	旧番号	グリッド	規模(長径×短径) (cm)	深さ (cm)	底面標高 (m)	調査	柱	その他
107		93-67	52×44					
108		93-67	32×26					50PP597
109		93-67	23×20					50PP600
110		92-68	30×28					50PP566
111		92-68	38×30					
112		92-68	20					50PP563
113		92-68	40×(20)					
114		92-69	14					
115		92-69	30					
116		94-68	30×26					
117		94-68	28×22					
118		91-69	18×17					
119		91-69	24×17					
120		91-69	15					
121		93-72	35					
122		93-72	85×53					
123		93-75	47×45	13	24.295	50次		
124		91-67	94×(40)					区域外に広がる
125		94-70	54×27	20	24.655	50次		
126	471	90-75	65×(60)					P470(48SB1)に切られる
127	472	90-75	20×19					
128	473	90-75	26×23					
129	474	90-75	43×37					
130	475	90-75	24×16					P129に切られる
131	476	90-75	35×30					
132	477	90-75	42×35					P131に切られる
133	478	90-75	20					
134	479	90-75	15×11					
135	480	90-75	22×20					
136	481	90-75	26×25					
137	482	90-75	58×48					48SB1
138	483	90-75	42					
139	484	90-75	27×24					
140	485	90-75	21×16					
141	486	90-75	22					
142	487	90-75	23×20					
143	488	90-75	38×35			48次		48SB1(旧 P 18)
144	489	90-75	47×45			48次		48SB1(旧 P 20)
145	490	89-75	25×20					
146	491	90-74	20×18					
147	492	93-74	33×34					
148	493	90-74	65×62	32.9	24.833	半裁		48SB1(旧 P 10)
149	494	90-74	31×27					
150	495	90-74	25×20					
151	496	90-74	76×72	57.2	24.683	半裁		48SB1(旧 P 12)
152	497	90-74	24×22					
153	498	90-74	83×73	42.2	24.888	半裁		48SB1(旧 P 14)
154	499	89-74	16×17					
155	500	89-74	27×24				○	
156	501	90-74	12×(11)					SK28に切られる
157	502	90-74	25×21					
158	503	89-74	20×18					
159	504	89-74	61×35					48SB 1 (旧 P 13) SK28に切られる
160	505	90-74	20×18					

柱穴名	旧番号	グリッド	規模(長径×短径) (cm)	深さ (cm)	底面標高 (m)	調査	柱	その他
161	506	90-74	19×17					
162	507	90-74	15×14					
163	508	90-74	62×(53)					48 S B 1 (IHP13)
164	509	90-74	20×19				○	
165	510	90-74	25				○	
166	511	91-74	25					
167	512	91-74	28×25					
168	513	91-74	29×25					
169	514	91-74	20×18					
170	515	91-74	20					
171	516	91-74	18×14					
172	517	91-74	18×17					
173	518	91-74	20					
174	519	91-74	26×25					
175	520	91-74	30×26					
176	521	90-73	18×15					
177	522	90-73	20×18					
178	523	90-73	37×33					
179	524	90-73	58×42				○	
180	525	90-73	33					
181	526	90-73	28×27					
182	527	90-73	45×34					
183	528	90-73	33					
184	529	90-73	35×30					
185	530	90-73	18					
186	531	89-73	32×10					
187	532	89-73	20×18					
188	533	89-73	22×20					
189	534	89-73	60×57					
190	535	89-73	37×34					
191	536	90-73	43×32					
192	538	90-72	62×42					
193	542	92-71	40					
194	543	92-71	20×18					
195	544	91-69	47×35					
196	545	91-68	33×25				○	
197	546	90-68	58×50					
198	547	93-69	24					
199	548	94-72	25					
200		93-68	144×64			50次		
201		93-68	24×22				○	50PP599
202		93-68	35×33					50PP598
203		93-68	26×23					50PP816
204		93-68	45×30					50PP603
205		93-68	40×34					
206		93-68	25×20				○	
207		93-68	30×27					
208		93-68	28×24					50PP604
209		93-68	27×25					50PP604
210		93-69	28×24					
211		93-69	24					50PP606
212		93-69	30×28				○	
213		93-69	65					
214		93-69	66×52					
215		93-69	25×(24)					P 214に切られる

柱穴名	旧番号	グリッド	規模(長径×短径) (cm)	深さ (cm)	底面標高 (m)	調査	柱	その他
216		93-69	42×32				○	50PP611
217		93-69	33×30					
218		93-69	96×27					
219		93-69	90×60					
220		93-69	28×25					
221		93-69	25×18					P222に切られる
222		93-69	28×25					
223		93-69	36×35				○	50PP616
224		93-69	(48)×(34)					
225		93-69	28×(26)					攪乱に切られる
226		93-69	32×(18)					50PP615
227		94-68	62×53			半裁		50PP815
228		94-68	24×18					
229		94-68	24×23					
230		94-68	70×(60)					攪乱に切られる
231		94-68	50×45					
232		94-68	76×65					
233		94-68	20×15					
234		94-68	20×18					
235		94-68	102×55					
236		94-68	116×56					
237		94-68	20					
238		94-68	42×30					
239		94-68	30×24					50PP735
240		94-68	36×30					
241		94-68	26×25					50PP734
242		94-68	55×48	36	24.9	半裁	○	50PP732
243		94-68	38×37					
244		94-67	42×38					
245		94-67	77×64					
246		94-67	30					
247		93-67	40×(25)					区域外に広がる
248		94-68	(24)×18					50PP733 P249に切られる
249		94-68	47×46				○	
250		94-68	72×54					
251		94-68	102×84					
252		94-69	45					
253		94-69	35×32					
254		94-69	28×24					
255		94-69	60×57					
256		94-69	90×57					
257		94-69	52×47				○	
258		94-69	17×15					
259		94-69	18×17					
260		94-69						
261		94-70	52×30				○	
262		94-70	69×65					
263		94-70	36×22					
264		94-70	32					
265		94-70	14×12					
266		94-70	53×34					P269に切られる
267		94-70	42×35					
268		95-68	21					
269		95-68	57×52					

柱穴名	旧番号	グリッド	規模(長径×短径) (cm)	深さ (cm)	底面標高 (m)	調査	柱	その他
270		95-68	52×44					
271	270	95-68	59×52					
272		95-68	88×86					
273		95-68	27					P274に切られる
274		95-68	27×25					
275		95-68	45×44					
276		95-68	80×64					P 277に切られる
277		95-68	40×38					
278		95-68	38×32					
279		95-69	42×(34)					P280に切られる
280		95-69	70×65					
281		95-68	24					
282		95-68	32×27					
283		96-68	22					
284		96-68	90×85					P285に切られる
285		96-68	57×50					
286		96-68	32×(22)					区域外に広がる
287		96-68	18×15					
288		95-68	72×45					
289		95-68	65×40					
290		95-69	65×64					P280に切られる
291		94-69	35×17					P292に切られる 調査区外に広がる
292		94-69	17×15					
293		95-69	38×28					
294		95-69	20×18					
295		95-69	37×34					
296		96-69	35×34					
297		96-69	90×70					P296に切られる
298		96-69	20					
299		96-69	22×20					
300		95-69	20×15					
301		95-69	55×45					
302		95-69	18×17					
303		95-69	78×66					
304		95-69	18×15					
305		95-69	(32)×30					攪乱に一部壊される
306		95-69	69×50					
307		95-69	30×(25)				○	
308		95-69	20×15					
309		95-69	78×74					
310		95-69	67×48					
311		95-69	18×15					
312		95-69	66×62					
313		95-69	22					
314		95-69	35×26					
315		95-69	35×32					
316		95-69	36×22					
317		95-69	45×35					
318		95-69	(89)×76					
319		95-70	40×33					
320		95-70	30					
321		95-70	35×24					P 322に切られる
322		95-70	48×(40)					P 323に切られる
323		95-70	45×40					

柱穴名	旧番号	グリッド	規模(長径×短径) (cm)	深さ (cm)	底面標高 (m)	調査	柱	その他
324		95-70	25×24					
325		95-69	27×21					
326		96-70	22×20					
327		96-70	53×52					
328		96-70	50×44					
329		95-70	30					
330		96-70	53×47					
331		95-70	70×65					
332		95-70	40×135					P331に切られる
333		95-70	46×35					
334		95-70	60×40					P335に切られる
335		95-70	52×45					
336		95-70	(78)×48					
337		96-70	22×18					
338		96-70	26×25					
339		95-70	62×54					
340		95-70	18					
341		95-70	64×54					
342		96-71	45×(20)					区域外に切られる
343		96-71	40					
344		96-71	30×27					
345		96-71	46×45					
346		96-71	35×23					
347		96-71	37				○	
348		95-71	48×35					攪乱に一部壊される
349		95-71	38×28					
350		96-71	70×40					
351		96-71	28					
352		95-71	44×42					
353		94-71	56×50					
354		93-71	28					
355		93-71	18×17					
356		93-71	20×19					
357		93-71	33×27					
358		94-71	20					
359		94-71	34×30					
360		94-71	16×15					
361		93-70	25×24					SK15を切る
362		93-70	24×17					
363		93-70	20×18					
364		93-70	17×16					
365		93-70	17					
366		93-70	34×24					P368に切られる
367		93-70	20×(15)					P368に切られる
368		93-70	48×34					
369		93-70	18×16					
370								
371		92-70	55×44					
372		92-70	35×30					
373		92-70	25					
374		92-70	34×28					
375		92-70	30×25					
376		92-70	54×39					
377		92-70	54×36					
378		92-70	45×36					

柱穴名	旧番号	グリッド	規模(長径×短径) (cm)	深さ (cm)	底面標高 (m)	調査	柱	その他
379		92-70	25×22					
380		91-70	35×(35)					
381		91-70	20×(20)					
382		91-70	35×26					
383		91-76	78×67	40.5	24.96	半裁		48SB1 P6
384		91-76	42×37			48次		48P19
385		91-76	21×20			48次		48P98
386		91-76	43×40			48次		48P93
387		91-76	23×21			48次		48P97
388		91-76	60×58			48次		48SB1 P4
389		91-76	32×30			48次		48P1
390		91-76	33×32			48次		48P2
391		91-75	12					
392		91-75	12					
393		91-75	12×10					
394		91-75	25×20					
395		91-75	65×57	21.9	24.998	半裁		
396		91-75	60×54			48次		48SB1 P8
397		91-75	18×15					
398		91-75	62×40					
399		91-75	20×17					
400		91-75	30×25				○	
401		91-76	16×15			48次		
402		91-76	30×25			48次		48P3
403		91-76	72×62					48SB1 P3
404		91-76	17					
405		91-76	16×15					
406		91-76	59×57					
407		91-76	18					
408		91-76	24			48次		48P72
409		91-76	47×43					
410		91-75	65×56	28	24.998	48次 半裁		48P55
411		91-75	23×22			48次		48P54
412		91-75	20×16			48次		48P16
413		91-75	22			48次		48P15
414		91-75	15×12					
415		91-75	25×22			48次 半裁		48P96
416		91-75	35×25				○	
417		91-75	21×20			48次		48P94
418		91-75	17×15					
419		91-75	70×66	24	24.825	48次 半裁		48P7
420		91-75	26×(18)			48次		48P12
421		91-75	57	10.2	24.948	半裁		
422		91-75	25×20					
423		91-75	15					
424		91-75	15×10					
425		91-75	25×24			48次		48P9
426		91-75	70×65	29.7	24.705	48次 半裁		48SB1 P4
427		91-75	16×15					
428		91-75	24×22					
429		92-76	22×21					
430		92-76	14×12					
431		92-76	56×50					
432		92-76	24×(15)					区域外に広がる
433		92-76	28					

柱穴名	旧番号	グリッド	規模(長径×短径) (cm)	深さ (cm)	底面標高 (m)	調査	柱	その他
434		92-76	15					
435		91-75	15					
436		92-76	65×53				○	
437		91-75	(25)×20			48次		48P11
438		91-75	65×50			48次		48SB1P5
439		92-75	36×18					
440		92-75	60	25.4	24.616	48次 半裁		48SB1P1
441		92-75	18×12					
442		92-75	19×16					
443		92-76	25×22					
444		92-75	24×20					
445		92-75	21×20					
446		92-75	23×19					
447		92-74	18×13					
448		91-76	17×(17)					P383に切られる
449		90-76	22×(12)					
450		90-76	23×22					
451		90-76	35×25					
452		90-76	23×22					
453		90-76	20×12					
454		90-76	18					
455		90-76	57×42					
456		90-76	48×45					
457		90-76	38×36				○	
458		90-76	23×17					
459		90-76	50×43					
460		90-76	20×15					
461		90-76	20×15					
462		90-76	42				○	
463		90-76	18×17					
464		90-76	26×(14)					区域外に広がる
465		90-76	17×17					
466		90-76	24×20					
467		90-76	23×21					
468		90-76	18					
469		90-75	25×22					
470		90-75	40×38					
471	537	89-72	48×(12)					
472		92-67	78×(30)					50SD2の中 区域外に広がる
473		94-69	92×50					50SB2
474		94-63	62×58					50SB2
475		90-69	70×(30)					
476		93-68	－×－					50SB2

圖 版



1. 調査区全景（南から）



2. 調査区全景（北から）



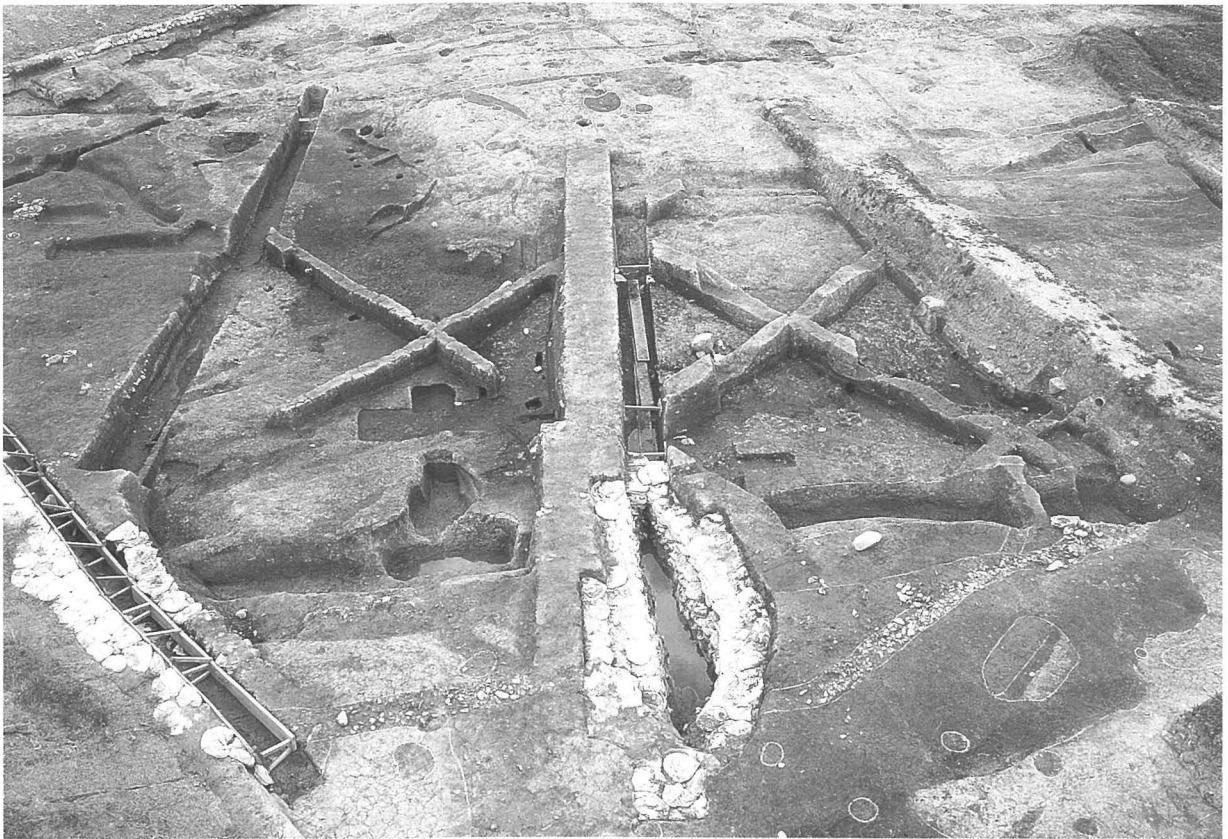
1. 調査区全景（北半部）



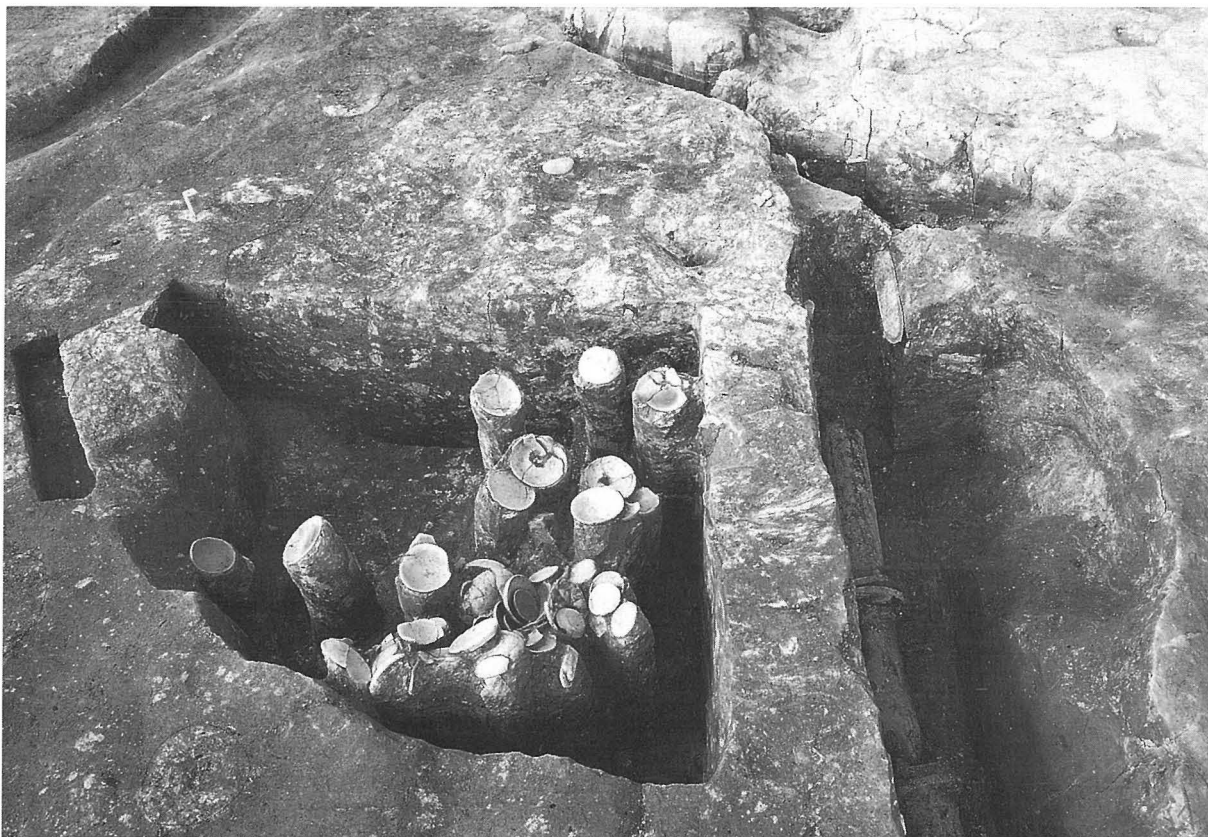
2. 調査区北半部（西から）



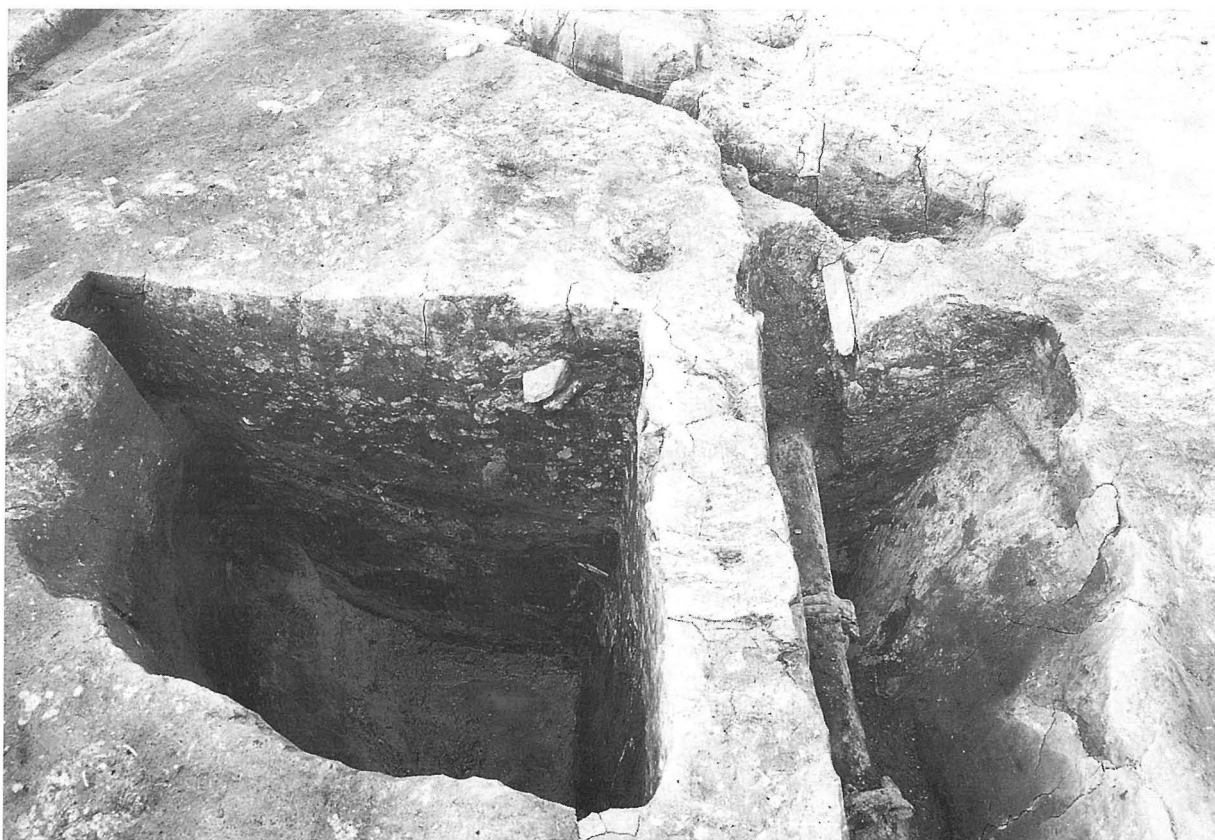
1. 低地部（沢跡）全景（南東から）



2. 低地部（沢跡）第2面検出状況（南西から）



1. SK35全体



2. SK35南北断面



1. SK35遺物出土状況



2. SK35遺物出土状況 (拡大)



1. 48SD 1 全体



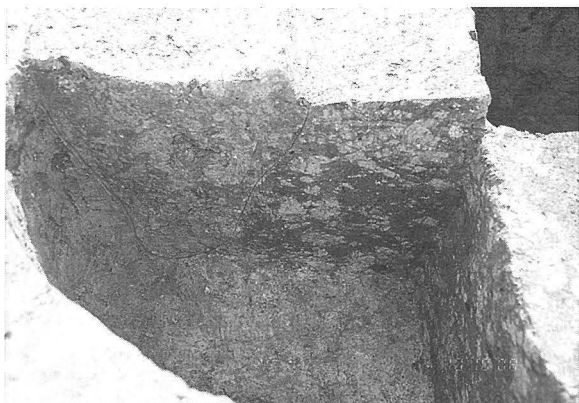
2. 48SD 1 堀断面



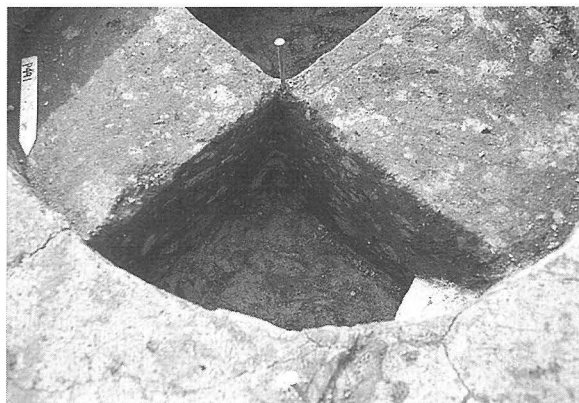
1. 48SB 1 (調査区内のみ)



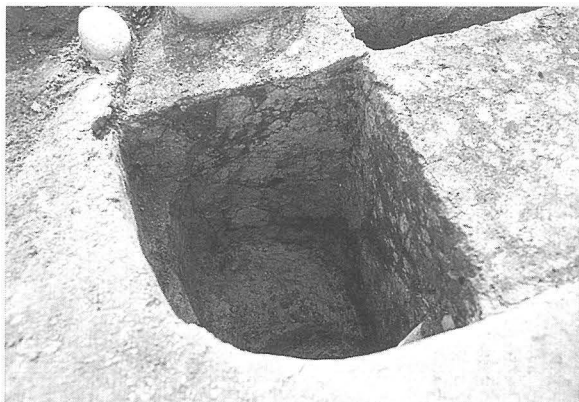
2. 48SB 1



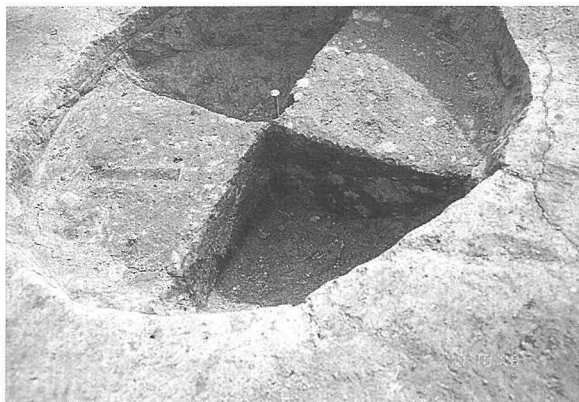
1. P497断面 1



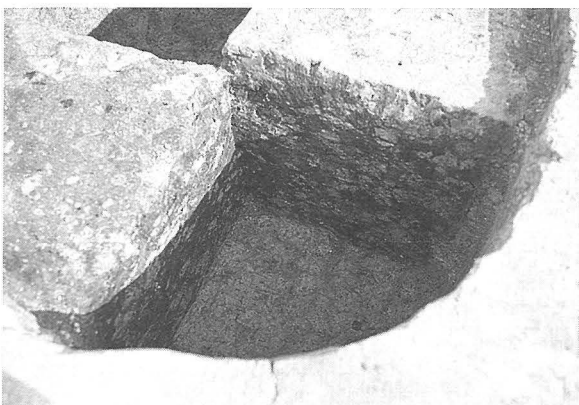
2. P497断面 2



3. P491断面 1



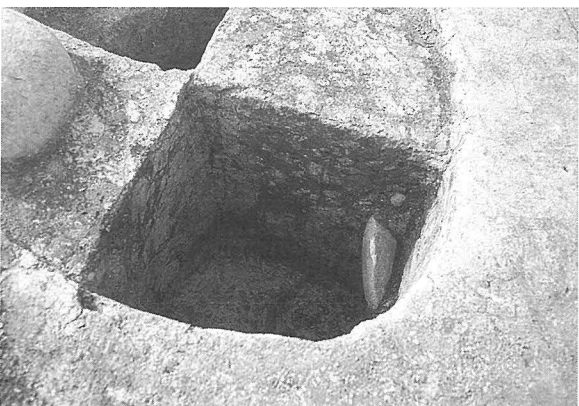
4. P491断面 2



5. P496断面 1



6. P496断面 2



7. P440断面 1



8. P440断面 2



1. 下駄出土状況



2. 木材出土状況



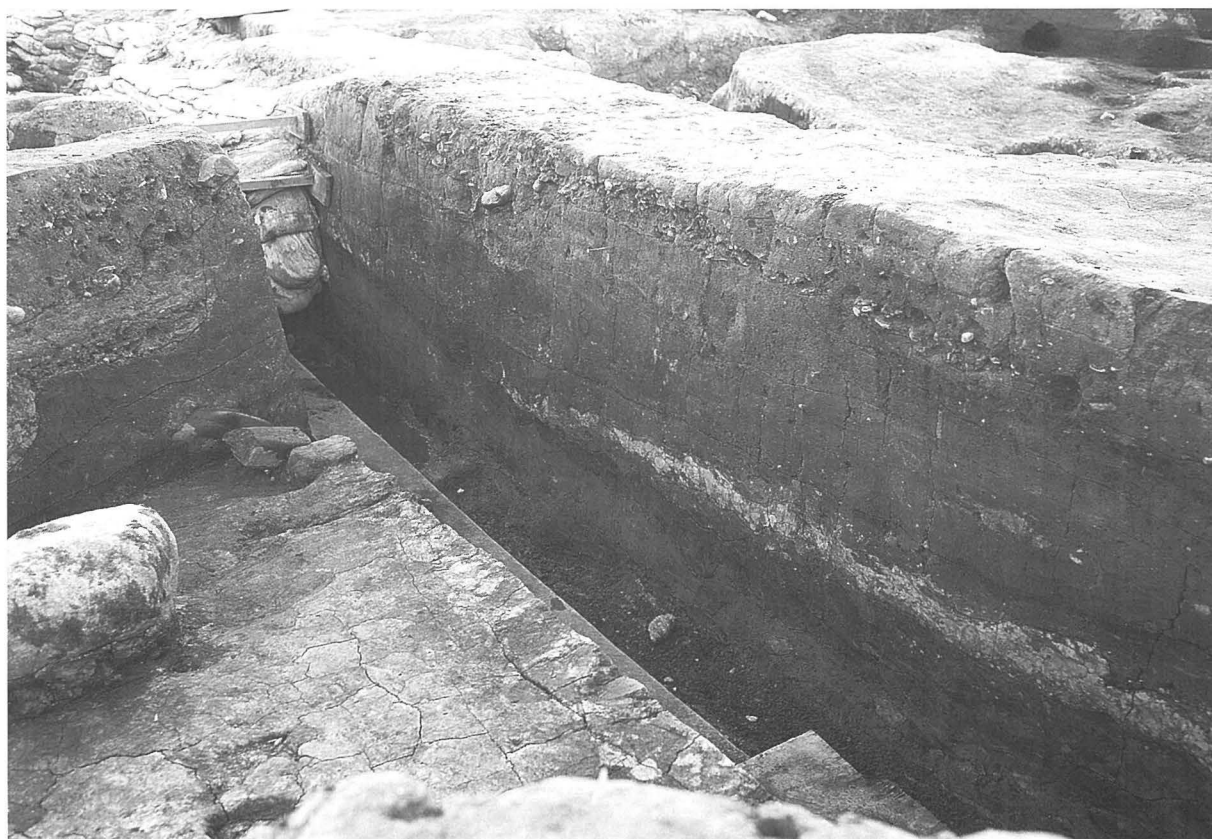
1. Bトレンチ北壁断面



2. Cトレンチ東壁断面



1. Cトレンチ西壁断面（北側）



2. Cトレンチ西壁断面（南側）



1. 第1整地層断面



2. 第2整地層上面の状況

図版13
遺物（かわらけ）



1



9



2



10



3



11



4



12



5



13



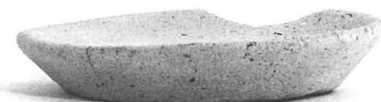
6



14



7



15



8



16

図版14
遺物(かわらけ)



17



23



18



24



19



25



20



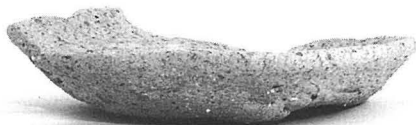
26



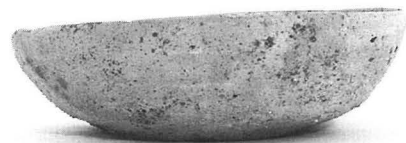
21



27



22



28



31



39



32



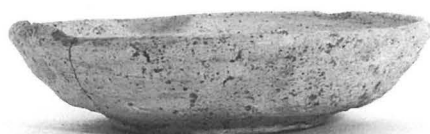
40



33



41



34



43



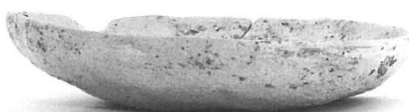
35



44



36



45



46



51



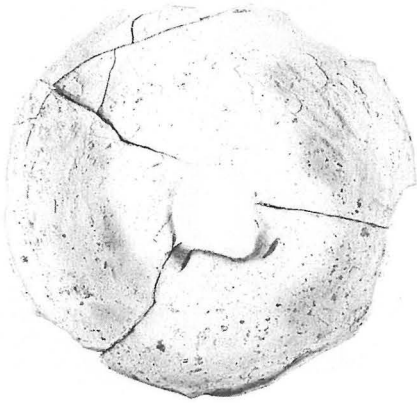
53



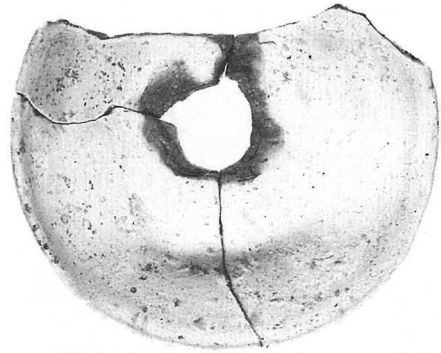
52



54



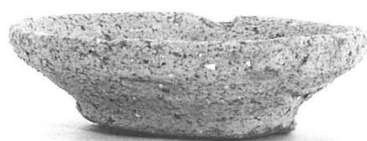
55



56



57



65



58



66



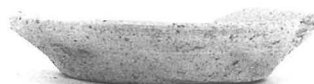
59



67



60



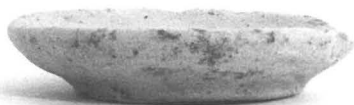
68



62



70



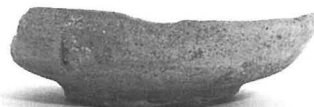
63



71



64



72

図版 18
遺物 (かわらけ・土師器・須恵器)



73



82



74



85



77



86



78



87



79



88



80



84



90



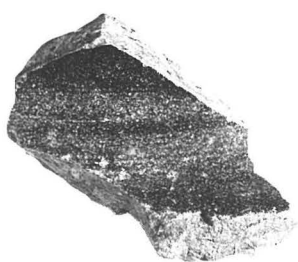
81



91



92



93



163



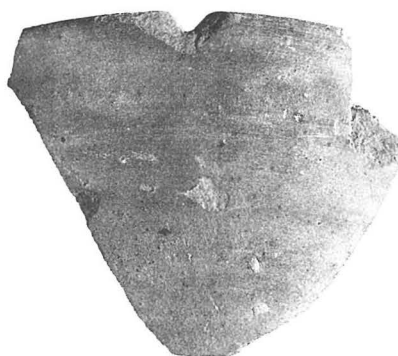
94



95



97



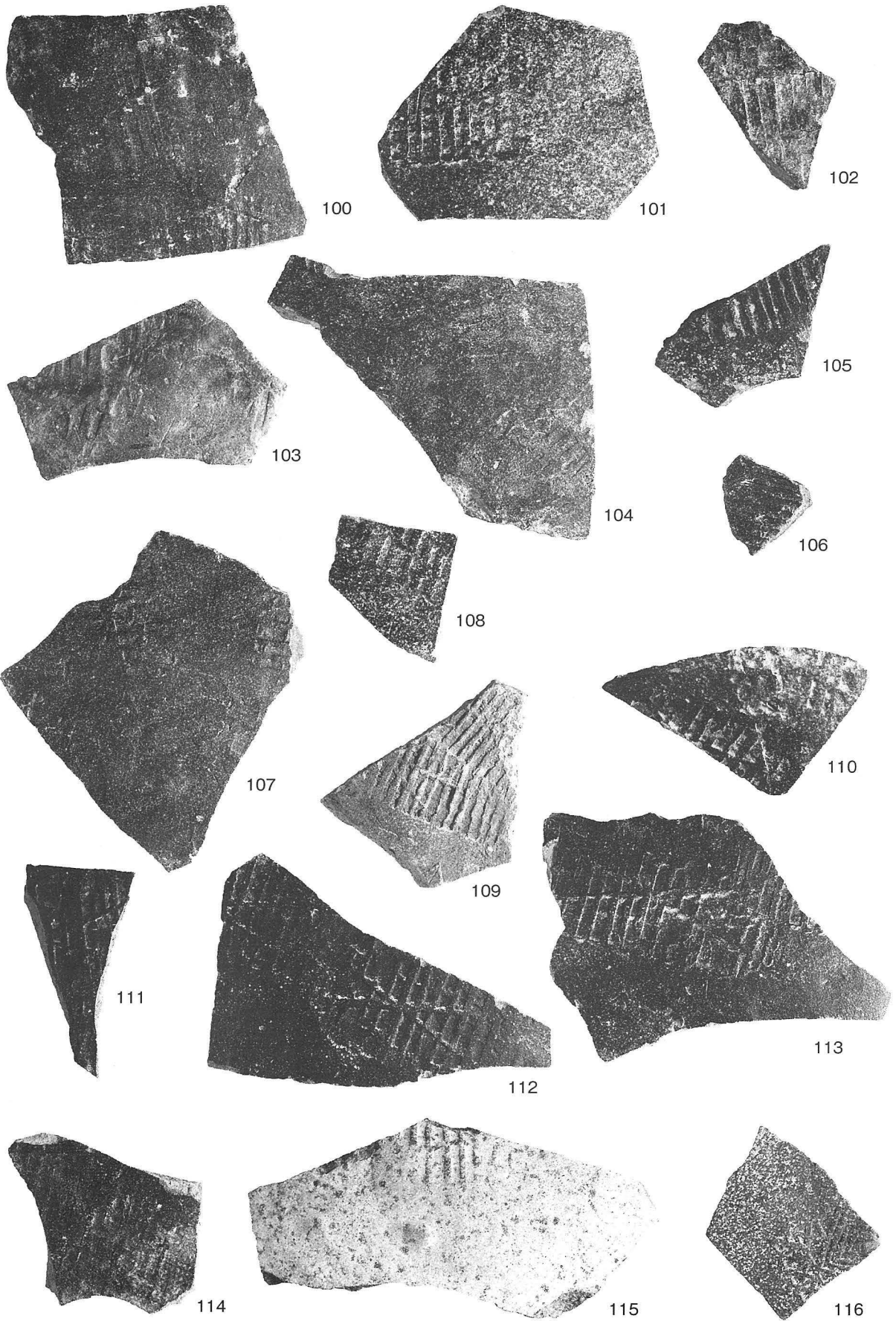
96

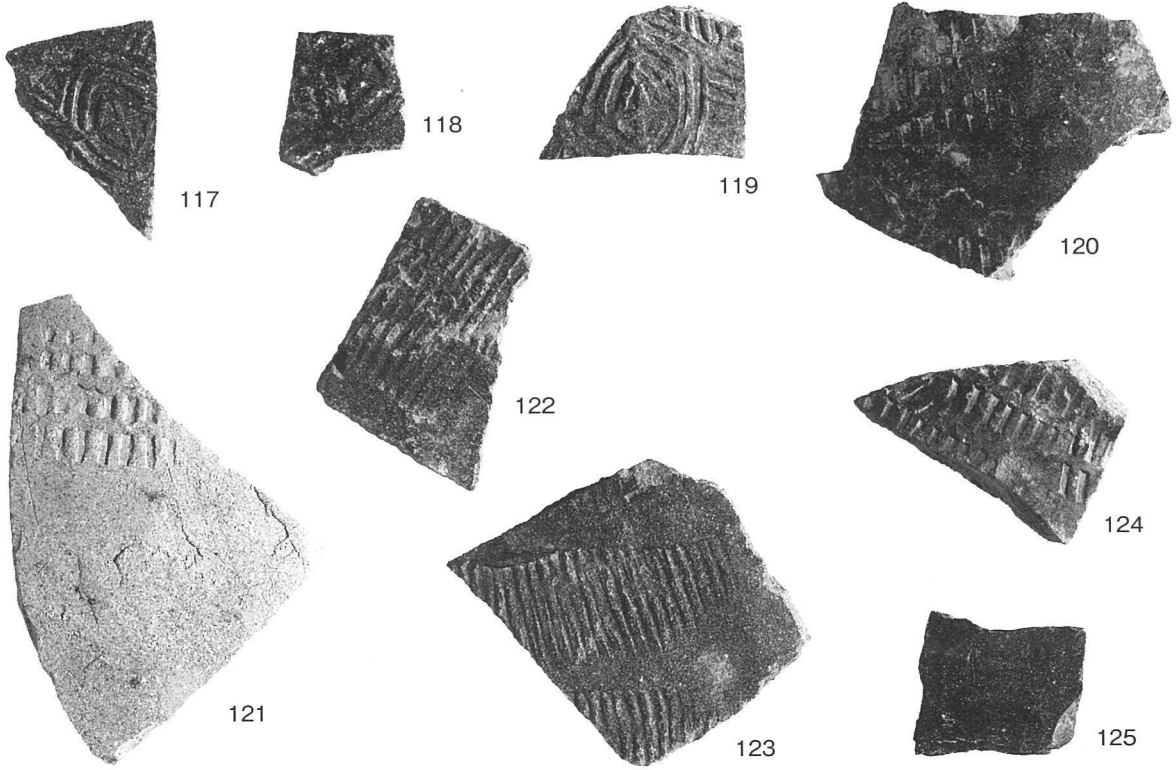


98

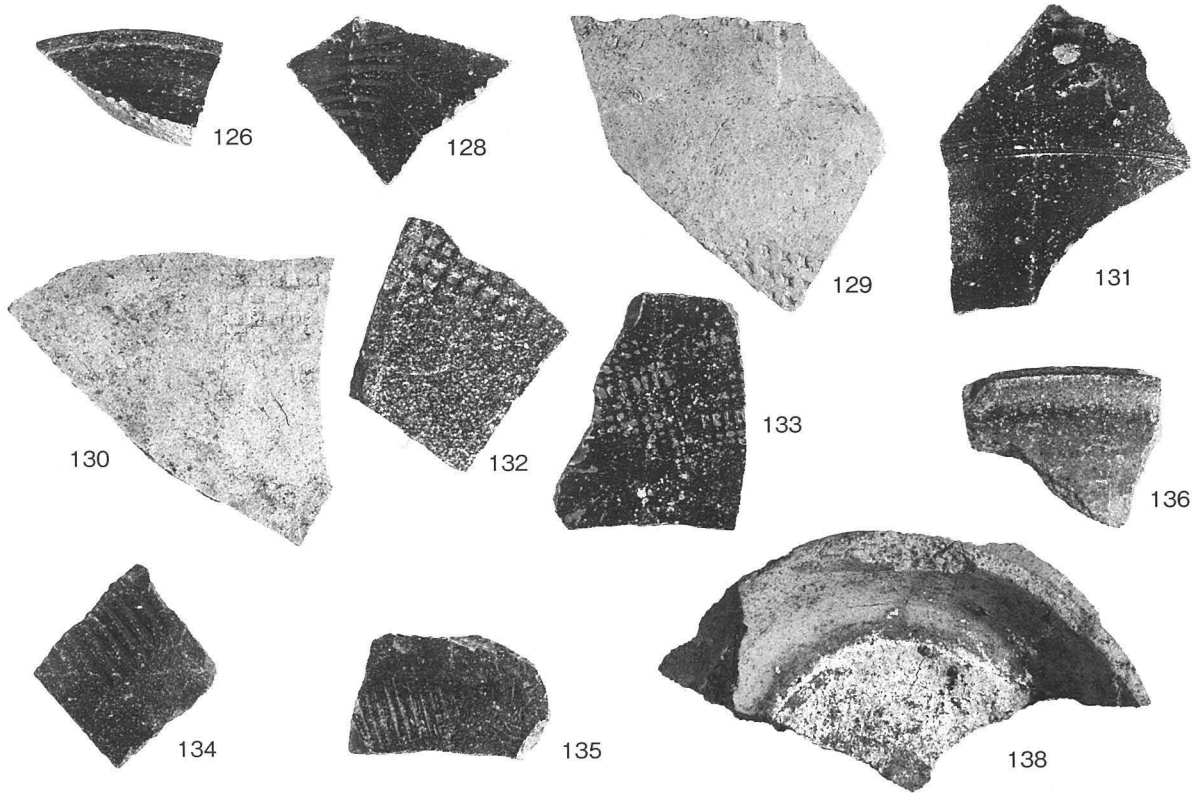


99

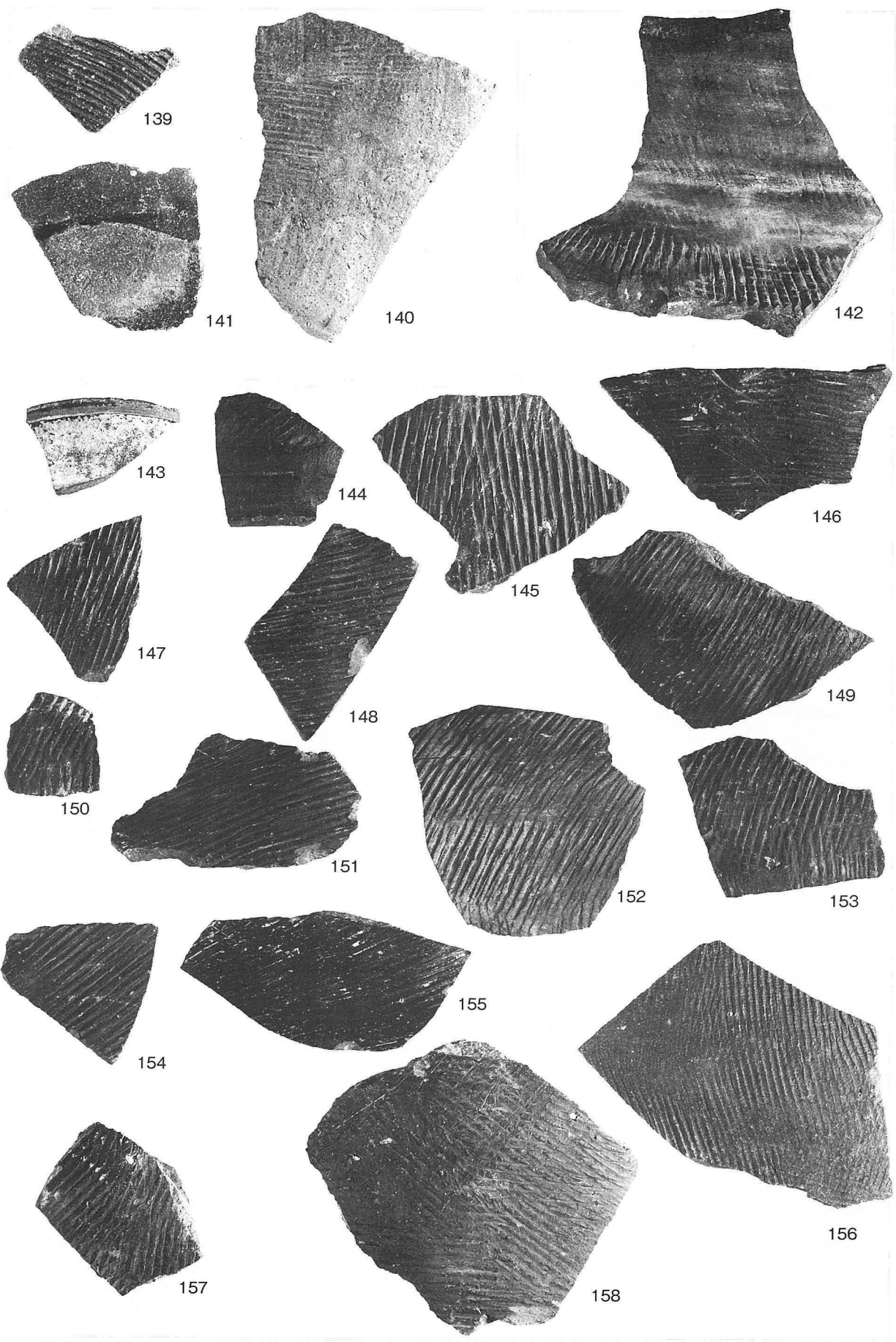




渥美3

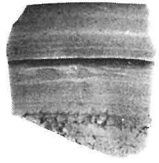


常滑





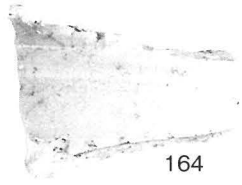
160



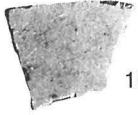
161



162



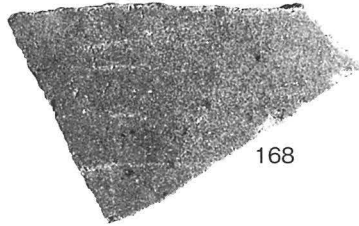
164



166



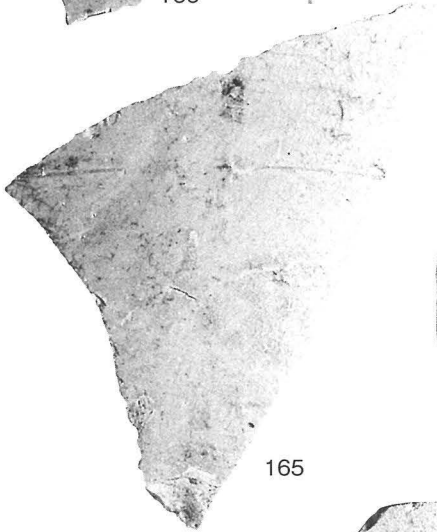
167



168



169



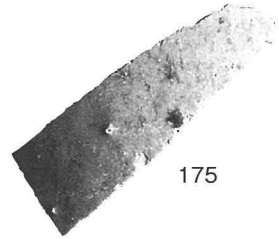
165



171



172



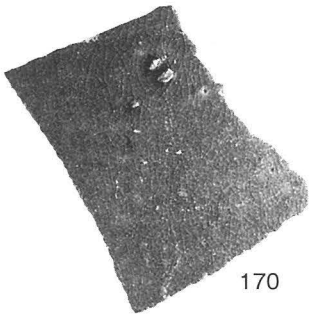
175



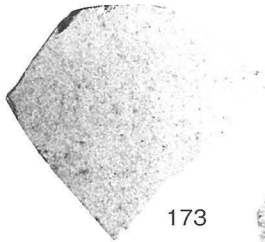
174



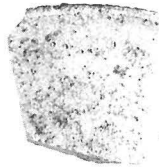
176



170



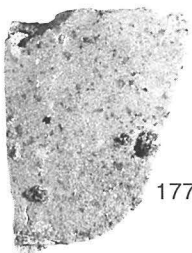
173



159



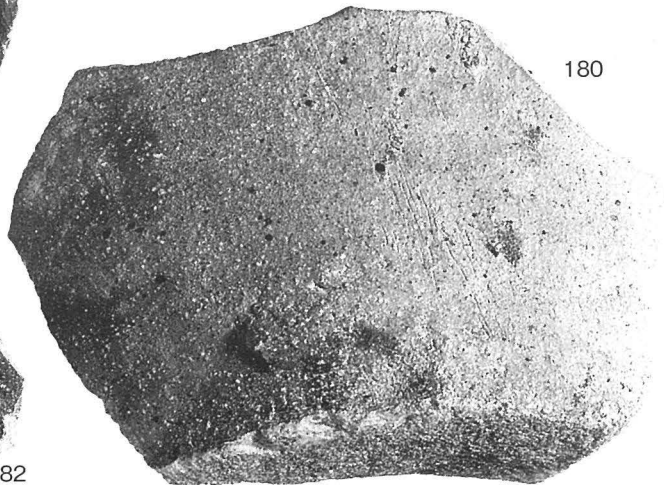
178



177



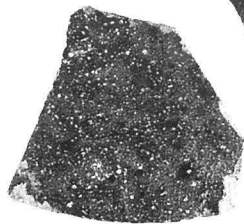
179



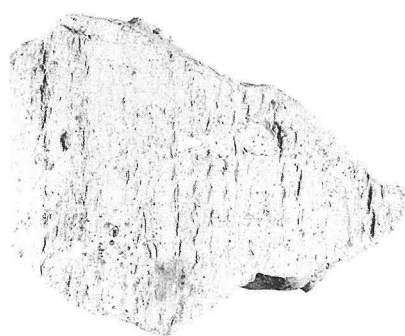
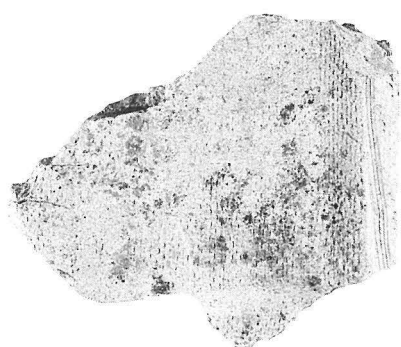
180



181



182



183



184



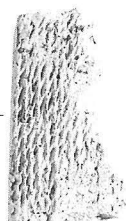
185



186



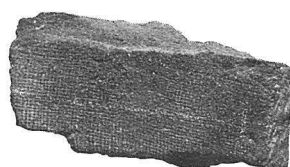
188



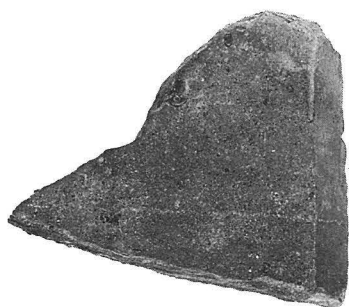
189



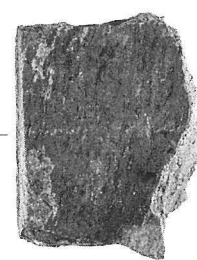
190



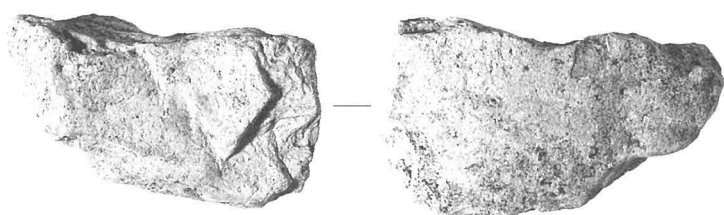
191



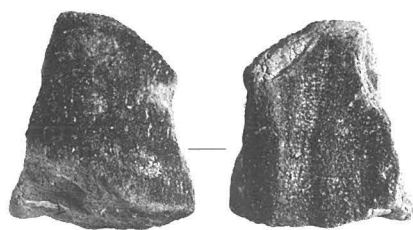
192



187



193



195



194



196



197

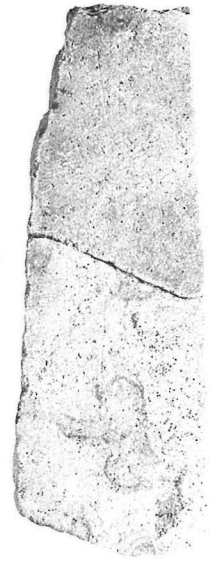
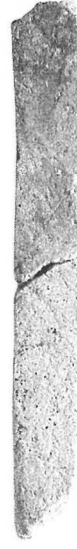
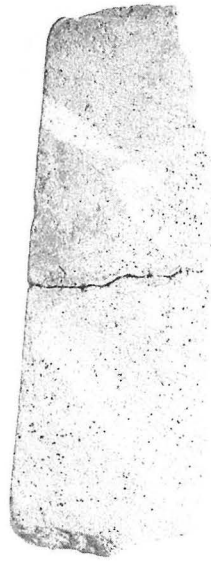
198



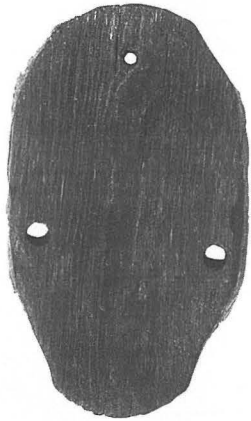
199



200



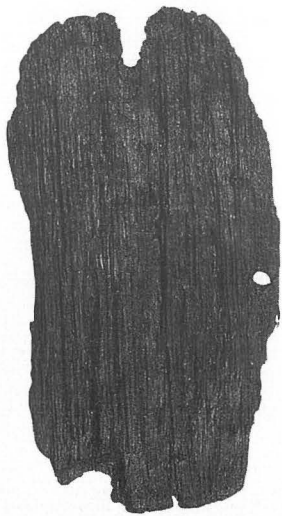
201



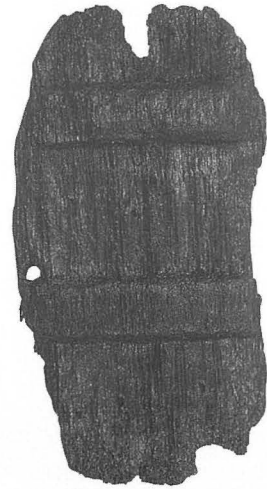
202



202 裏



203



203 裏



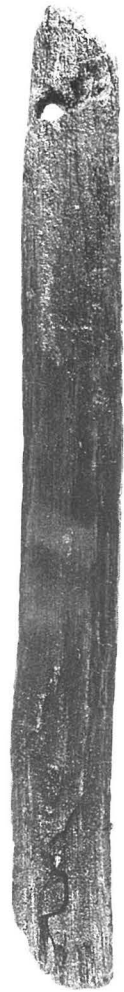
204



205



211



206



207



208



209



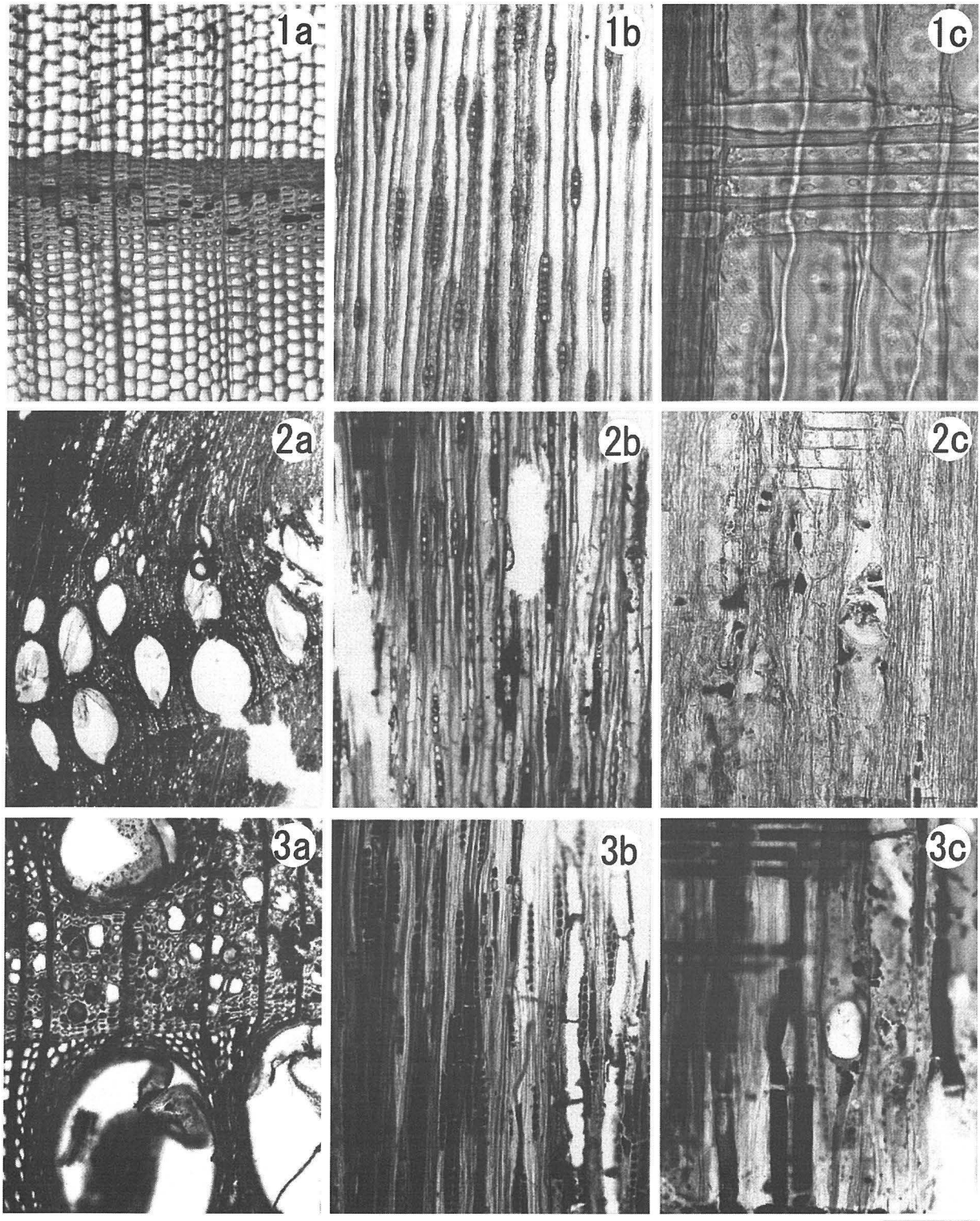
210



212



213

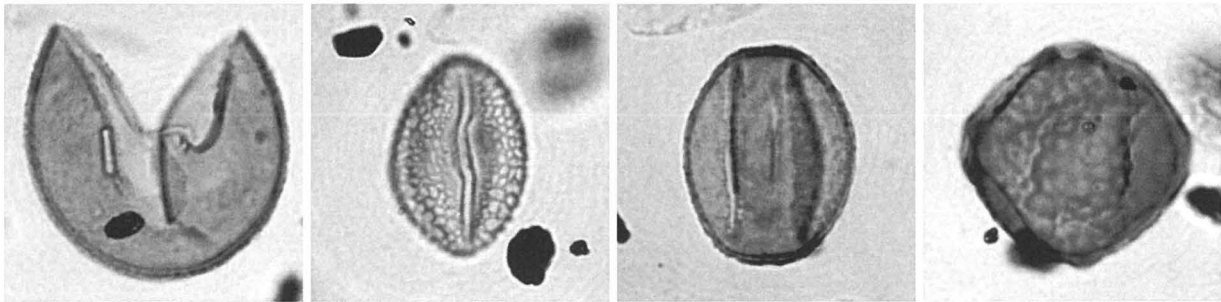


図版 1 出土木材の木材組織の光学顕微鏡写真 (a: 横断面, b: 接線断面, c: 放射断面)

1a-1c. スギ (No.1, a: 200 μ m, b: 200 μ m, c: 50 μ m)

2a-2c. クリ (No.2, a: 500 μ m, b: 200 μ m, c: 100 μ m)

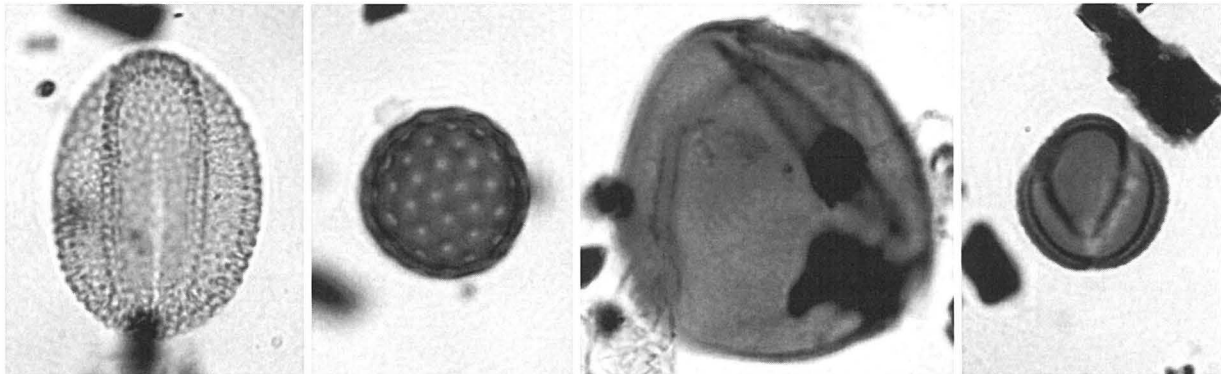
3a-3c. クリ (No.3, a: 200 μ m, b: 200 μ m, c: 50 μ m)



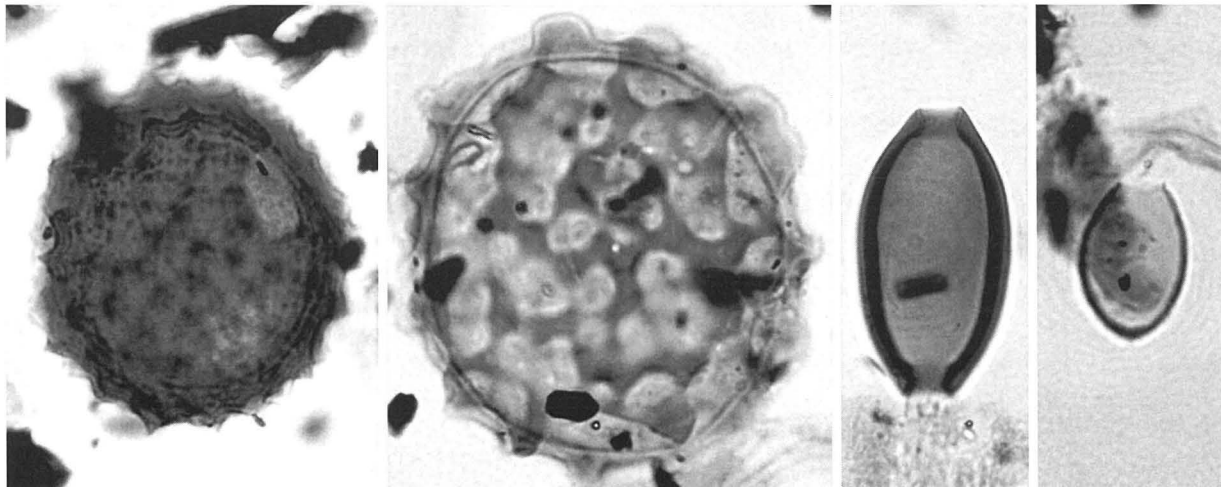
1 スギ 2 ヤナギ属 3 コナラ属コナラ亜属 4 ニレ属ケヤキ



5 カエデ属 6 クワ科-イラクサ科 7 バラ科 8 イネ科 9 カヤツリグサ科



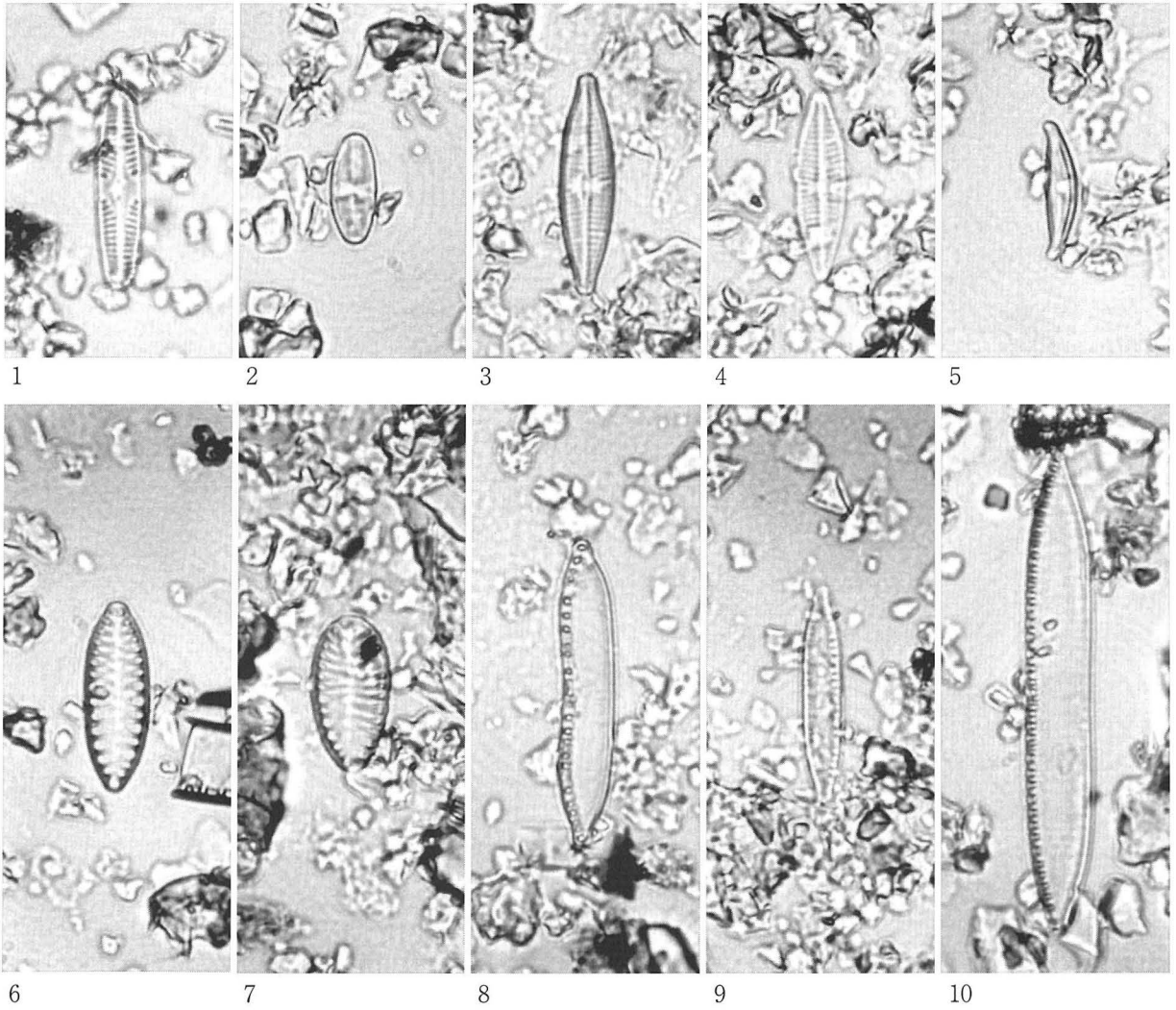
10 ソバ属 11 アカザ科-ヒユ科 12 キュウリ属 13 ヨモギ属



14 ベニバナ 15 回虫卵 16 鞭虫卵 16 肝吸虫卵

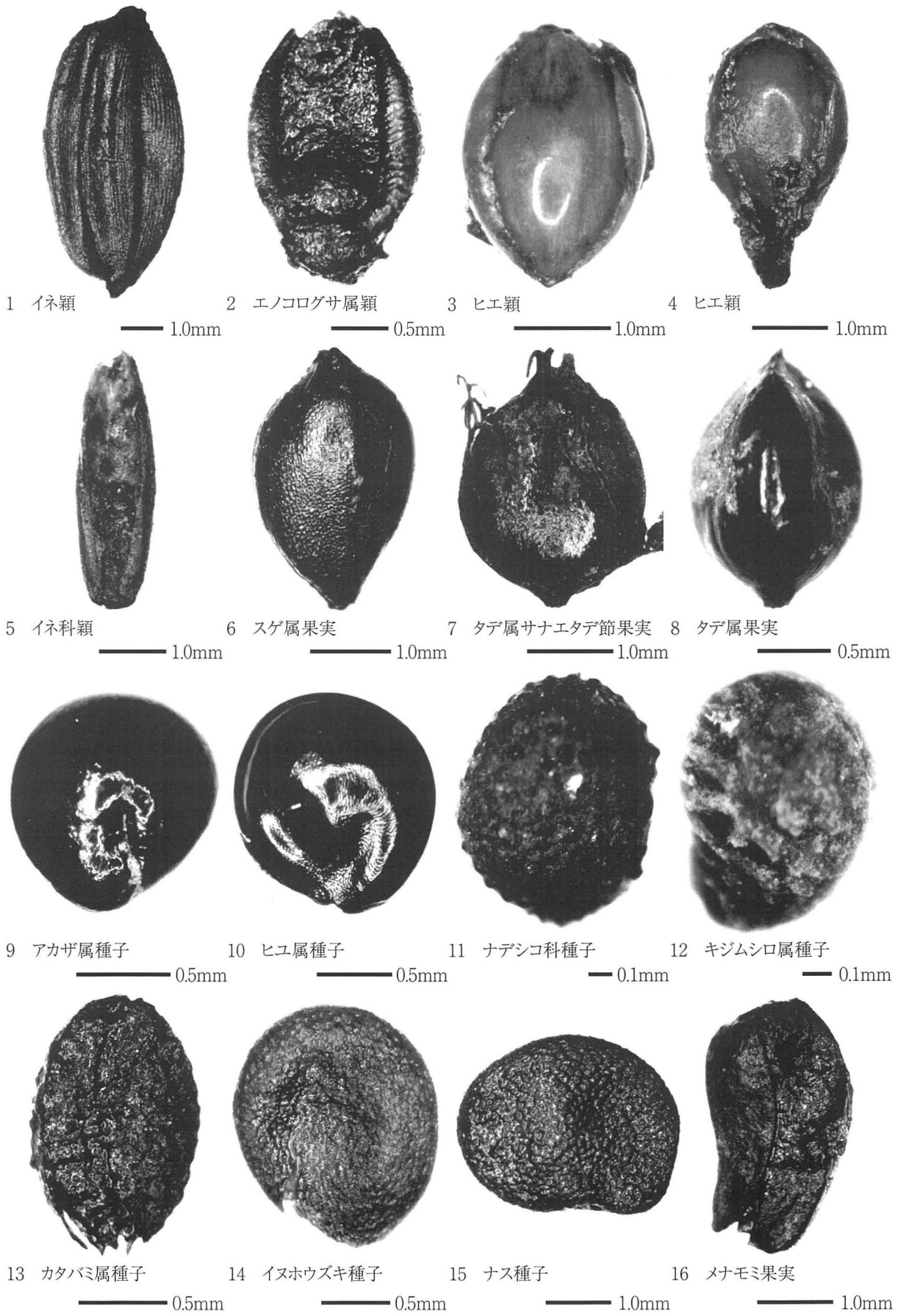
— 10 μ m

柳之御所遺跡第68次発掘調査の珪藻



— 10 μ m

1. *Pinnularia microstauron* 2. *Navicula mutica* 3. *Navicula cryptocephala*
4. *Navicula veneta* 5. *Amphora montana* 6. *Surirella angusta* 7. *Surirella ovata*
8. *Hantzschia amphioxys* 9. *Nitzschia palea* 10. *Nitzschia umbonata*



報告書抄録

ふりがな	ひらいずみいせきぐんはくつちょうさほうこくしょ やなぎのごしょいせき							
書名	平泉遺跡群発掘調査報告書 柳之御所遺跡							
副書名	第68次発掘調査概報							
巻次								
シリーズ名	岩手県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第127集							
編著者名	岩渕 計 西澤正晴(編)							
編集機関	岩手県教育委員会							
所在地	〒020-8570 岩手県盛岡市内丸10-1							
発行年月日	西暦2009年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
やなぎのごしょいせき 柳之御所遺跡	いわてけん 岩手県 にしらいぐん 西磐井郡 ひらいずみちやう 平泉町 ひらいずみあざ 平泉字 やなぎのごしょちない 柳御所地内	03402	NE76-0190	38度 59分 28秒	141度 7分 35秒	2007.05.07 ～ 2007.10.15	1,200㎡	史跡整備に 向けた内容 確認調査
所収遺跡名	種別	おもな時代	おもな遺構		おもな遺物		特記事項	
柳之御所遺跡	居館跡	平安時代	掘立柱建物跡 4棟 土坑 38基 溝跡 42条 ピット 476個 低地(沢跡) 1カ所		かわらけ 渥美・常滑窯産陶器など 輸入陶磁器(白磁・青白 磁・中国陶器) 木製品など			
要約	柳之御所遺跡の68回目の調査である。調査地は中心域東側で、周囲より低い地形の範囲である。過去に周辺を何度か調査しているが、トレンチ調査がおもであり、地形の様相が不明であった。調査の結果、この低い地形は、もともと自然の沢であり、12世紀以前は徐々に堆積が進んだ湿地状態であったことがわかった。その後12世紀になり遺跡が大規模に開発される頃になると、整地が行われていることが明らかとなった。しかし、その整地も沈下と度重なる流水によって12世紀中には削平を受けており、そのため、あまり遺構が残存せず、塀や道路が延長する可能性は低いと推定された。							

岩手県文化財調査報告書 第127集

平泉遺跡群発掘調査報告書

柳之御所遺跡

－ 第68次発掘調査概報 －

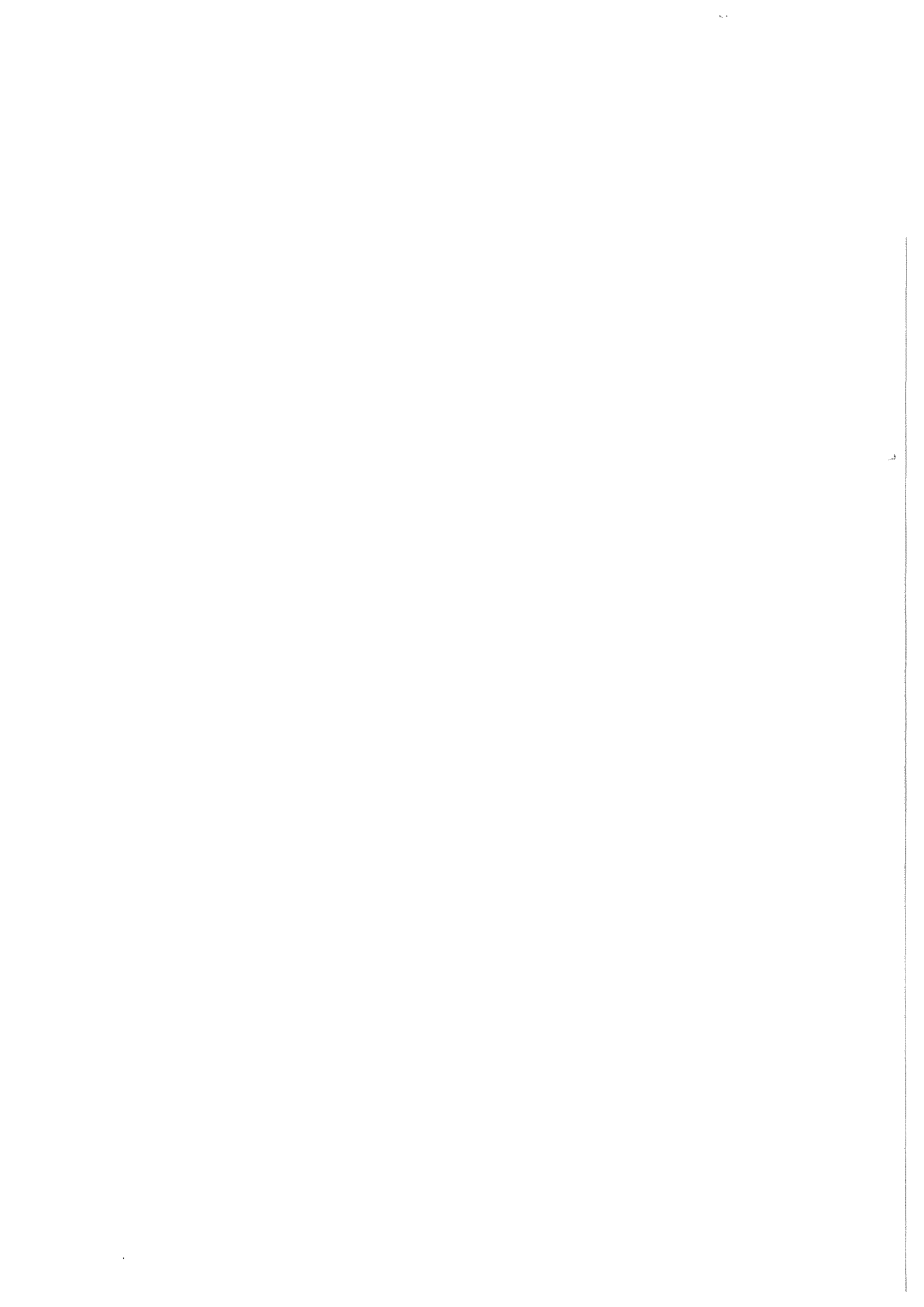
印刷日 平成21年 3 月31日

発行日 平成21年 3 月31日

発 行 岩手県教育委員会生涯学習文化課
〒020-8570 岩手県盛岡市内丸10-1
電話 (019) 629-6171 (代表)

印 刷 株式会社 興版社
〒020-0816 岩手県盛岡市中野一丁目 4-14
電話 (019) 624-3456

©岩手県教育委員会2009



Yanaginogosho Site

The 68th Excavation Report of the Local Government Office in Hiraizumi of the 12th Century



2009

Iwate Board of Education , JAPAN



柳之御所遺跡第68次発掘調査遺構配置図